（大町市埋蔵文化財調査報告書第19集）

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

古　　城

－松本平北部の弥生時代拠点集落跡の調査－

－中世仁科氏関係館跡の調査－

1991

大町市教育委員会

Ⅲ区北側全景

Ⅳ区土塁版築土層

4 号住居跡炉

24号住居跡炉

6 号住居跡南西隅土器出土状況

32号住居跡南西隅土器出土状況

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

古　　城

－松本平北部の弥生時代拠点集落跡の調査－

－中世仁科氏関係館跡の調査－

1991

大町市教育委員会

序

古城遺跡は、大町市街地の南西に形成する段丘上、社松崎地区の見晴らしの良い高台に立地する。今回の調査は送電用鉄塔建て替え工事に先立つ緊急発掘調査である。

調査は遺跡を部分的に4地区に分けて行われたが、予想をはるかに上回る数多くの遺構・遺物が発見された。なかでも注目を集めたのは、本遺跡においては、弥生時代後半の住居跡32軒が調査され、中世仁科氏関係館の一部である土塁・堀なども発見され、当地方における弥生時代集落の在り方、居館の在り方を探る上で極めて重要な新発見を与えることとなった。

本報告書は極力、発掘調査結果の事実記載につとめたものであるが、紙数等の制約から必ずしも意を尽くしきれなかった部分もあるのでご了承いただきたい。本書を弥生時代の研究ベースとして活用され、多くの方々によって研究が深められることを期待したい。

調査に関しては、この仕事に直接あたってくださった調査団長や先生方、さらに熱心に作業に身を投じてくださった作業員の皆さんの多大な御尽力によって当初の目的に達することができました。

この調査に当たり、調査団員の方々、作業員のみなさん、地主及び地元関係各位の多大な御尽力によって、このような成果を得られたことに重ねて感謝を申しあげ、ここに深甚なる敬意を表する次第であります。

平成3年3月

大町市教育委員会
教育長　矢口　格

例　　言

1．本書は、平成１・２年度に株式会社中部電力長野支店長と、大町市教育委員会教育長との契約に基づいて行われた、送電用鉄塔の建て替え事業に伴う、緊急発掘調査「古城遺跡」の報告書である。

2．調査にあたっては、大町市教育委員会が組織した大町市埋蔵文化財調査団により実施された。

3．本調査は、多くの学識経験者、市民、関係機関諸氏の協力からなったものである。

4．調査結果については、調査団員で協議を重ねたが、時間的等の制約があり統一見解に至らなかった。基本的事項の統一はできる限り図ったが、表現方法等に多少の相違がある点は了解されたい。

5．現場測量・整理作業と原稿執筆は関係者の協議により決定した。

- 遺構測量は、荒沢進・島田哲男・清水隆寿・新井和男・臼井潤・横沢和子・北沢和子・牛越真由美が行い、一部㈲写真測図研究所に委託して、Ⅰ区においては写真測図、Ⅲ・Ⅳ区においては光波測量機を用い、多点測量を行い、測量データをコンピュータにより画像処理し、点を結線する測量方法を併用した。
- 遺跡の地形・地質等については、森義直が行った。
- 遺物整理作業は、島田・清水・臼井・横沢・北沢・牛越・金原隆子・中条幸美・小日向美香・富田みつ子が行い、遺物実測は清水が主に、島田・田多井用章が補ない行った。
- 原稿執筆については、第Ⅰ章第１～３節が事務局で、第Ⅱ章第１節が森義直、第Ⅲ章第２節が清水、第Ⅳ章が篠崎健一郎の他は島田が行った。
- 弥生時代の土器に関しては、松本市教育委員会の直井雅尚氏、長野市教育委員会の千野浩氏から、中世陶磁器については、㈶長野県埋蔵文化財センターの市川隆之氏に御教示いただいたので記して感謝したい。
- 遺構写真撮影は島田が主に、清水・臼井が一部行い、遺物写真撮影は臼井が主に行った。

6．方位は都市計画図（１：2,500）から求めた座標北を使用している。

7．本書の編集は、全員協議のもと事務局で行ない、篠崎健一郎が総括した。

8．本書関係の実測図・記録写真・遺物等は大町市教育委員会が保管している。なお、関係資料については、社松崎古城遺跡から略号化し、「ＭＨＪ」と注記した。

本文目次

巻頭図版　1・2

序

例　言

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1

第1節　経過概要 …… 1

第2節　調査体制 …… 2

第3節　調査日誌 …… 3

第4節　調査方法 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 7

第1節　立地と地形 …… 7

第2節　周辺遺跡と古城遺跡の過去の調査 …… 7

第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 12

第1節　遺　構 …… 12

第2節　遺　物 …… 43

第Ⅳ章　結　語 …… 59

写真1～40

図　目　次

図１　古城遺跡発掘区割、位置図（１：2500）…… 5
図２　古城遺跡（居館跡）位置、周辺小字図（１：2500）…… 6
図３　土層柱状図 …… 9
図４　社地区北部周辺の遺跡 …… 10
図５　松本深志高校地歴会1971・92年度調査・遺構図（１：200）…… 11
図６　Ⅰ区全体図（１：60）…… 13
図７　Ⅱ区全体図（１：60）…… 15
図８　Ⅲ区全体図（１）（１：60）…… 17
図９　Ⅲ区全体図（２）（１：60）…… 19
図10　Ⅲ区全体図（３）（１：60）…… 21
図11　Ⅲ区全体図（４）（１：60）…… 23
図12　Ⅲ区遺構断面図（１）（１：60）…… 25
図13　Ⅲ区遺構断面図（２）（１：60）…… 26
図14　Ⅲ区遺構断面図（３）（１：60）…… 27
図15　Ⅳ区全体図（１：60）…… 29
図16　Ⅱ区４号住居跡（上）、５号住居跡（新）（左下）遺物出土状況、５号住居跡（旧）（右下）（１：60）…… 31
図17　Ⅱ区６号住居跡南西隅遺物出土状況（上・１：30）、12号住居跡（１：60）…… 32
図18　Ⅲ区14・16・26号住居跡（１：60）…… 33
図19　15・17号住居跡（１：60）…… 34
図20　19号住居跡(上、１：30)・24号住居跡(下、１：60）礫・遺物出土状況 …… 35
図21　31号住居跡（上、１：60）、32号住居跡（中、１：60、下、１：30）遺物出土状況 …… 36
図22　33・34号住居跡（１：60）…… 37
図23　弥生時代住居跡炉（１）（１：20、４～６・12・14・15号住居跡）…… 38
図24　弥生時代住居跡炉（２）（１：20、17～19・21・23号住居跡）…… 39
図25　弥生時代住居跡（３）、ピット（１：20、24・28・31・32・34・５号住居跡Ｐ５）…… 40
図26　土坑４（上）、土坑６（下）（１：30）…… 41
図27　Ⅳ区西側土塁土層断面図（上～中）、堀確認トレンチ土層断面図（下）（１：60）…… 42
図28　古城遺跡出土弥生時代後半土器模式図（１：８）…… 44
図29　弥生時代中期前半・後期土器（１）（６は１：３、それ以外は１：４）…… 47
図30　弥生時代後期土器（２）（23～26・32～33は１：３、それ以外は１：４）…… 48
図31　弥生時代後期土器（３）（41～48は１：３、それ以外は１：４）…… 49
図32　弥生時代後期土器（４）（63は１：３、それ以外は１：４）…… 50
図33　弥生時代後期土器（５）（１：４）…… 51

図34　弥生時代後期土器（６）（93・94・98・99・111は１：３、それ以外は１：４）…… 52
図35　弥生時代後期土器（７）（112～115は１：３、それ以外は１：４）…… 53
図36　弥生時代後期土器（８）（１：４）…… 54
図37　弥生時代後期土器（９）（143は１：３、それ以外は１：４）…… 55
図38　弥生時代後期土器（10）（１：４）…… 56
図39　弥生時代後期土器（11）（１：４）…… 57
図40　弥生時代後期土器（12）（176～180、１：４）、弥生時代後期鉄製品（181～183、１：２）、古墳時代鉄製品（184、１：２）、中世土器・陶磁器（185～192、１：４）、中世鉄製品、石製品（193～200、１：２）…… 58

写　真　目　次

巻頭図版１　１．Ⅲ区北側全景　２．Ⅳ区土塁版築土層　３．４号住居跡炉

巻頭図版２　１．24号住居跡炉　２．６号住居跡南西隅土器出土状況　３．32号住居跡南西隅土器出土状況

写真１　１．遠景　２．遠景　３．全景

写真２　１．近景　２．近景　３．近景

写真３　１．Ⅰ区全景　２．Ⅱ区全景

写真４　１．Ⅱ区全景　２．Ⅲ区北側全景　３．Ⅲ区北側全景

写真５　Ⅱ区　１．４号住居跡遺物出土状況　２．４号住居跡鉄製釣針等出土状況　３．４号住居跡全景　５．５号住居跡遺物出土状況

写真６　Ⅱ区　１．５号住居跡土器出土状況　２．５号住居跡Ｐ５　３．５号住居跡（新）全景　４．５号住居跡（旧）全景　５．７号住居跡全景

写真７　Ⅱ区　１．６号住居跡全景　２～４．土器出土状況　５．12号住居跡全景

写真８　Ⅰ区　１．８号住居跡　２．８号住居跡の剝片集中　３．９号住居跡土器出土状況　Ⅲ区　４．14号住居跡土器出土状況　５．14号住居跡全景

写真９　Ⅲ区　１．14号住居跡全景　２．15号住居跡南半分検出状況　３．15号住居跡全景

写真10　Ⅲ区　１．15・33号住居跡　２．炉周辺遺物出土状況　３．炉上の壺出土状況　４．炉南西ピット内壺出土状況　５．小型台付鉢、勾玉状石器出土状況　６．16・26号住居跡全景

写真11　Ⅲ区　１．16・26号住居跡全景　２．16号住居跡土器出土状況　３．26号住居跡土器出土状況　４．17号住居跡

写真12　Ⅲ区　１．17号住居跡　２・３．18・35号住居跡　４・５．18号住居跡土器出土状況

写真13　Ⅲ区　１．18号住居跡南壁側　２～５．21号住居跡礫・遺物出土状況

写真14　Ⅲ区　１・２．21号住居跡炉上～西側にかけての集石　３．19号住居跡　４．19・20・23号住居跡

写真15　Ⅲ区　１．19号住居跡　２．23号住居跡　３．22号住居跡・土坑１

写真16　Ⅲ区　１～３．30号住居跡

写真17　Ⅲ区　１～３．31号住居跡

写真18　Ⅲ区　１～４．31号住居跡遺物出土状況　５．32号住居跡遺物出土状況

写真19　Ⅲ区　１～３．32号住居跡

写真20　Ⅲ区　１～４．33号住居跡　５．34号住居跡

写真21　Ⅲ区　１～４．32号住居跡　５．35号住居跡

写真22　Ⅳ区　１～４．24・25号住居跡遺物・礫出土状況

写真23　Ⅳ区　１・２．24・25号住居跡　３．27・28号住居跡

写真24　１～３．Ⅳ区27・28号住居跡　４．Ⅰ区溝１（方形周溝墓？）

写真25　住居跡・炉　１．４号住居跡　２．５号住居跡　３．６号住居跡　４．12号住居跡　５．14号住居跡　６．15号住居跡　７．17号住居跡　８．18号住居跡

写真26　住居跡・炉　１．19号住居跡　２．21号住居跡　３．23号住居跡新炉　４．23号住居跡旧炉　５．24号住居跡　６．31号住居跡　７．32号住居跡　８．34号住居跡

写真27　Ⅰ区古墳　１・２．全景　３・４．周溝内土器集中１

写真28　１～６．Ⅰ区古墳　１．主体部と思われる土坑　２．周溝内土器集中１　３．周溝内土器集中２　４．周溝内土器集中３　５．周溝内土器集中４　６．葺石状の礫の状態

7．Ⅳ区溝２、29号住居跡

写真29　1．Ⅳ区溝２．29号住居跡　2．Ⅲ区土坑２　3．Ⅱ区土坑６＜土拡墓＞　4．Ⅳ区竪穴1

写真30　1．Ⅳ区竪穴１　2・3．Ⅱ区柱穴群１＜中世＞

写真31　1．Ⅳ区南西部分土塁土層　2．Ⅳ区西側土塁土層　3．Ⅲ区北西部土塁土層

写真32　1．Ⅳ区南側の土塁南側に接して確認された堀　2．Ⅲ区東側の現存する土塁　古城遺跡出土遺物　3．15号住居跡出土の勾玉状石製品　4．弥生時代後期の鉄製品
5．６号住居跡出土の石包丁

写真33　出土土器＜弥生時代後期＞　1．４号住居跡　2～5．５号住居跡　6～8．６号住居跡

写真34　出土土器＜弥生時代後期＞　3．５号住居跡　1・2．４号住居跡　4．９号住居跡
5．７号住居跡　6・7．14号住居跡　8・9．15号住居跡

写真35　出土土器＜弥生時代後期＞　1・2．15号住居跡　3．16号住居跡　4～6．17号住居跡
7～9．18号住居跡　10．19号住居跡

写真36　出土土器＜弥生時代後期＞　3．15号住居跡　1．19号住居跡　2・4～6．21号住居跡
8～10．24号住居跡

写真37　出土土器＜弥生時代後期＞　1．24号住居跡　2・3・5．27号住居跡　4．26号住居跡
6．28号住居跡　7・8．30号住居跡　9．31号住居跡

写真38　出土土器＜弥生時代後期＞　1～4．31号住居跡　5～7．32号住居跡　8・9．34号住居跡

写真39　出土土器＜弥生時代後期＞　1～3．31号住居跡　4・5．32号住居跡　6．33号住居跡
7・8．34号住居跡　9．35号住居跡　＜９は弥生時代中期前半の土器＞

写真40　1．第１次開始式　2．Ⅱ区遺構掘り下げ作業風景　3．Ⅰ区クレーンによる写真測図風景
4．Ⅲ区南側検出作業風景　5．Ⅳ区土塁下層調査グリッド掘り下げ作業風景
6．Ⅲ区南側遺構掘り下げ作業風景　7．Ⅲ区北側遺構掘り下げ作業風景　8．作業員記念写真

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　経過概要

１．調査に至るまでの経過

昭和62年４月、大町市大字社松崎地区で、中部電力株式会社長野支店が送電用鉄塔の立て替えを行う計画（送電線77kv池田大町連絡線新設工事）が持ち上がった。大町市教育委員会では、当地にある古城遺跡の保護について、中部電力と数次にわたり協議を実施してきたが、工事を平成元年度に実施することになったため、昭和63年６月14日、最終保護協議を実施し、市教委が主体となって緊急発掘調査を実施することを確認した。

市教委は、平成元年６月19日に中部電力と委託契約を結び調査準備を始め、６月26日から発掘作業を開始した。

２．調査計画の変更とその後の経過

当初計画では、立て替え鉄塔１基と仮設鉄塔１基の約 306㎡について調査を行う予定であったが、調査途中で工事計画の変更があり、新たに仮設鉄塔１基約 100㎡と、工事に伴う周辺掘削個所 450㎡について調査が必要となった。このため、当初は元年度中に報告書の刊行まで終了する計画であったが、市教委が他に抱える発掘調査事業量を考えると、これら全地区を発掘したうえで報告書をまとめあげることは困難と思われたため、中部電力と協議し、元年度の工程は発掘作業を完了するまでとし、報告書作成作業については平成２年度に送ることとした。

変更内容は次のとおりである。

	調査年度（事業内容）	事業費	
変更前	平成元年度（発掘・整理・報告書刊行）	開発側負担額	1,243,210円
変更後	平成元年度（発掘・整理）	開発側負担額	2,884,000円
	平成２年度（整理・報告書刊行）	開発側負担額	1,545,000円

さらに、仮設鉄塔２基の調査を終了した段階で、予想を上回る遺構・遺物が出土したため、事業費の年度配分を次のとおり変更し対応することとした。

	調査年度（事業内容）	事業費	
変更前	平成元年度（発掘・整理）	開発側負担額	2,884,000円
	平成２年度（整理・報告書刊行）	開発側負担額	1,545,000円
変更後	平成元年度（発掘・整理）	開発側負担額	3,243,000円
		保護側負担額	753円
	平成２年度（整理・報告書刊行）	開発側負担額	1,131,000円
		保護側負担額	844円

発掘作業は12月25日に終了した。この間、雨天当による中止を除くと54日間の発掘作業を実施している。発掘作業終了後は事務室において整理作業を進め、本報告に至った。

なお、平成２年度事業分の委託契約は、平成２年４月９日に交わしている。

第 2 節　調 査 体 制

1．調査体制

(1) 大町市教育委員会（文化財担当）

ア．平成元年度

教 育 長　矢口　格　／　社会教育課長　降幡　忠　／　文化財係長兼課長補佐　降旗正光

同係主事　新井和男・島田哲男　／　同係嘱託職員　臼井　潤

同係臨時職員　大和芳子・清水隆寿・横沢和子

イ．平成2年度

教 育 長　矢口　格　／　社会教育課長　降幡　忠　／　文化財係長兼課長補佐　降旗正光

同係主事　新井和男・島田哲男　／　同係主事補　清水隆寿　／　同係嘱託職員　臼井　潤

同係臨時職員　金原隆子・中條幸美・富田みつ子

(2) 大町市埋蔵文化財調査団（市教委が組織）

ア．平成元年度

団　　長　篠崎健一郎　／　副団長　原田　昿　／　調査主任　島田哲男

調 査 員　荒井和比古・荒沢　進・臼井　潤・清水隆寿・関　賢司・幅　具義・森　義直

調査補助員　伊藤真治

イ．平成2年度

団　　長　篠崎健一郎　／　副団長　原田　昿　／　調査主任　島田哲男

調 査 員　荒井和比古・荒沢　進・臼井　潤・清水隆寿・関　賢司・幅　具義・森　義直

(3) 作業員

ア．平成元年度（発掘作業）

青木富士太・飯島楯幸・稲沢光子・薄井志げ子・遠藤充吉・上條光則・北沢栄子・北沢　茂・下川悦治・関　節子・関宗治郎・服部力夫・原山昭信・降籏　章・降籏くに子・降籏芳人・峯村道雄・横沢力門

イ．平成2年度（整理作業）

田多井用章

2．調査協力者

調査にあたり、多くの方々からご指導・ご協力を賜りました。以下、ご芳名を記し、御礼に替えさせていただきます。（敬称略）

(2) 指導者・協力者

設楽博己／樋口昇一／武藤雄六／百瀬長秀／市川隆之／石上周蔵／市村勝己／野村一寿／竹内　稔／原　明芳／神沢昌二郎／直井雅尚／竹原　学／山田真一／山下泰永／小林康男／笹沢　浩／小林秀夫／森島　稔／岩崎卓也／神村　透／土屋　積／金井正三／青木和明／宮下健司／矢口忠良／矢島宏雄／佐藤信之／臼田武正／高村博文／田中正治郎／堤　隆／花岡　弘／青沼博之／桐原　健／関沢　聡／平林　彰／百瀬新治／山岸洋一／山田瑞穂／大沢　哲／会田　進／平出一治／守矢昌文／高見俊樹／五味一郎／小池　孝／小平和夫／宮城孝之／末木　健／前田清彦／石川日出志／寺崎裕助／川村浩司／

北村　亮／泉　拓良／石黒立人／秋山道生／橋本裕行／飯塚　誠／市沢英利／高橋龍三郎／中沢道彦／木村隆一／福島邦男／町田勝則／千野　浩／小山岳夫／青木一夫／新谷和孝／竹内靖長

(2)　地権者

荒井孝次・勝野弘道・高橋鴻生・八丁はま子・降籏政登・降籏芳人

第3節　調査日誌（発掘作業のみ）

6月26日(月)　曇時々晴　開始式。Ⅰ区重機による表土除去。残土整理、遺構検出。Ⅱ区人手による表土除去。

6月27日(火)　曇一時雨　Ⅱ区人手による表土除去、遺構検出。4～7号住を検出。

6月28日(水)　雨　雨により作業中止。

6月29日(木)　曇時々晴　Ⅰ区再度遺構検出。8・9住と古墳周溝を検出。一部掘り下げ。

6月30日(金)　曇時々晴　Ⅰ区8・9住・古墳周溝掘り下げ。Ⅱ区4・5住掘り下げ。

7月1日(土)　晴のち曇　Ⅰ区古墳一部掘り下げ、精査。8・9住床面精査。古墳検出状況の写真撮影。Ⅱ区4・5住掘り下げ。中世と思われる柱穴検出。

7月2日(日)　曇　Ⅰ区古墳主体部・東側土層セクション作成。

7月3日(月)　雨のち曇　雨により作業中止。雨が止んだ合間を見てⅠ・Ⅱ区セクション作成。

7月4日(火)　曇　Ⅰ区古墳精査。Ⅱ区4・5住精査。6・7住掘り下げ。

7月5日(水)　晴　Ⅰ区古墳精査。Ⅱ区4・5住精査。6～9住床掘り下げ。

7月6日(木)　晴　Ⅰ区古墳精査。Ⅱ区5～12住掘り下げ。

7月7日(金)　晴　Ⅰ区古墳精査。Ⅱ区5～12住掘り下げ、精査。

7月8日(土)　晴　Ⅰ区古墳精査。Ⅱ区5～13住掘り下げ、精査。

7月9日(日)　雨　休み。

7月10日(月)　曇時々晴　Ⅰ区古墳精査。Ⅱ区4～13住精査。

7月11日(火)　曇のち晴　Ⅰ区古墳精査。Ⅱ区4～13住精査。

7月12日(水)　雨　4住炉実測。

7月13日(木)　雨　5住炉実測。

7月14日(金)　晴　Ⅰ区古墳精査。Ⅱ区4～13住精査。

7月15日(土)　晴　土層調査。　Ⅰ区古墳周溝内土器精査。

7月16日(日)　雨　休み。

7月17日(月)　曇時々晴　Ⅱ区5・6住精査。

7月18日(火)　晴　Ⅰ区午前中古墳及び周辺の清掃、午後写真測量。Ⅱ区4～13住精査。

7月19日(水)　晴　写真測量の撮影結果が出るまで休み。

7月20日(木)　晴　Ⅰ区古墳遺物取り上げ。礫精査、除去。Ⅱ区4～13住精査。

7月21日(金)　晴　機材の片付け。Ⅱ区5住床下精査。

7月22日(土)　晴　残りの実測完了。本日にて第1期調査終了。

8月2日(水)　　重機によりⅠ区埋め戻し。

11月6日(月)　晴時々曇　本日より第2期調査開始。重機によりⅢ区表土除去。

11月7日(火)　曇　重機によりⅢ区表土除去。

11月13日(月)　曇一時雨　測量基準設定。

11月20日(月)　曇時々晴　Ⅲ区残土整理。遺構検出。14～20住検出。

11月21日(火)　曇時々晴　遺構検出。

11月22日(水)　曇時々晴　14～20住掘り下げ。

11月23日(木)　曇　休み。

11月24日(金)　曇時々晴　14～20住掘り下げ。

11月25日(土)　曇時々晴　重機によりⅣ区表土除去。

11月26日(日)　曇一時晴　休み。

11月27日(月)　曇一時晴　休み。

11月28日(火)　曇のち雨　休み。

11月29日(水)　曇時々晴　Ⅲ区14～23住掘り下げ、精査。Ⅳ区残土整理。遺構検出。

11月30日(木)　曇一時晴　Ⅲ区14～23住掘り下げ、精査。Ⅳ区遺構検出。

12月1日(金)　曇一時晴　Ⅲ区14～23住掘り下げ、精査。Ⅳ区遺構検出。南側の砂礫層が土塁の積み上げ土であることが判る。24・25住検出。

12月2日(土)　曇一時晴　Ⅲ区14～23住掘り下げ、精査。

12月3日(日)　　休み。

12月4日(月)　曇一時晴　Ⅲ区14～23住掘り下げ、精査。18・21・22住検出。Ⅳ区24・25住掘り下げ。土塁の掘り下げ。

12月5日(火)　晴　Ⅲ区14～23住精査。21住実測。

12月6日(水)　曇　Ⅲ区16住下に26住が見つかり掘り下げ、精査。21住実測。

12月7日(木)　曇　Ⅲ区コーディックによる測量。15住炉実測。14住実測。

12月8日(金)　曇時々雪　Ⅲ区コーディックによる測量。14住炉・17住炉・21住炉実測。Ⅳ区測量基準杭設置。

12月9日(土)　雪時々曇　Ⅲ区南側の補助的実測。コーディックの結線。

12月10日(日)　晴　休み。

12月11日(月)　晴　Ⅲ区北側重機による表土除去。Ⅳ区24住実測。

12月12日(火)　曇　遺構検出。測量基準杭設置。Ⅳ区24住実測。土塁下層より27・28住検出、掘り下げ。

12月13日(水)　曇一時晴　Ⅲ区15・18・30～34住掘り下げ。Ⅳ区24住エレベーション測量。27・28住精査。

12月14日(木)　曇一時雨　Ⅲ区15・18・30～34住掘り下げ。Ⅳ区27・28住精査。午後雨により中止。

12月15日(金)　雪のち晴　Ⅲ区コーディックによる測量。Ⅳ区15住集石実測。

12月16日(土)　晴　Ⅲ区15・18・30～34住精査。33住実測。
12月17日(日)　晴　休み。
12月18日(月)　曇　Ⅲ区15・18・30～34住精査。Ⅳ区土塁土層図作成。
12月19日(火)　曇　Ⅲ区15・18・30～34住床面精査。32住実測。32住炉実測。34住下層に35住検出、掘り下げ。
12月20日(水)　曇　Ⅲ区15・18・30～34住床面精査。31住実測。31住炉実測。
12月21日(木)　曇　Ⅲ区コーディックによる測量。31住実測、エレベーション測量。Ⅳ区27住北側土塁下層検出、掘り下げ。
12月22日(金)　晴　Ⅲ区コーディックによる測量。Ⅳ区27住北側・竪穴南側精査、実測。
12月23日(土)　曇のち晴　休み。
12月24日(日)　曇のち雪　休み。
12月25日(月)　曇　Ⅲ区重機による埋め戻し。Ⅳ区土層図作成。機材撤収。本日にて第2期調査終了。

第4節　調査方法

古城遺跡（居館跡）は、社・松崎の古城・南堀地籍を中心に広がる遺跡である。

今回の調査地は、鉄塔工事区ごと任意にⅠ～Ⅳ区を設定し（仮設鉄塔2基の工事区をⅠ区（81㎡）とⅡ区（100㎡）、既存鉄塔除去工事に伴う掘削地をⅢ区（450㎡）、既存の鉄塔建て替え地をⅣ区（225㎡）。Ⅰ区は南堀地籍、Ⅱ・Ⅲ区は古城地籍、Ⅳ区はヤキバ地籍にあたる）、工事区の範囲全面を調査対象とし、調査を実施した。

表土除去にあたっては、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区では重機を使用し、Ⅱ区では人力で行った。Ⅲ区については、廃土置き場の関係から2回に分けて調査を行った。Ⅳ区においては、既存鉄塔が残っていたために、その部分を残し、撤去の際に立ち合い調査を行うこととし、その部分を除き調査した。また、Ⅳ区においては当初予想もしなっか土塁が地中に埋没して約半分の高さ（約2ｍ）が残っており、調査深度がその部分だけ深くなり、土塁上部が砂礫層であり崩落の危険があること、南東隣には人家がありそれに対して崩落の危険等があることなど、当初は土塁が残っていることを予想しなかった結果から、崩落防止対策等や多量な廃土置き場が確保できず、部分的な調査となってしまった。このことからⅣ区においては、鉄塔撤去時に調査員が立ち合い、その脚部分だけを除去するようにし、また新鉄塔建設時にも撤去工事同様に調査員が立ち合い、極力、脚の基礎部分の掘削だけを行い鉄塔建設を進めることとした。Ⅳ区においては以上のようなことから未調査区が部分的ではあるが、鉄塔下に残り保存されている。

住居番号は、1971・72年の松本深志高校地歴会の調査で1～3号住居跡の3軒の住居跡が検出されていることから、それに続けて4号住居跡からとした。

測量は、座標方眼・標高ベンチマーク（トラバース杭）を設定し使用した。座標・標高は、1988年度に実施した中城原遺跡の測量成果を基に㈲山光測舎に委託して求め、Ⅰ区ではＴ－２（Ｘ＝＋54732、488・Ｙ＝－56581、179・標高713,628ｍ）、Ⅱ区ではＴ－４（Ｘ＝＋54858、904・Ｙ＝－56627、086・標高715,910ｍ）、Ⅲ区ではＴ－６（Ｘ＝54890、067・Ｙ＝－56603、666、標高715,666ｍ）、Ⅳ区ではＴ－３（Ｘ＝＋54795、263・Ｙ＝－56602、861・標高716,327ｍ）を設置し、使用した。測量作業はＴ－１～Ｔ－６より求めた点の杭に基いた簡易遣り方測量及び平板測量と㈲写真測図研究所に委託し、Ⅰ区ではクレーンによる写真測図、Ⅲ・Ⅳ区では光波測量機を用い、多点測量を行い、測量データをコンピュータにより画像処理し、点を結線する測量を併用し進めた。

方位は座標北を使用した。

遺跡記号は、社松崎古城遺跡から略語化し、「ＭＨＪ」とし、遺物への注記もそれでおこなった。

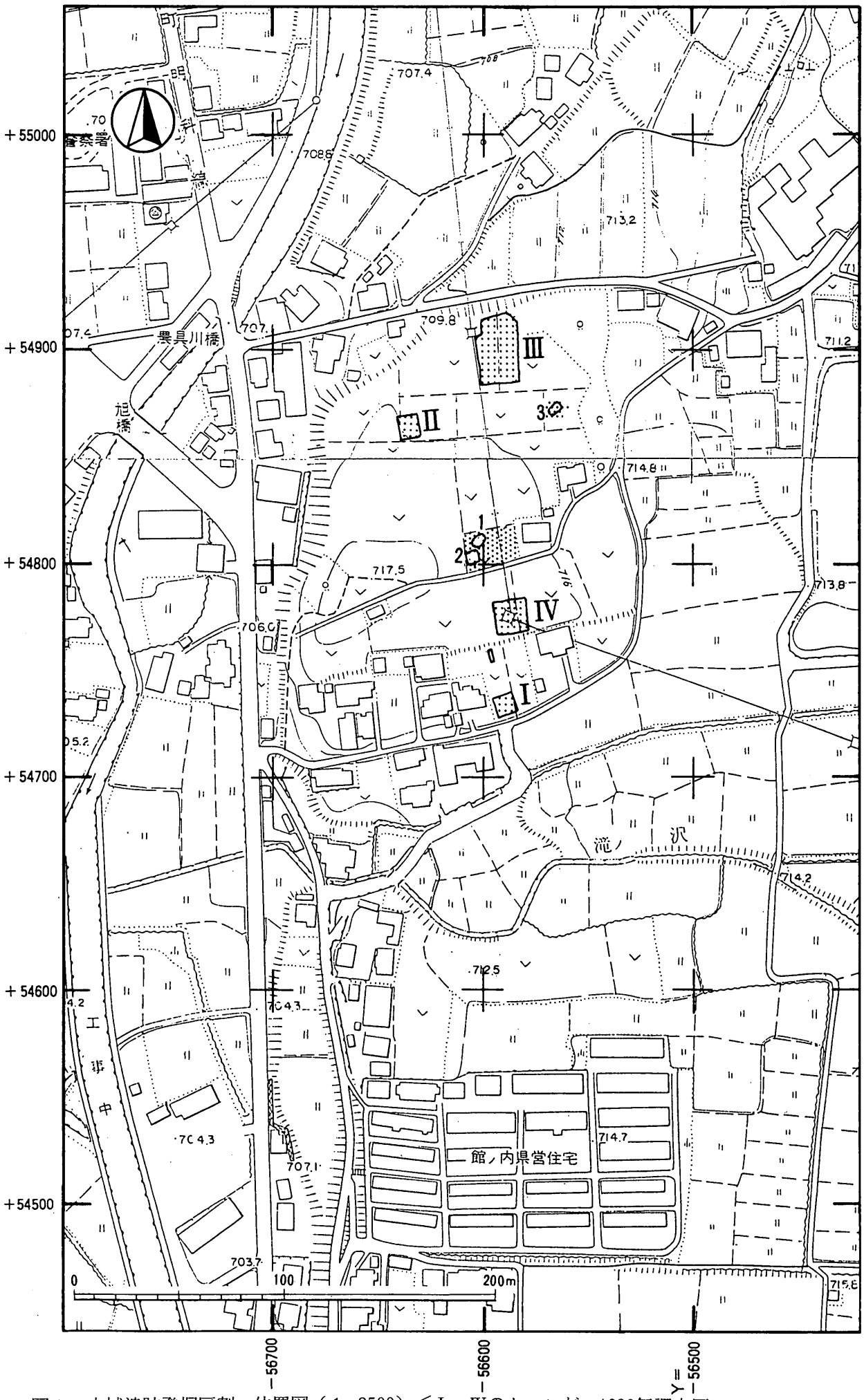


図1　古城遺跡発掘区割、位置図（1：2500）＜Ⅰ～Ⅳのトーンが、1989年調査区。1～3の周辺トーンは、1971・72年松本深志高校調査区。1～3はその時に検出された住居番号。＞

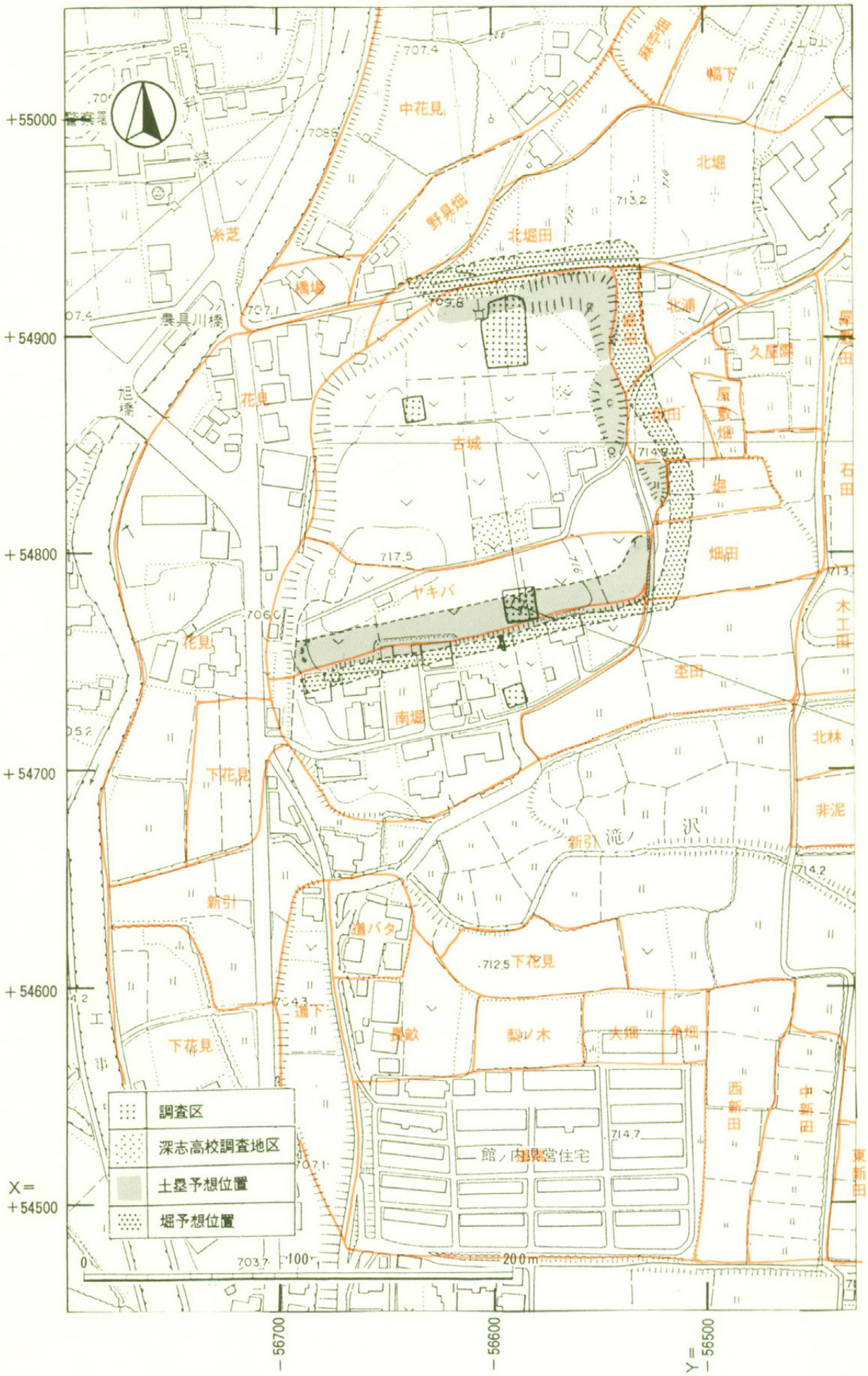


図２　古城遺跡（居館跡）位置、周辺小字図（１：2500）

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第 1 節　立地と地形

1．遺跡付近の立地と地形・地質

本遺跡は松本盆地の北部大町市社地区にあり、高瀬川によって形成された館の内段丘面の海抜715ｍ付近にある。

この段丘の西は大町の平地が広がり、更にその西はフォッサマグマの西部山地である後立山連峰が南北に連らなっている。遺跡の東側はフォッサマグマの堆積物である第三紀層と安山岩よりなる東部山地の低山帯が、遺跡との比高300ｍ～400ｍでほぼ南北に連なり、山麓で館の内段丘面と接している。遺跡から山麓までの距離は450ｍ程である。

2．館の内段丘と遺跡

館の内段丘面と高瀬川の現河床との比高は15ｍ～20ｍで、高瀬川に平行に南北に伸び、南に行く程低くなり池田町付近で消滅する。この段丘面は東部山地からの崩土や崖錐が押し出し、全体として暖かく西側に傾斜している。

この段丘堆積物は西部山地から高瀬川により運ばれた花崗岩や酸性火成岩類の砂礫が主体であり、最上部は東部山地より沢によって運ばれたロームと、第三系の風化物の混成によって生じた粘性の極めて大きい粘土層、細砂層、それに場所によっては、二次的のロームに起因する黒ボカ土などが数十cm～２ｍ弱と東に厚く西に行く程薄く乗っている。段丘の堆積物中に１次堆積のロームが見られないことから、この段丘面の形成は沖積統によるものと言える。

発掘地点に限って観察すると、遺跡は段丘上の段丘崖東側に広がり、遺構面までの土層は土塁部分を除けば、全体的に浅く、約30～40cm程でベースの黄褐色砂礫層に達する、水はけの良好な場所である。

第 2 節　周辺遺跡と古城遺跡の過去の調査

社地区北部は、弥生時代～平安時代の遺跡、中世仁科氏関係の遺跡・居館が多く見られる。古城遺跡から北側の丑館遺跡、南側の館ノ内居館跡にかけては段丘上に続き、縄文時代後期～中世まで重複しており、特に弥生時代・古墳時代・平安時代後半、中世（鎌倉・室町時代）の遺物が多く見られ、同一存在したとも思えるような一連の大遺跡群として見られる。

特に弥生時代では、滝ノ沢を隔て南側の対岸にある中城原（中条原）遺跡の館ノ内県営住宅の地点（道端地籍）において、1988年県営住宅建て替えに伴う調査で、弥生時代中期住居跡１軒・集落の環濠もしくは集落を区切る溝３本、弥生時代後期の方形ないしは円形周溝墓７基、木棺墓３基が発見された。この中で特に注目されるのは、周溝墓と木棺墓の存在で、調査地区内では、墓の他に弥生時代後期の遺構は見られないことから、弥生時代後期においては、滝ノ沢を挟んで古城遺跡側は住居集落域、中城原遺跡道端地籍側は墓域とした集落構造関係があったものと推定される。また、古墳時代中期においては、やはり中城原遺跡の1988年の調査で３基の古墳が検出されており、今回の本遺跡調査においても古墳時代中期の古墳が検出されたことから中城原遺跡から本遺跡にかけて古墳群が形成されていた可能性が高く、これを造営した集落は、まだ遺跡内容がはっき

りとしていないが、段丘下の旭町遺跡あたりにある可能性が高いと思われる。

古城遺跡は過去においてから、弥生時代の遺物が多く出土することが知られており、1971・72年松本深志高校地歴会により２次に渡って調査が行なわれ（図５）、住居跡３軒と中世と思われる土坑、石組が検出されている（土坑は、調査の結果報告である「あぜみち」においては、住居の貯蔵穴とされているが、主柱穴がこの位置に１本あれば４本主柱となること、住居跡面積に位べて大きく、方形に近いことから中世の土坑が切り合ったものと予想される。ちなみにこの場所から刀子と思われる鉄製品が出土しており、弥生時代と報告されてはいるが、中世の遺物と考えたい）。住居跡は、１号住居跡が石囲い埋甕炉をもつ４本主柱の楕円形、２号住居跡が、埋甕炉をもつ４本主柱の方形、３号住居跡が石囲い埋甕炉をもつ４本主柱の隅丸長方形である。１～３号住居跡とも弥生時代後半の住居跡で、遺物は実見してないが報告から見て、１号住居跡は、平均的な箱清水式期、２・３号住居跡は、箱清水式期の中でも新しい時期のものと考えられる。

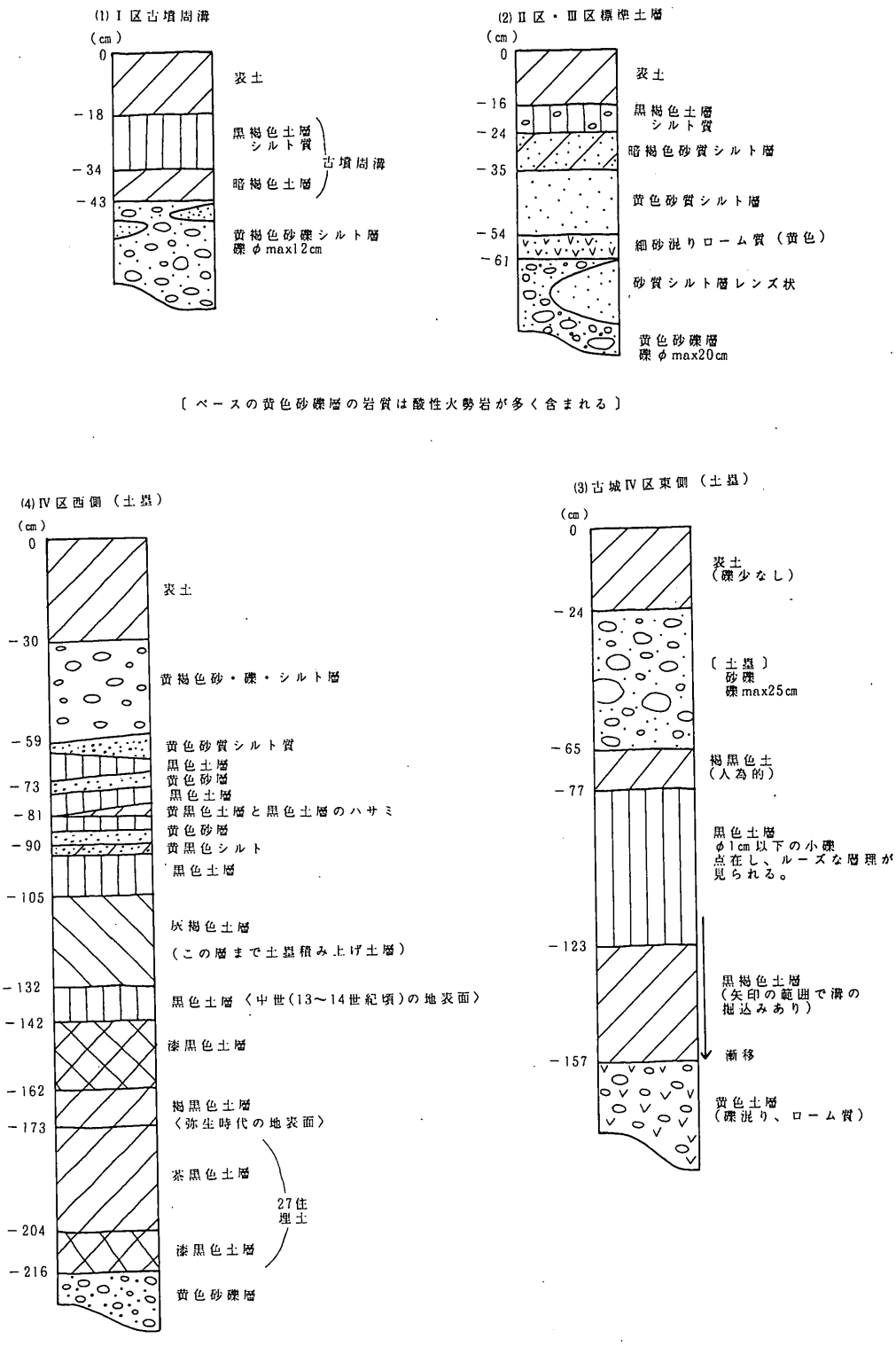
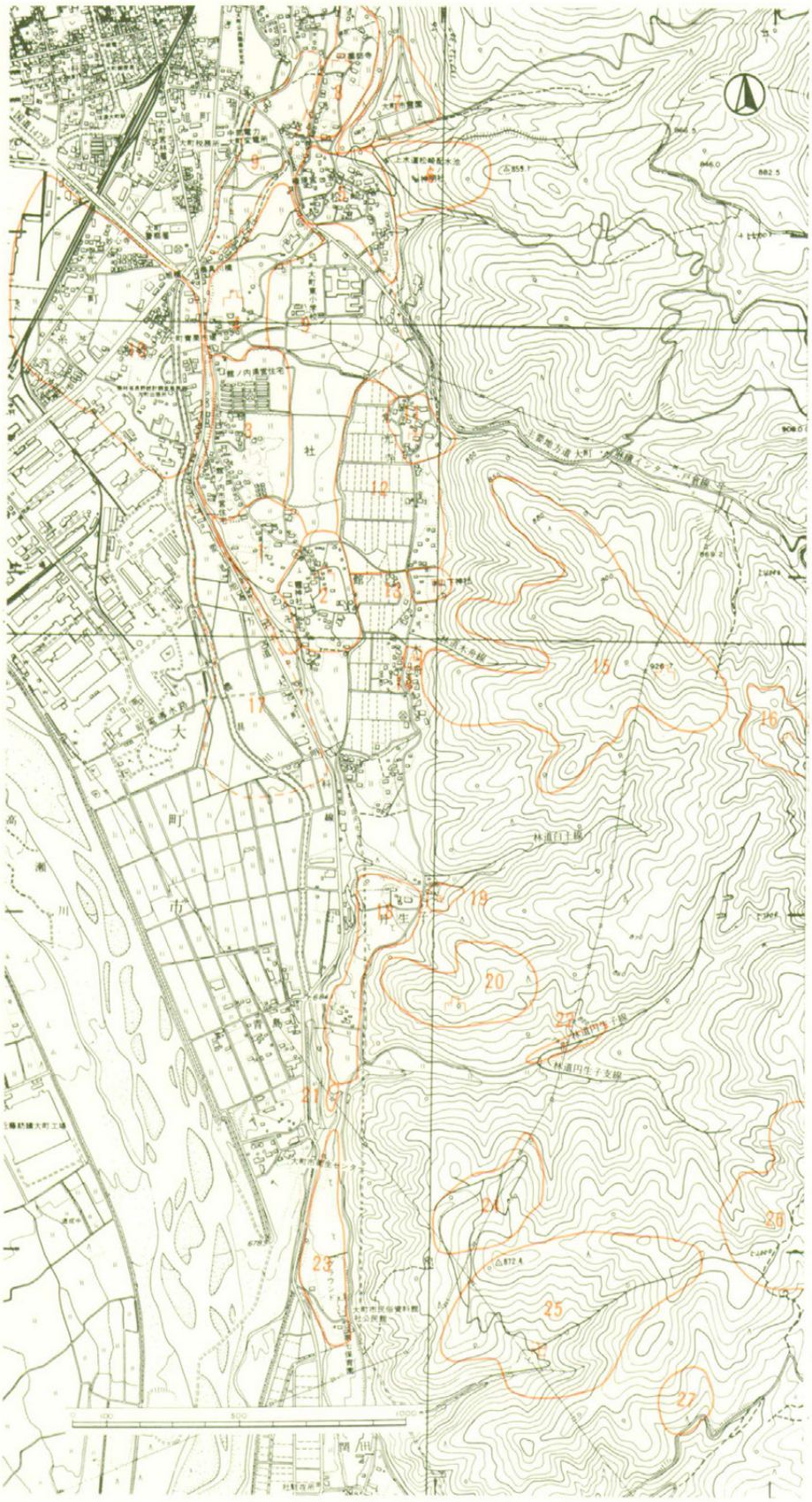
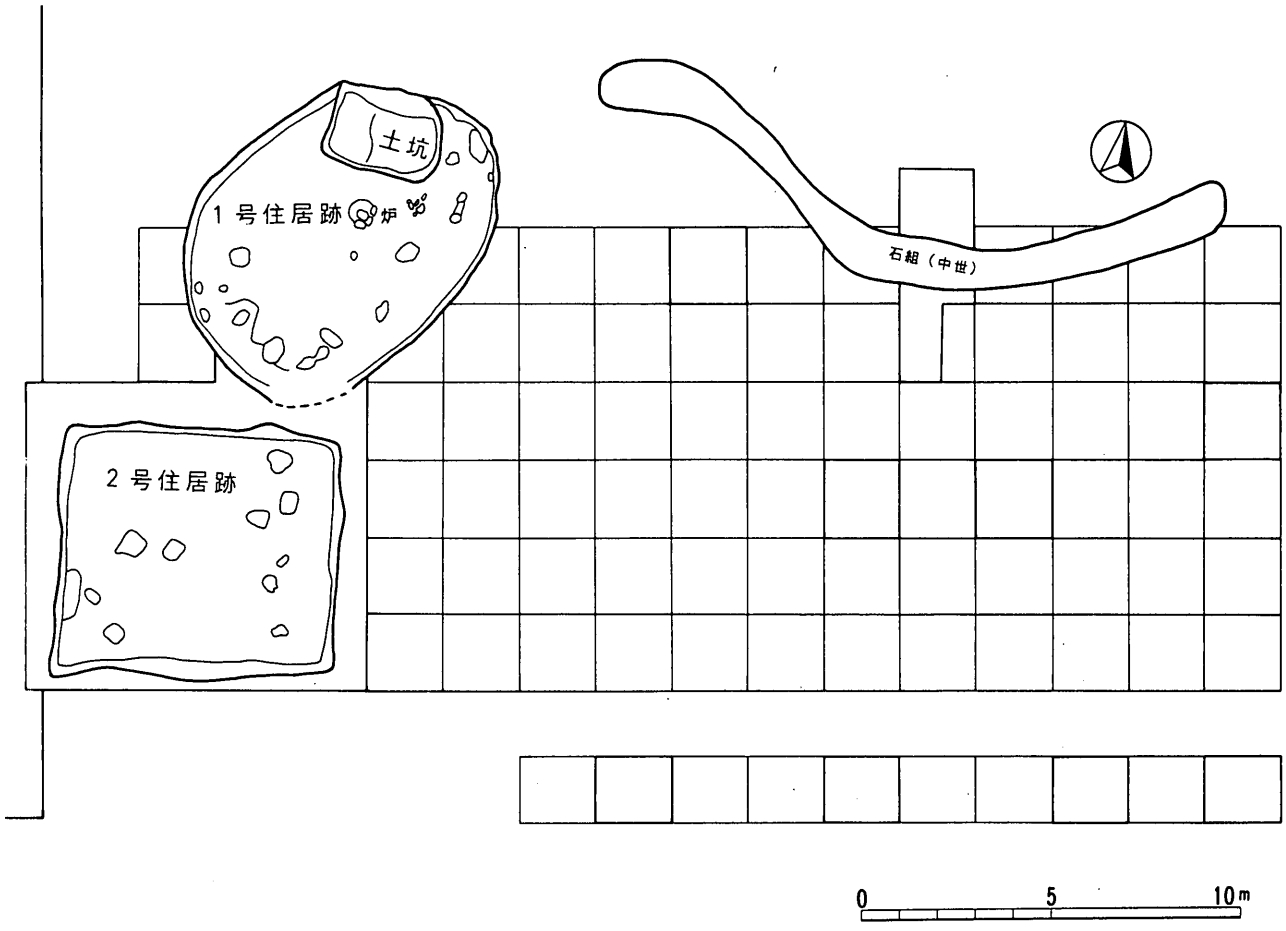

(1) I 区古墳周溝
(cm)
0
−18
−34
−43
表土
黒褐色土層
シルト質
暗褐色土層
古墳周溝
黄褐色砂礫シルト層
礫φmax12cm
(2) II 区・III 区標準土層
(cm)
0
−16
−24
−35
−54
−61
表土
黒褐色土層
シルト質
暗褐色砂質シルト層
黄色砂質シルト層
細砂混りローム質（黄色）
砂質シルト層レンズ状
黄色砂礫層
礫φmax20cm
〔ベースの黄色砂礫層の岩質は酸性火勢岩が多く含まれる〕
(4) IV 区西側（土塁）
(cm)
0
−30
−59
−73
−81
−90
−105
−132
−142
−162
−173
−204
−216
表土
黄褐色砂・礫・シルト層
黄色砂質シルト質
黒色土層
黄色砂層
黒色土層
黄黒色土層と黒色土層のハサミ
黄色砂層
黄黒色シルト
黒色土層
灰褐色土層
（この層まで土塁積み上げ土層）
黒色土層〈中世(13〜14世紀頃)の地表面〉
漆黒色土層
褐黒色土層
〈弥生時代の地表面〉
茶黒色土層
27住
埋土
漆黒色土層
黄色砂礫層
(3) 古城 IV 区東側（土塁）
(cm)
0
−24
−65
−77
−123
−157
表土
（礫少なし）
〔土塁〕
砂礫
礫max25cm
褐黒色土
（人為的）
黒色土層
φ1cm以下の小礫
点在し、ルーズな層理が
見られる。
黒褐色土層
（矢印の範囲で溝の
掘込みあり）
漸移
黄色土層
（礫混り、ローム質）
〔ベースの黄色砂礫層の岩質は酸性火成岩が多く含まれる〕

図3　土層柱状図



1　館ノ内居館跡
2　古町遺跡
3　中城原遺跡
4　古城遺跡
5　松崎遺跡
6　長平Ⅱ遺跡
7　長平Ⅰ遺跡
8　丑館遺跡
9　松崎下湿地帯（水田跡地域）
10　旭町遺跡
11　常光寺跡
12　常光寺遺跡
13　北野神社跡
14　常福寺跡
15　木舟城跡（北城・南城跡）
16　青木城跡
17　館ノ内下湿地帯（水田跡地域）
18　前畑遺跡
19　浄珍寺跡
20　丹生子城跡
21　丹生子関所跡
22　竜泉寺跡
23　二本松遺跡
24　北谷遺跡
25　山寺廃寺跡
26　堂平遺跡
27　上在家遺跡

図4　社地区北部周辺の遺跡



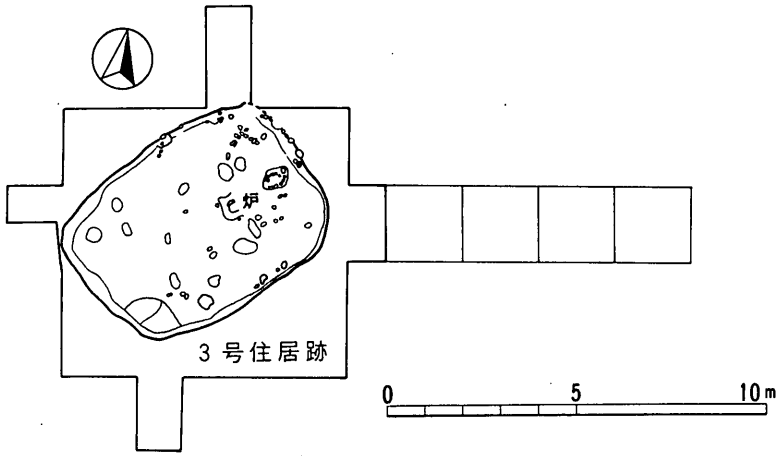


図５　松本深志高校地歴会1971・72年度調査・遺構図（１：200）＜「あぜみち21・22号」1972・73を参考に作成。住居はすべて弥生時代後期。土坑・石組は、中世と思われる。＞

第Ⅲ章　遺構と遺物

第1節　遺　　構

調査は遺跡中心部範囲内をⅠ～Ⅳ区まで4ケ所部分的に調査し、縄文時代後期前半堀ノ内式期土坑1基<土坑7>、弥生時代住居跡32軒・弥生時代溝1基<溝1>（古墳周溝に切られ、直角的に曲がった溝で方形周溝墓のコーナー部分と考えられる）、古墳1基、古墳の周溝の一部と思われる溝1基<溝2>、古墳時代中期（5世紀後半～6世紀前半）土坑2基<土坑2・4>（土坑2は土壙墓、土坑4は古墳の主体部の可能性が強い）、平安時代土坑2基<土坑5・6>（両者とも土壙墓と考えられる。土坑6は検出面より完形の黒色土器杯が出土・土坑5は周辺より平安時代の土器が出土）、中世の建物跡を伴なうと思われる竪穴1基、中世の土坑2基<土坑1・3>、中世の建物跡の一部と思われる柱穴群2ケ所、土塁<Ⅲ区北端とⅣ区南側で確認>と弥生時代集落、中世居館跡を中心に小規模な調査範囲でありながら多数の遺構が検出され、一大遺跡であることが確認された。以下中心となる弥生時代住居跡の概略を記す。

◦　弥生時代住居跡

検出された住居跡すべて弥生時代の竪穴式住居跡であった。32軒中、35号住居跡が中期前半、8、28号住居跡が中期後半の他は、すべて弥生時代後期に属するものである。以下各住居跡を形状・規模・主軸・主柱穴本数・炉の形状、その他（貯蔵穴・周溝など）の順に概略を記す（住居跡は略し、○住と記し、規模は全体を検出できないものが多数で短軸のみ判るものは短、長短の規模がはっきりしないものは不明、主柱穴本数で( )を付けたものは推定である。）

4住――小判形、短4.35m、N8°W、（4本）、石囲埋甕炉、炉北側にも柱穴有、東壁際一段高い。

5住――小判形、長5.15m、N10°W、（4本）、石囲埋甕炉（内部土器片敷）、ベッド状遺構・新旧2面有・貯蔵穴2<入口と入口に近い主柱穴横>、7住に切られる。炭化材有、焼失家屋。

6住――隅丸長方形、不明（大型な住居跡）、N5°E、（6本）、石囲埋甕炉、南西隅に完形品多し。11・12を切る。

7住――隅丸長方形、不明、N33°E、不明、貯蔵穴1<入口>、5住を切る。

8住――隅丸方形、4.4×4.4m、N0°、（4本）、地床炉、貯蔵穴2<奥壁寄り>、剝片集中区有。10住に切られる。

9住――小判形？、不明、N10°E、古墳周溝・土坑5に切られる。

10住――隅丸長方形？、不明、N25°E。

11住――不明、12住に切られる。

12住――小判形、5.4×4.4m、N38°W、4本、石囲炉、6住に切られる。

13住――不明、15住に切られる。

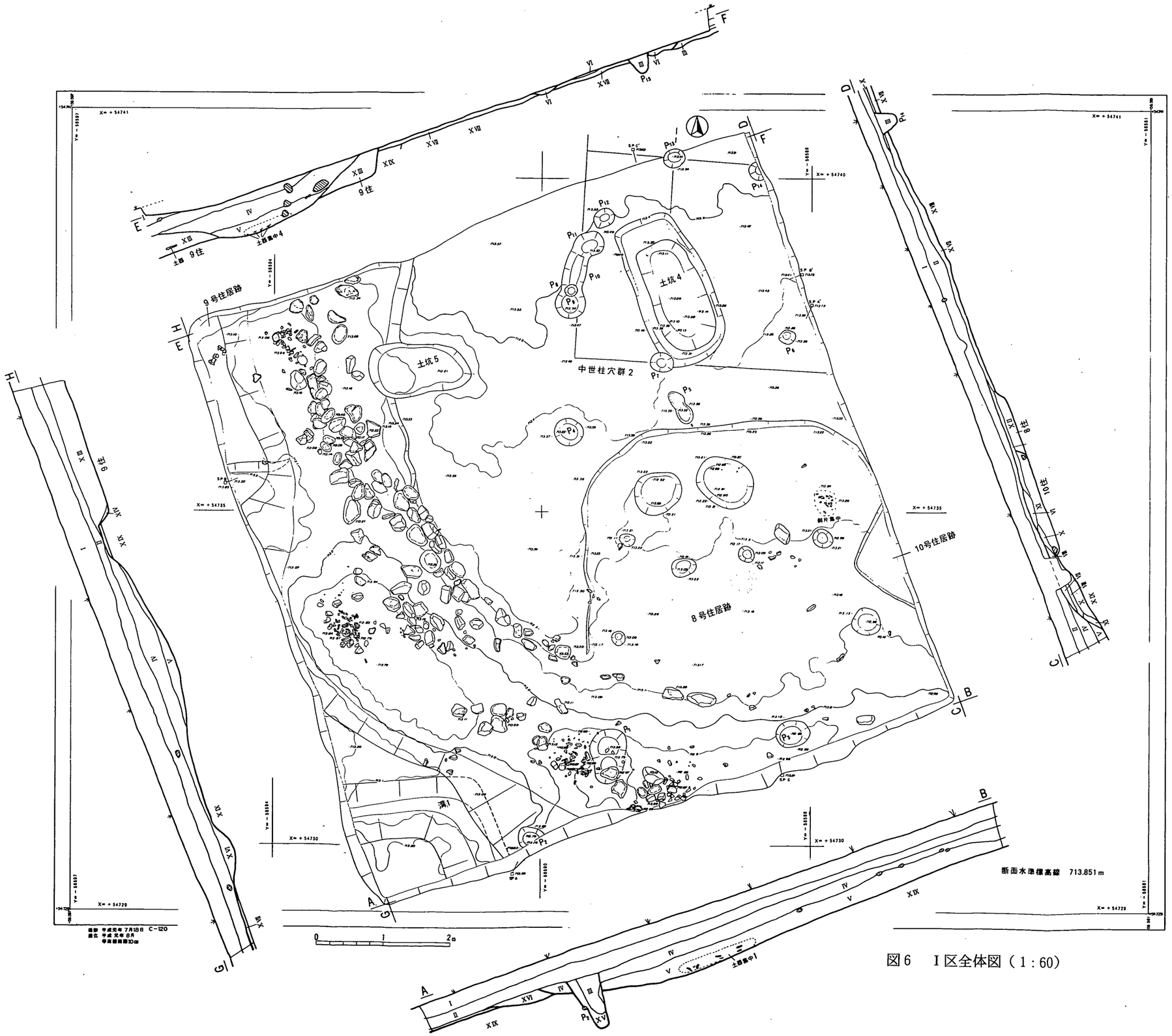
14住――小判形（楕円形）、5.4×4.2m、N85°W、4本、石囲炉、貯蔵穴1<入口>。

15住――小判形、短7.4m（大型な住居跡）、N90°W、（4本）、石囲埋甕炉、周溝有、炉南西側に胴上半部完形の壺が入ったピット有、17・33住を切る。

16住――隅丸長方形、6.05×5m、N58°W、不明、貯蔵穴1<入口>、17住を切り、26住に切られる。

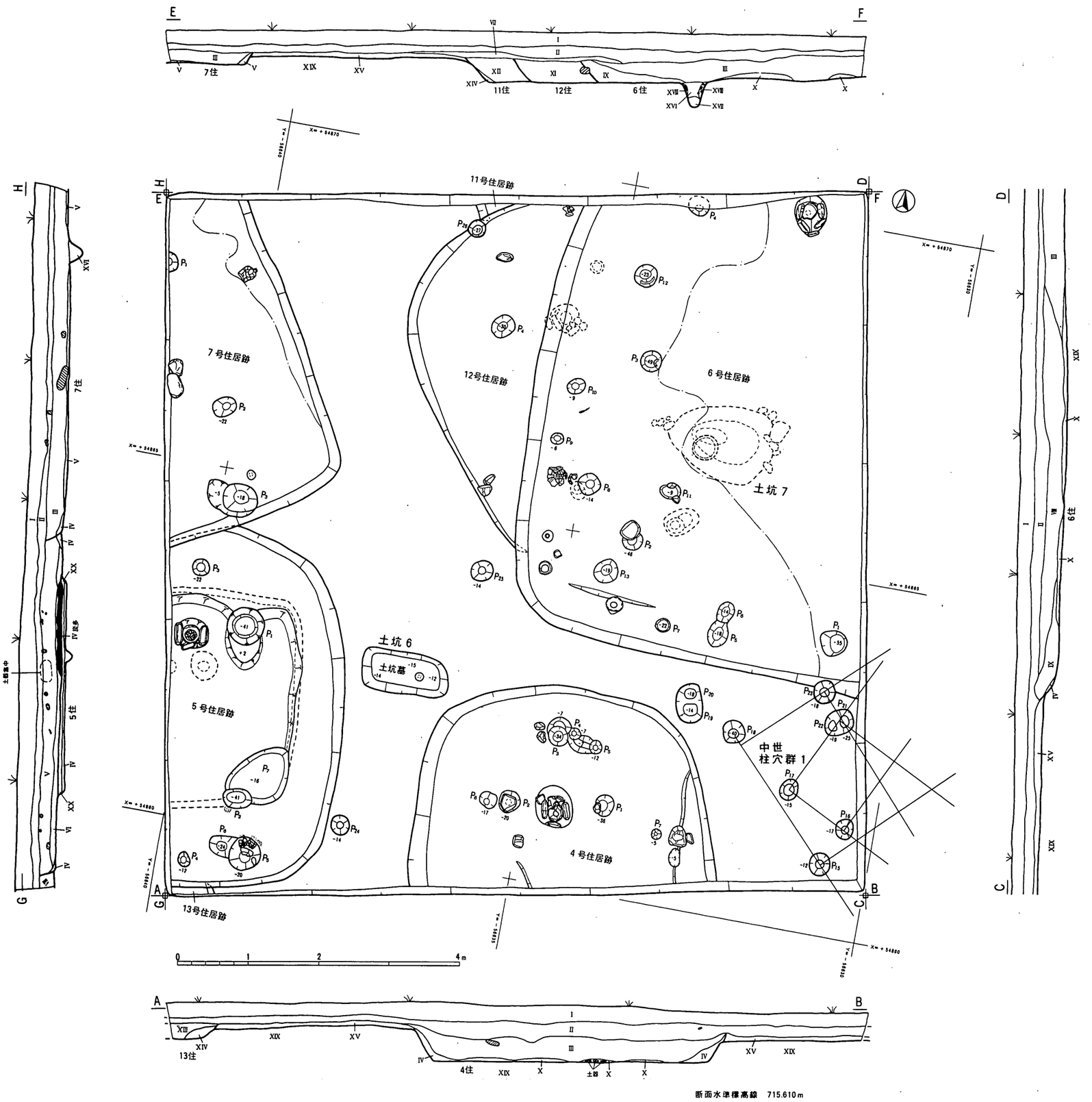
17住――小判形（隅丸長方形）、8.3×6m、N38°W、（4本）、石囲炉・掘り方のみ（炉2ケ所有）、15・16住に切られる。

18住――小判形（楕円形）、9.4×5.2m（大型な住居跡）、N30°W（4本）、石囲埋甕炉、掘り方のみ（炉



I　表土（黒褐色土）
II　黒褐色土（黄褐色砂土、炭粒を含む）
III　黒褐色土（黄褐色砂土を含む）
IV　黒色土（黄褐色砂土を、砂礫、炭粒を含む）
V　黒褐色土（黄褐色砂土、砂礫をやや多く含む）
VI　砂礫層（古墳版築か?）
VII　暗褐色土（砂礫を含む）
VIII　暗褐色土（黄褐色砂土を含む）
IX　暗黄褐色土（黄褐色砂土を含む）
X　暗褐色土（砂礫を多く含む）
VI～Xは古墳版築の土層と思われる。
XI　暗褐色土（10住埋土）
XII　黒褐色土（8住埋土）
XIII　黒褐色土（9住埋土）
XIV　暗黄褐色土（砂礫を含む。9住埋土）
XV　暗褐色土（砂礫を含む）
XVI　暗褐色土（砂礫を多く含む）
XVII　暗褐色土（漸移層）
XVIII　黄褐色砂土層（シルト質）
XIX　黄褐色砂礫層

図6　I区全体図（1：60）



Ⅰ　表土（耕作土・黒褐色土）
Ⅱ　黒褐色土（炭粒を含む）
Ⅲ　黒褐色土（黄褐色砂をわずかに含む。炭粒を含む。Ⅱ層より黒い）（4・6・7住埋土）
Ⅳ　黒褐色土（黄褐色砂を多く含む。4～7住埋土）
Ⅴ　黒褐色土（炭粒を多く含む。土器片多し。5住埋土）
Ⅵ　黒色土（炭を多く含む。粉状の炭多し。焼土粒を含む。5住埋土）
Ⅶ　暗茶褐色土（黄褐色砂を含む）
Ⅷ　黒色土（炭粒・黄褐色土粒を含む。6住埋土）
Ⅸ　暗褐色土（炭粒・黄褐色砂を含む。6住埋土）
Ⅹ　黒褐色土（炭粒を含むⅣ層より黒い）
Ⅺ　暗褐色土（炭粒・黄褐色土を含む。12住埋土）
Ⅻ　暗褐色土（Ⅺ層よりやや黒みが薄い。11住埋土）
ⅩⅢ　暗褐色土（黄褐色砂をわずかに含む。13住埋土）
ⅩⅣ　暗褐色土（黄褐色砂を多く含む）
ⅩⅤ　暗茶褐色土（黄褐色砂を多く含む。漸移層）
ⅩⅥ　黒褐色土（黄褐色土・炭粒を含む）
ⅩⅦ　暗褐色土
ⅩⅧ　暗褐色土（黄褐色砂礫を多く含む）
ⅩⅨ　黄褐色砂層（部分的に礫を含む）
ⅩⅩ　黄褐色土（砂質・5住貼床）

図7　Ⅱ区全体図（1：60）

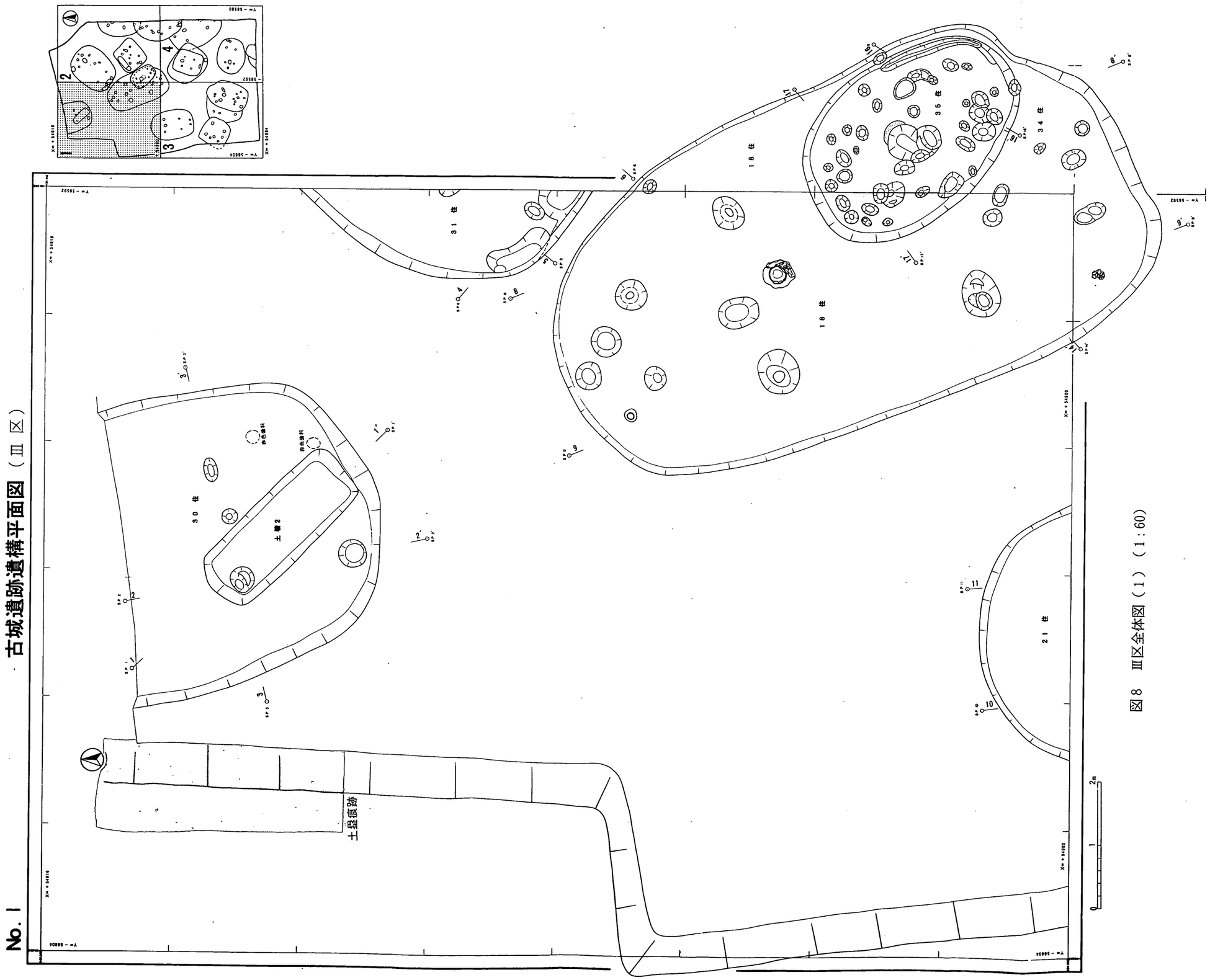


図8　Ⅲ区全体図（1）（1：60）

No. 2

古城遺跡遺構平面図（Ⅲ 区）

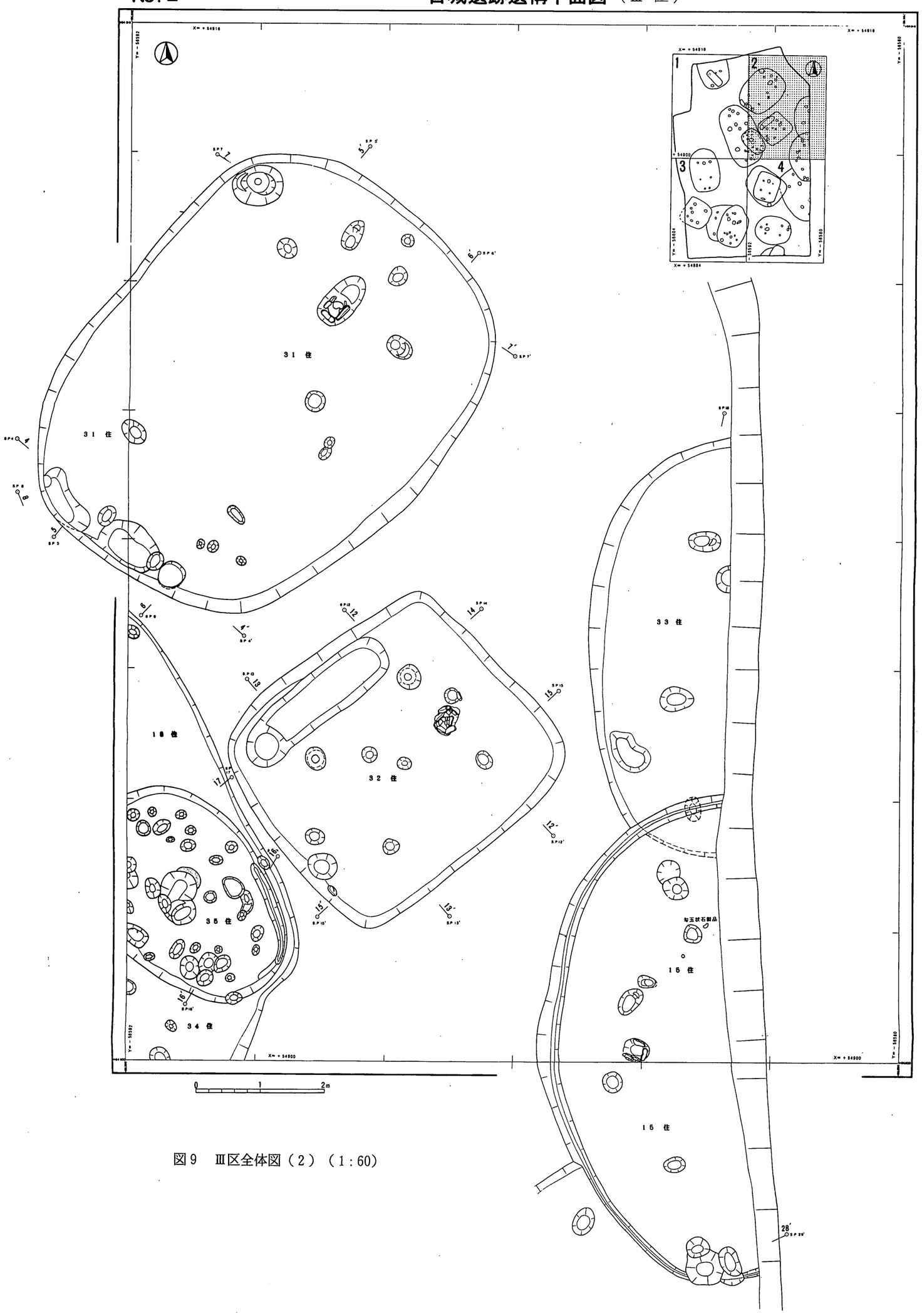


図9　Ⅲ区全体図（2）（1：60）

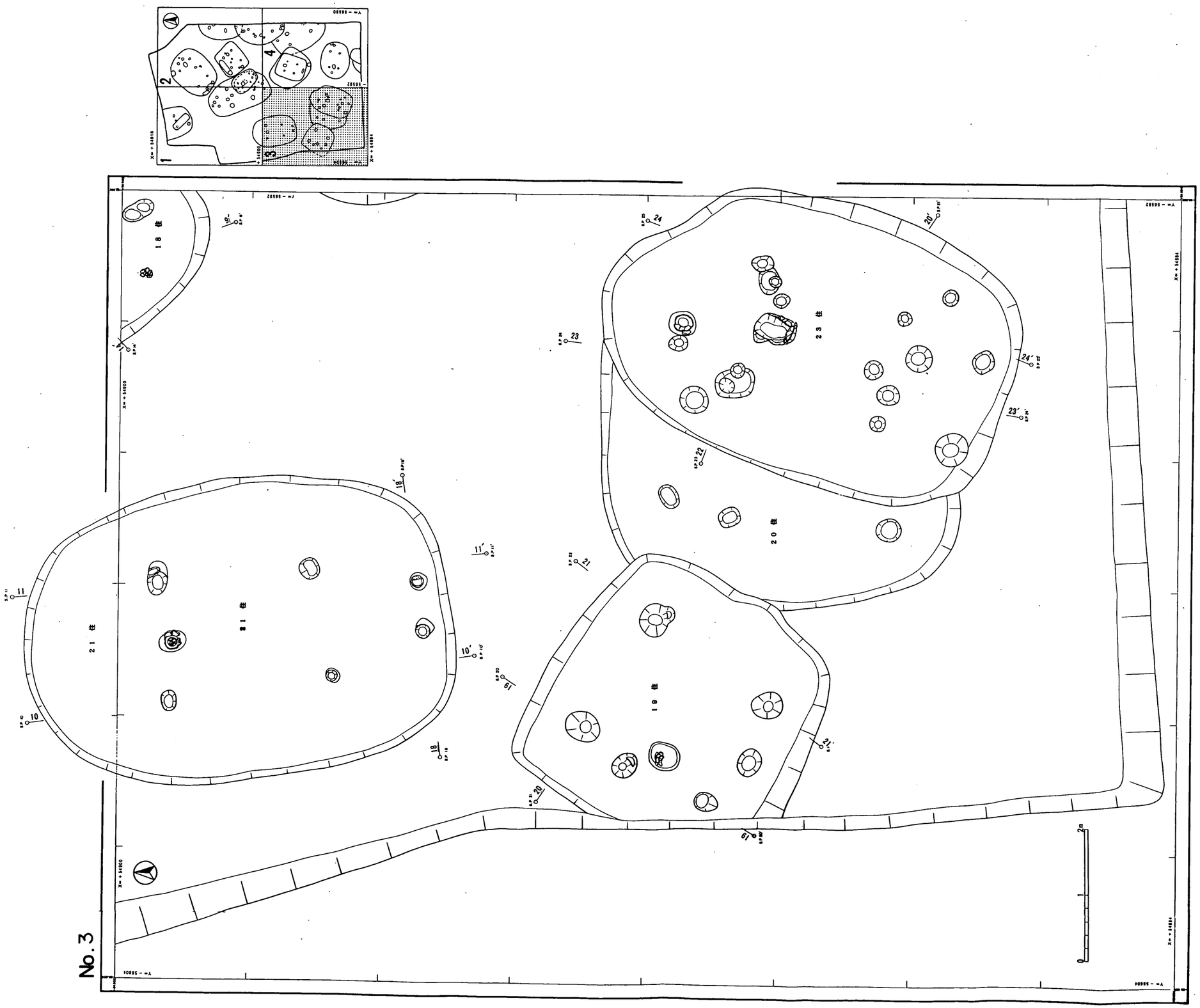
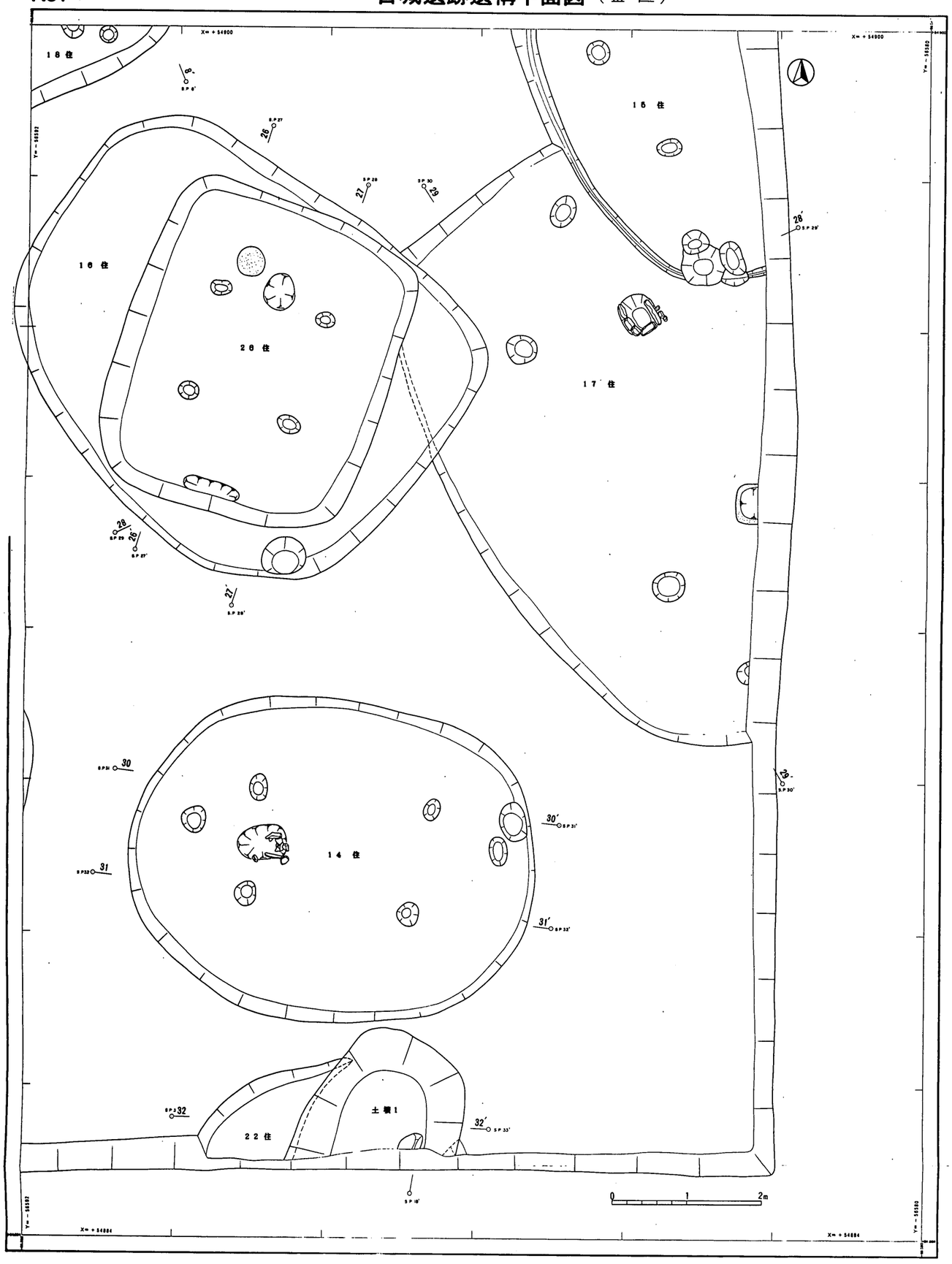


図10　Ⅲ区全体図（3）（1:60）

古城遺跡遺構平面図（Ⅲ 区）



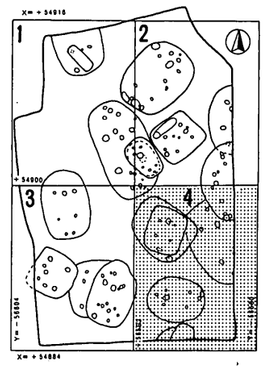


図11　Ⅲ区全体図（4）（1：60）

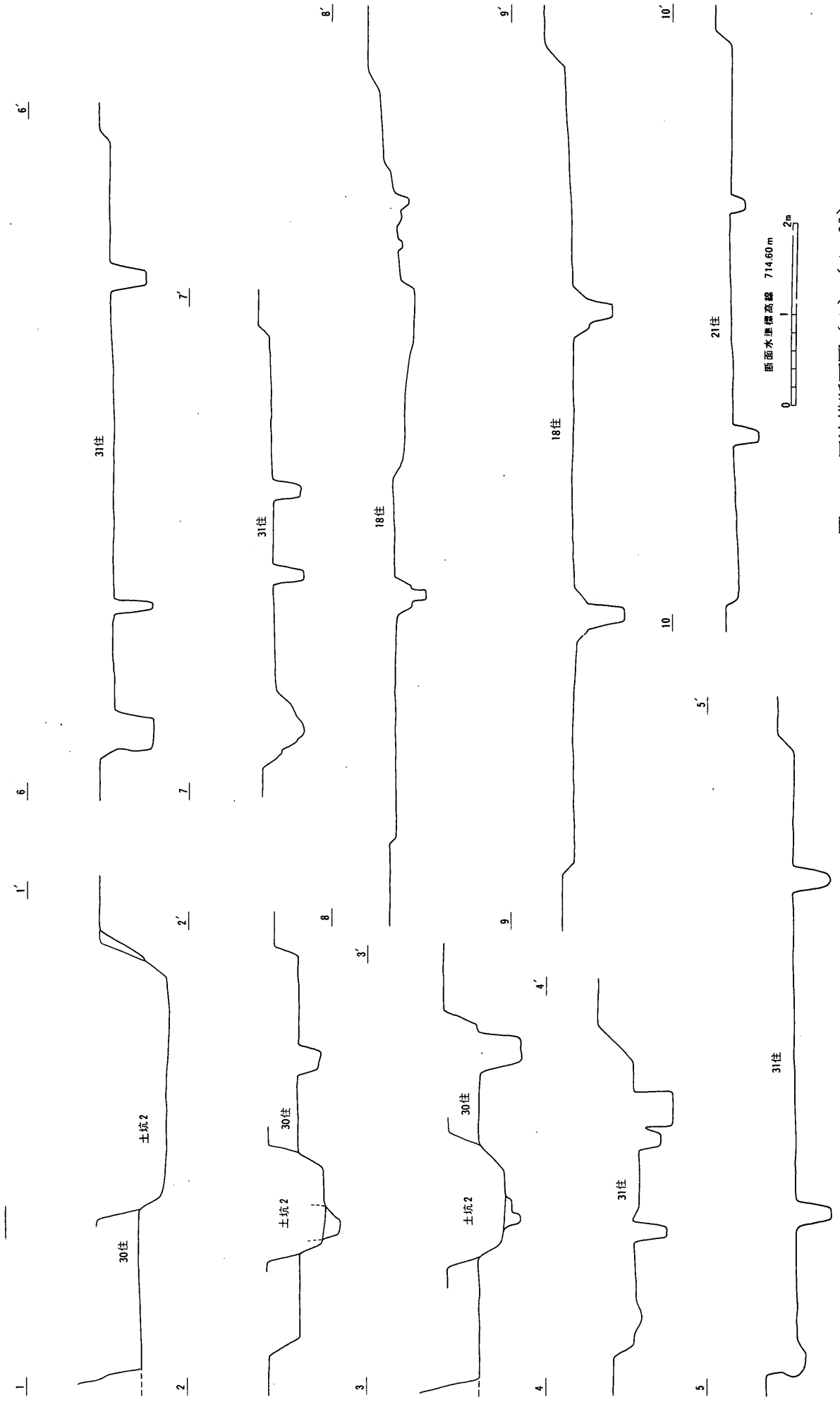


図12 Ⅲ区遺構断面図（1）（1：60）

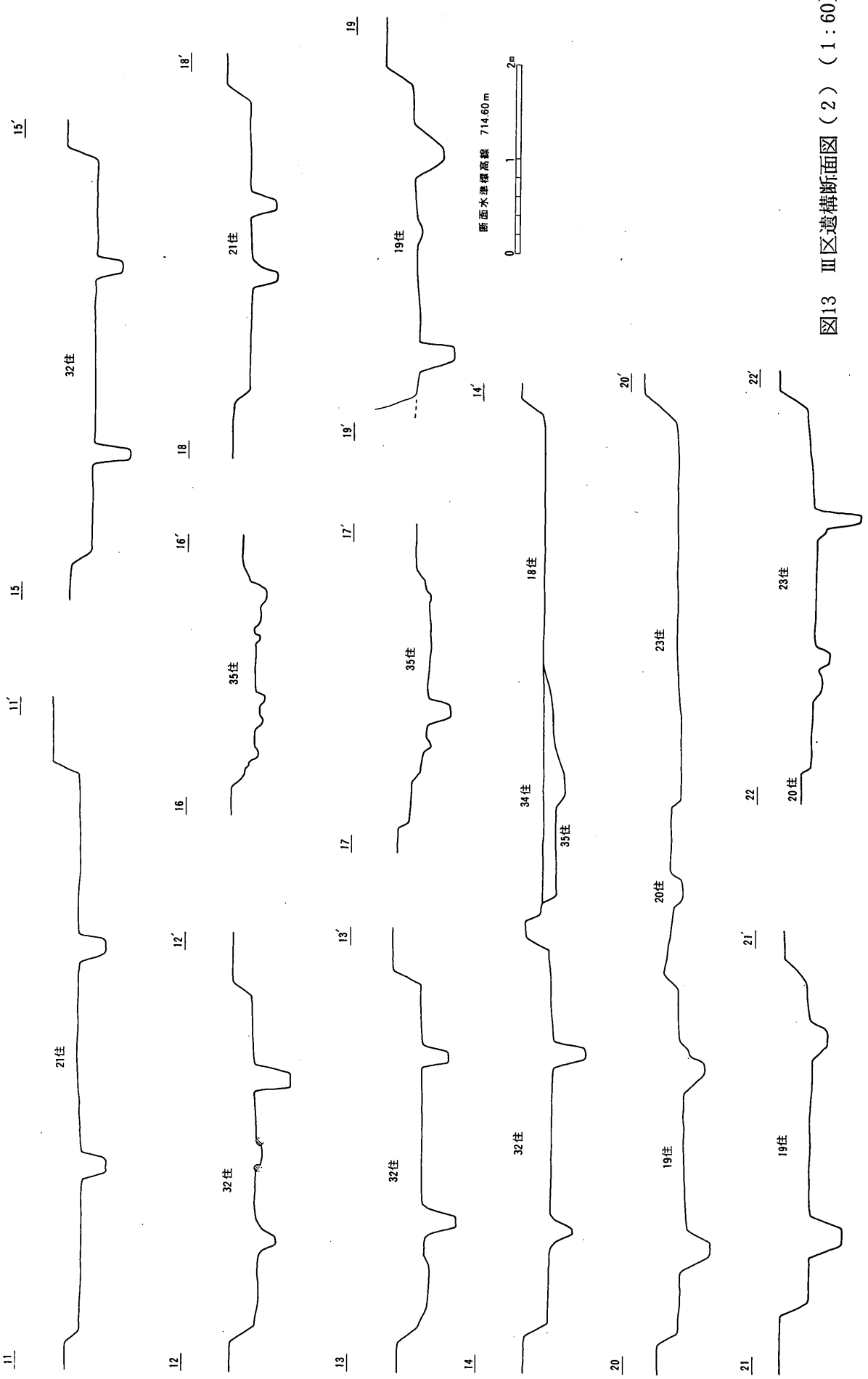


図13　Ⅲ区遺構断面図（2）（1：60）

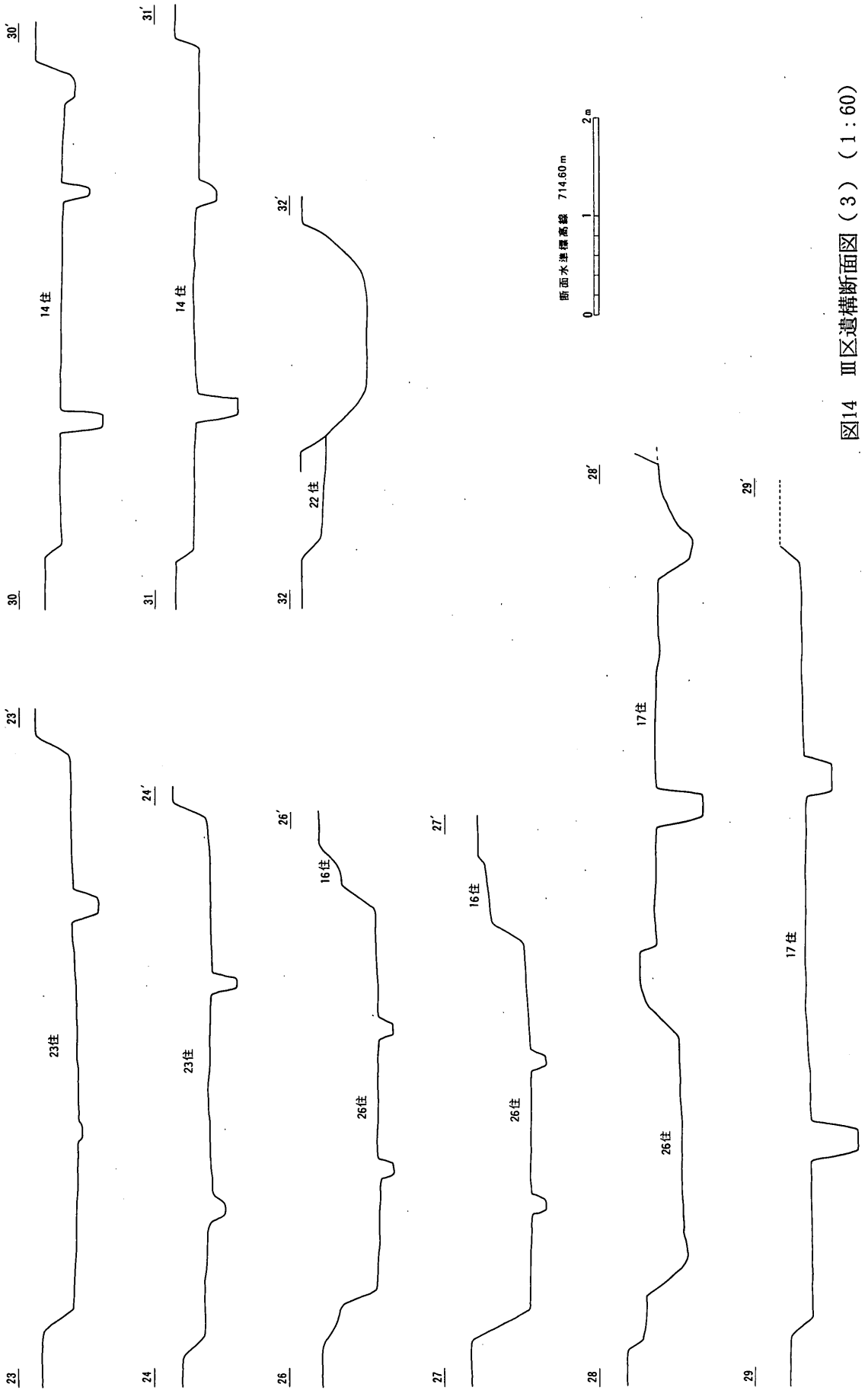


図14　Ⅲ区遺構断面図（3）（1：60）

２ケ所有）、35住を切り、34住に切られる。

19住――隅丸方形、4.2×4.2m、N57°W、４本、掘り方のみ、20住を切る。

20住――隅丸方形？（小判形？）、長5.4m、N０°、（４本）、19・23住に切られる。

21住――小判形、6.55×4.6m、N７°W、４本、石囲埋甕炉（内部は土器片敷）。

22住――小判形、短3.65m、N10°E、不明、土坑１に切られる。

23住――小判形（隅丸長方形）、6.3×4.3m、N20°E、４本、石囲炉・埋甕炉（炉２ケ所に有）、貯蔵穴１<入口>、立て替え有。

24住――隅丸長方形（小判形）、6.4×4m、N77°W、（４本）、石・土器片囲土器片敷炉、25住を切る。

25住――不明、24住、竪穴１に切られる。

26住――隅丸長方形、4.3×3.65m、N17°E、４本、地床炉、炉の北西に焼土有、16住を切る。炭化材多し焼失家屋。

27住――小判形、長6.8m、N０°（４本）、不明、貯蔵穴１<入口>、28住を切る。

28住――不明、埋甕炉。

29住――小判形？、短4.2m、N70°E、不明、溝２に切られる。

30住――小判形、短4.7m、N17°W、（４本）、不明、貯蔵穴<入口>、床面上に赤色塗料の散布２ケ所有、土坑２に切られる。

31住――小判形、7.2×5.6m、N41°E、４本、石囲埋甕炉、貯蔵穴３<入口部分２、奥壁北側１>。

32住――隅丸方形、4.4×4m、N48°E、４本、石囲土器片敷炉、貯蔵穴１<入口>、北壁側に浅い溝状の遺構有。南西側に完形土器２ケ所置いたような状態で有。

33住――小判形、長6.5m、N５°E、（４本）、不明、西壁側の南側に粘土を囲め１段高い部分有。15住に切られる。

34住――隅丸方形（小判形）、4.2×2.8m、N38°W、４本、石囲炉、炭化材があり焼失家屋。18・35住を切る。

35住――楕円形、3.6×2.6m、N38°W、不明、地床炉、床面に小ピットが多数有、東壁南側に周溝有。

以上のようであったが、本遺跡における弥生時代後期住居跡の特徴としては、石囲炉（石囲埋甕炉）が14例と他地域に位べ比較的多いことがあげられる。コの字形石囲８例（４・５・６・14・15・17・31・34住）、L字形石囲３例（12・18・23（旧）住）、ほぼ全周する石囲１例（32住）、枕石状に１ケ石を置いたもの１例（21住）、石と土器片で囲ったもの１例（24住）があり、石囲埋甕炉は７例、土器片を火床に敷いたもの４例や、４住炉のように埋甕炉の周囲に土器片を詰め、埋甕内に土器片を敷くように置いた複雑なものも見られ、埋甕炉に壺を使用しているものも６例ある。また、住居内の入口と思われる部分の横に貯蔵穴が見られるものが９例あるのも特徴である。住居プランは、小判形（楕円、隅丸長方形に近いものもある）のものが多いことも特徴で、隅丸方形（比較的方形に近く、やや長方形のものもある。19、26、32住など）は、後期の中でも新しい時期の住居跡であることから、本地域における弥生時代後期の住居は、小判形（楕円形）ないしは、これに近い隅丸長方形（隅丸長台形）であり、後期でも終末になり隅丸方形形化したことが予想される。そして、６・15・18住のような大型な住居も見られ、特に15住は短辺は7.4mあることから長辺は10mを越す大型住居跡と考えられる。

古城遺跡遺構平面図（Ⅳ区）

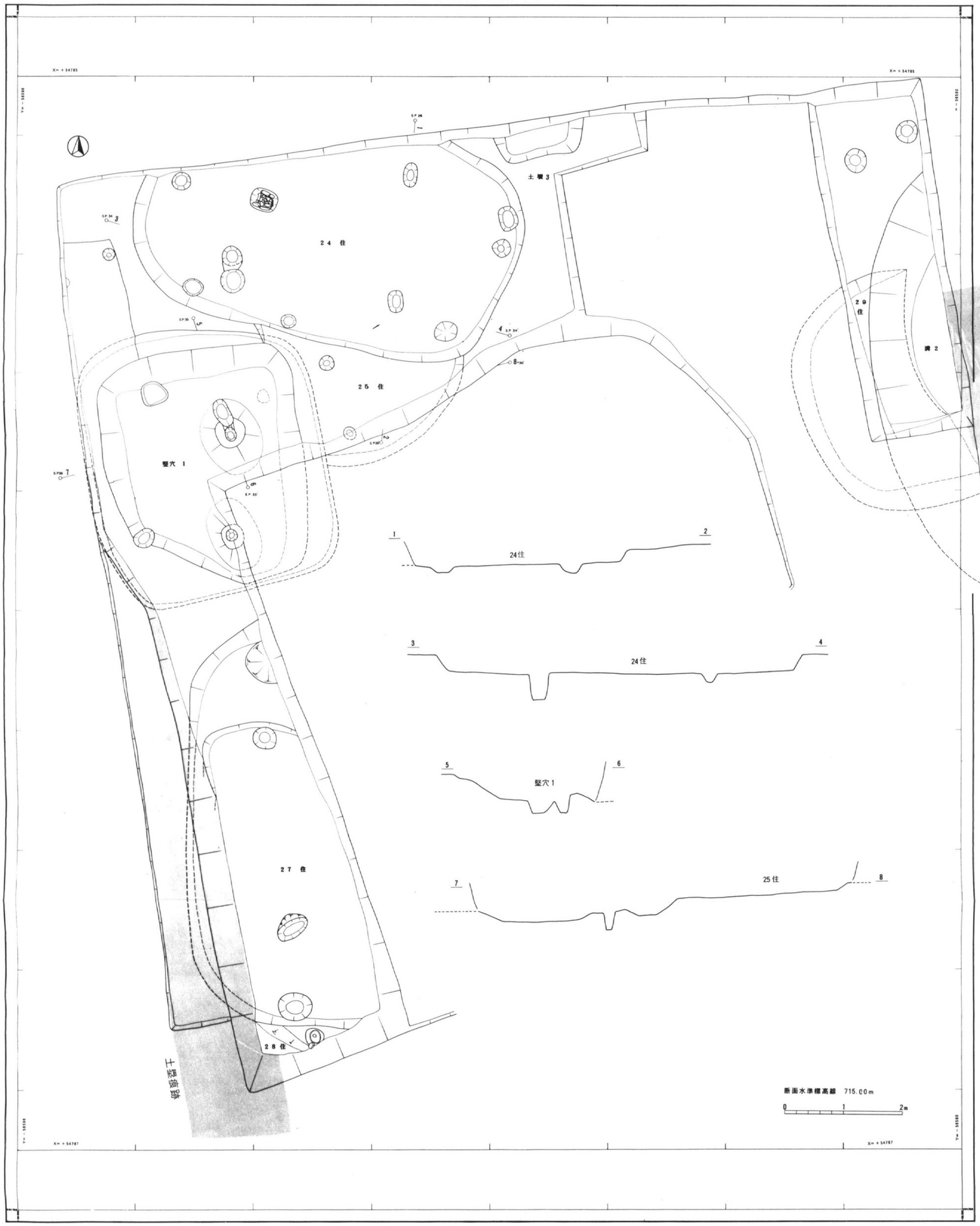
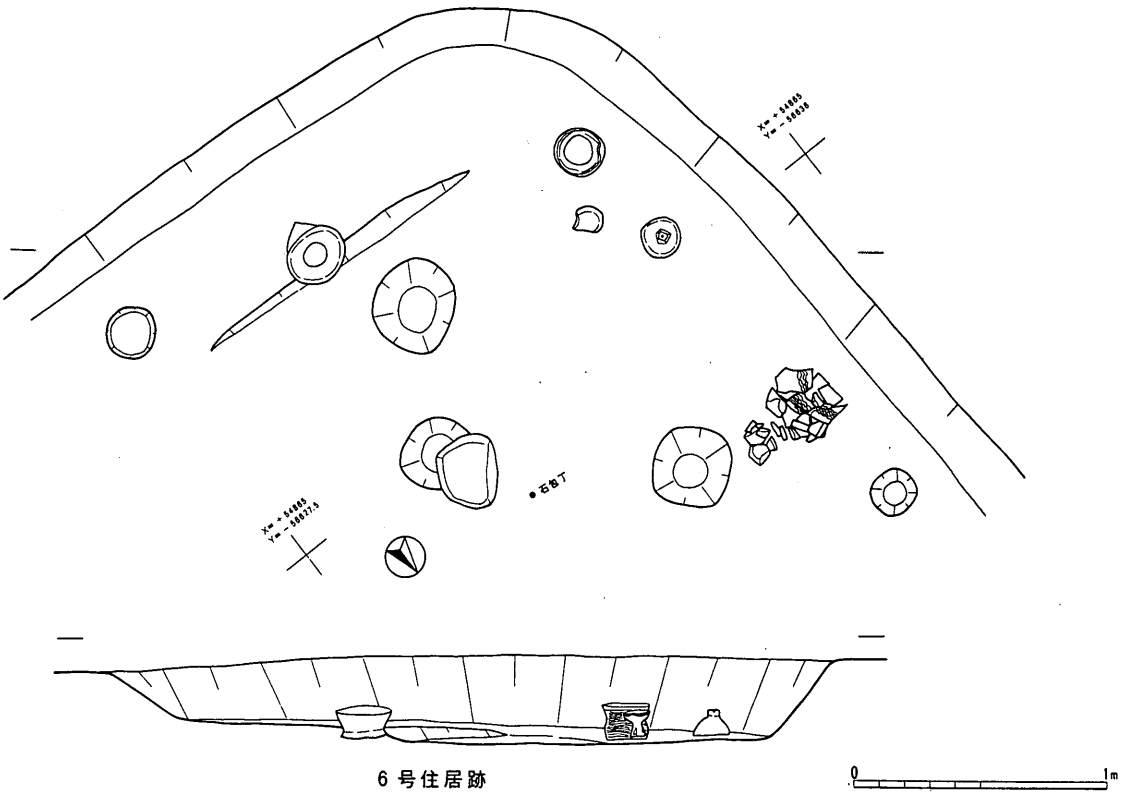


図15　Ⅳ区全体図（1：60）



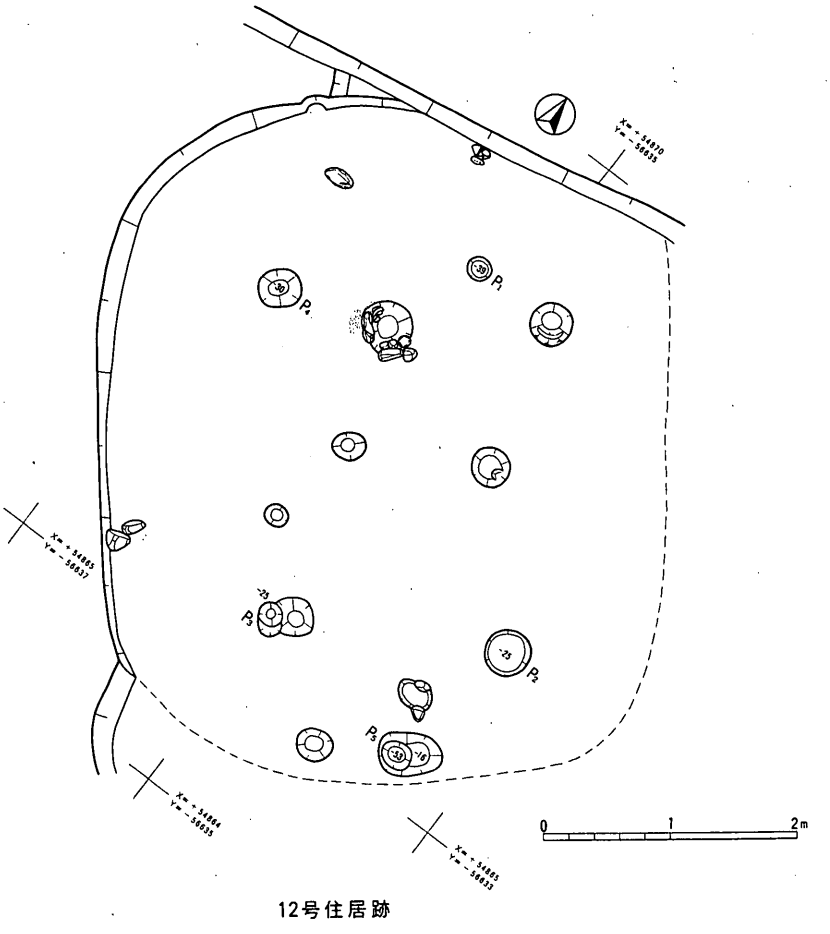
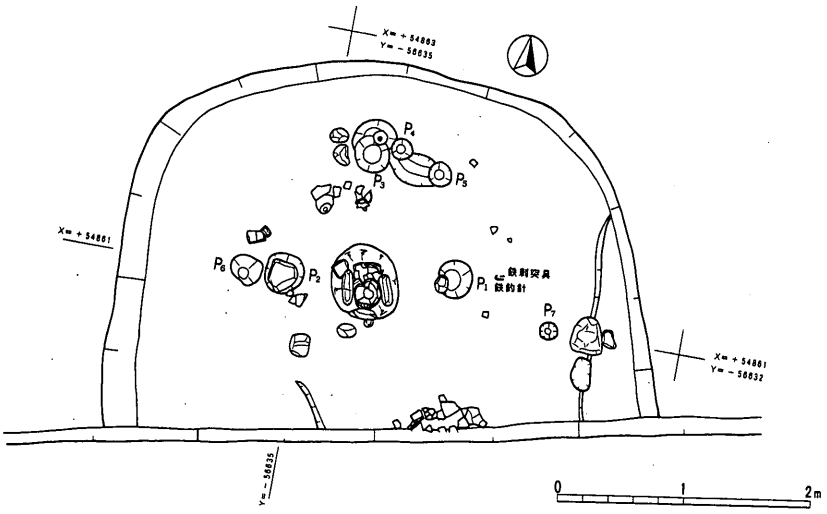
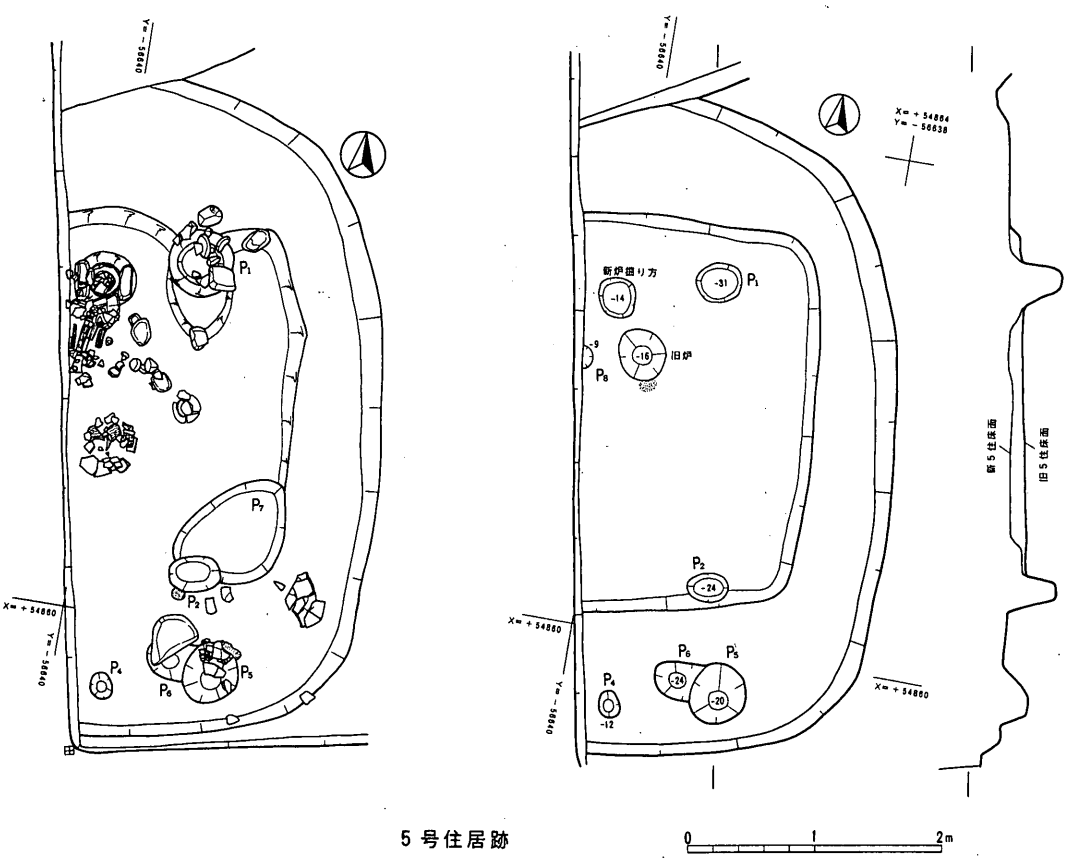


図17　Ⅱ区6号住居跡南西隅遺物出土状況（上・1：30）、12号住居跡（1：60）＜6住は、11・12住を切り、12住は11住を切っている。12住の約半分は6住に貼り床されていた。6住南西隅には、高杯2、甕3個体が置かれたような状態で出土した。＞

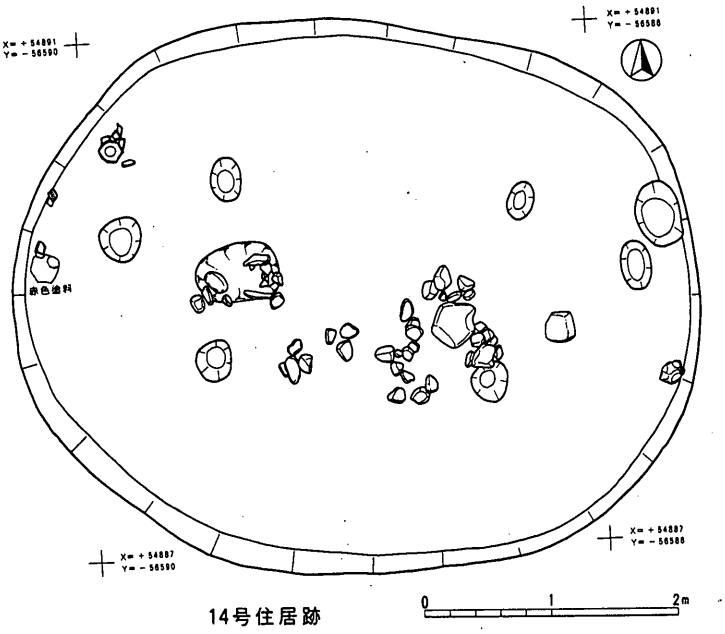


4号住居跡

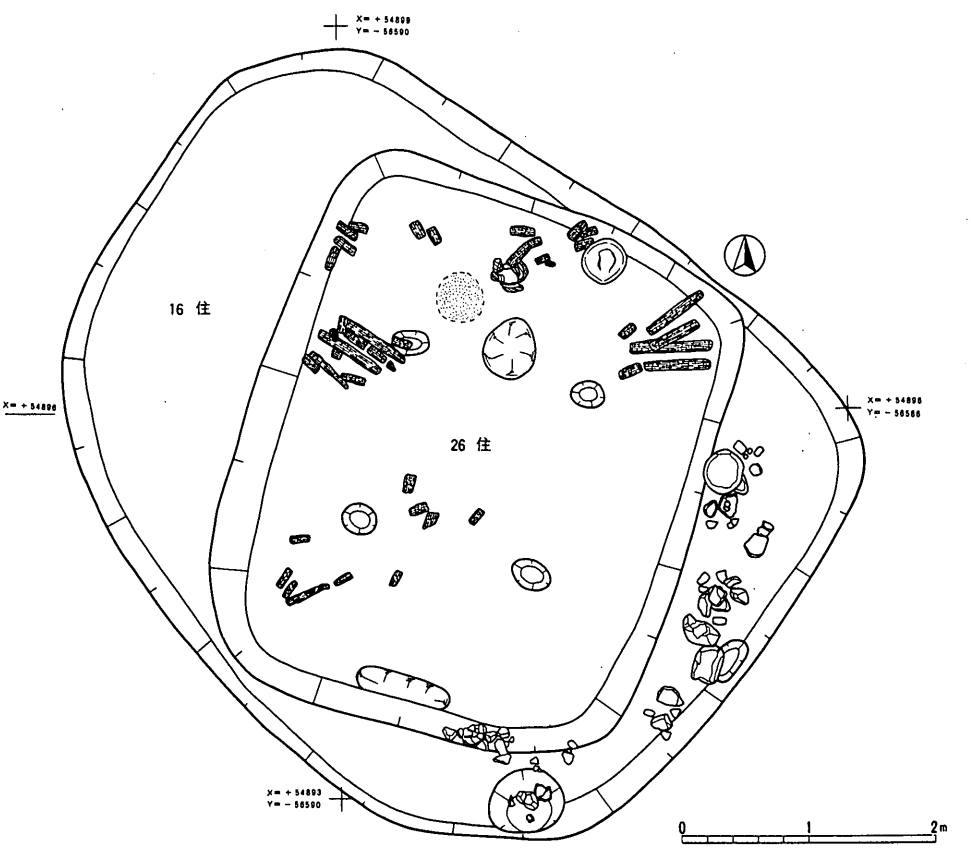


5号住居跡

図16　Ⅱ区4号住居跡（上）、5号住居跡（新）（左下）遺物出土状況、5号住居跡（旧）（右下）（1：60）＜4住は楕円形プランの4本主柱と思われる。炉は、壺・甕を複雑に組み合わせた、石囲い埋甕炉である。床面より約5㎝ぐらい浮いて、鉄製釣針・鉄製刺突具が並んで出土した。5住は、楕円形的な隅丸方形プランの4本主柱と思われる。この住居跡は壁に近い部分の床面が高くなっているベッド状遺構となっておりまた、主柱穴は変更せず、改築したらしく、低い部分の床面が2面あり、また炉も上面と下面に検出された。新しい炉は、石囲い埋甕炉で、埋甕炉内部に土器片を敷いたような状態であった。旧炉は掘り方のみであった。P5・7は貯蔵穴と思われ、P5内には壺片が貼り付いたような状態で出土し、周辺には粘土塊が見られた。＞



14号住居跡



16号住居跡・26号住居跡

図18　Ⅲ区14・16・26号住居跡（1：60）＜14住は楕円形プランの4本主柱穴である。炉は石囲い炉で、埋土～床面にかけての住居跡中央付近に礫が多少集中し、遺物は壁際に集中する。16住はやや楕円形の隅丸長方台形プランで、26住がすっぽり中央を掘り込んでいる。遺物は南東壁際に集中し、南側コーナーのピットは貯蔵穴と考えられる。26住は隅丸長方形プランで、4本主柱穴である。炭化材が多く焼失家屋と思われる。炉は地床炉的であるが、石があった可能性もある。＞

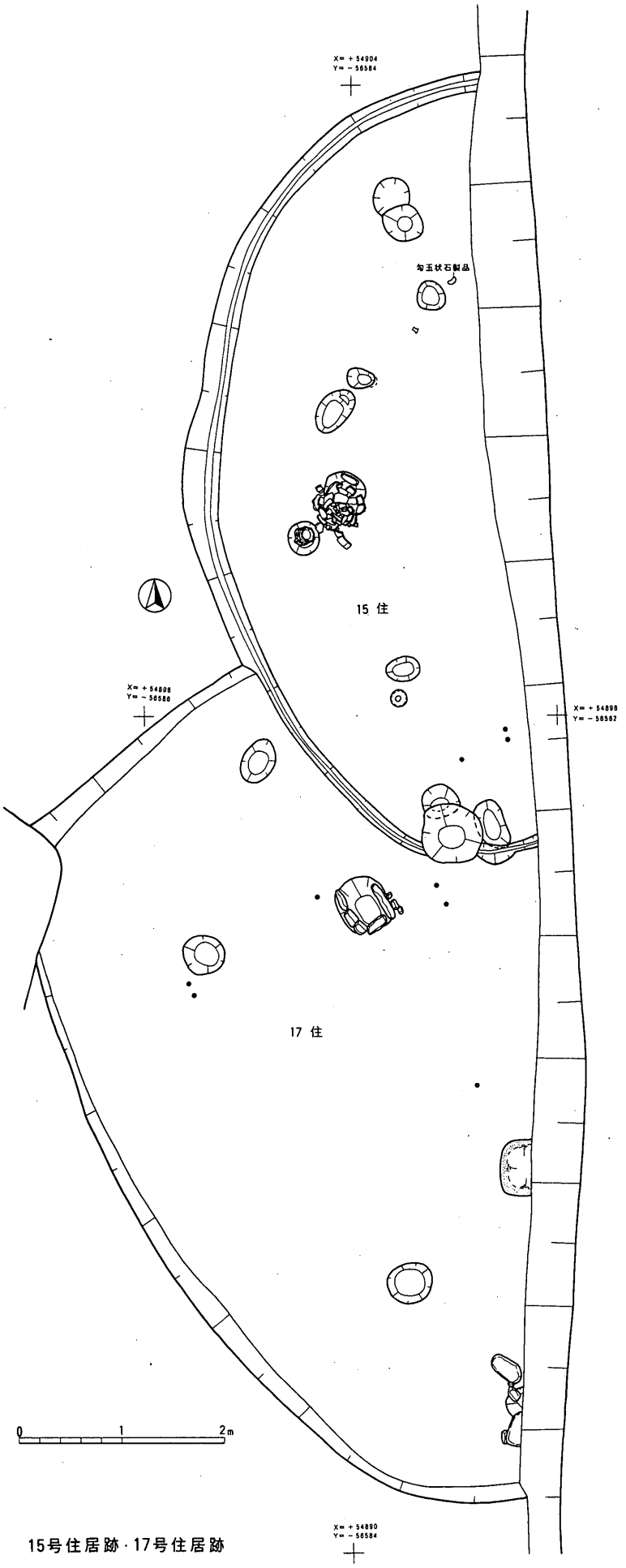
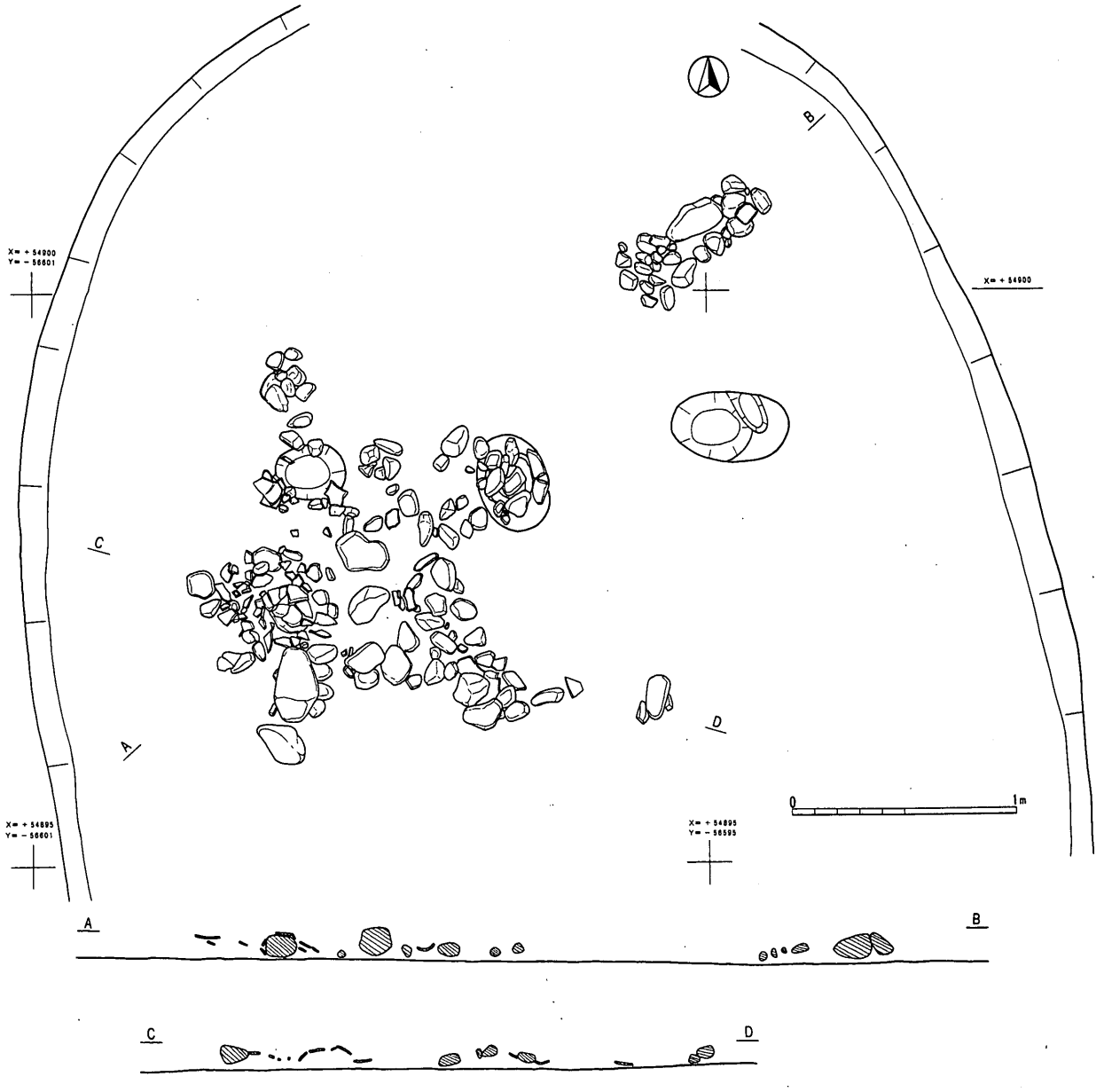
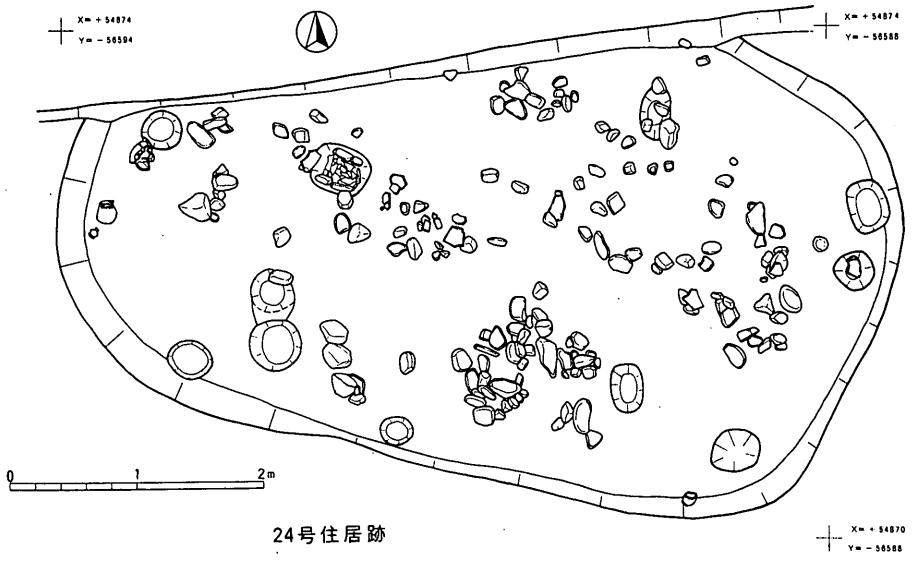


図19　15・17号住居跡（1：60）＜15住は17住を切る、大形の住居跡で検出された部分は奥壁側にあたり、短辺として7.4mの長さで、全掘したならば長辺約13mぐらいと思われる。＞



19号住居跡



24号住居跡

図20 19号住居跡(上、1:30)・24号住居跡(下、1:60) 礫・遺物出土状況<19住は、大・小の礫が炉上〜西側と炉の北東側の2ケ所に集中していた。24住は、住居内に礫が散在する。>

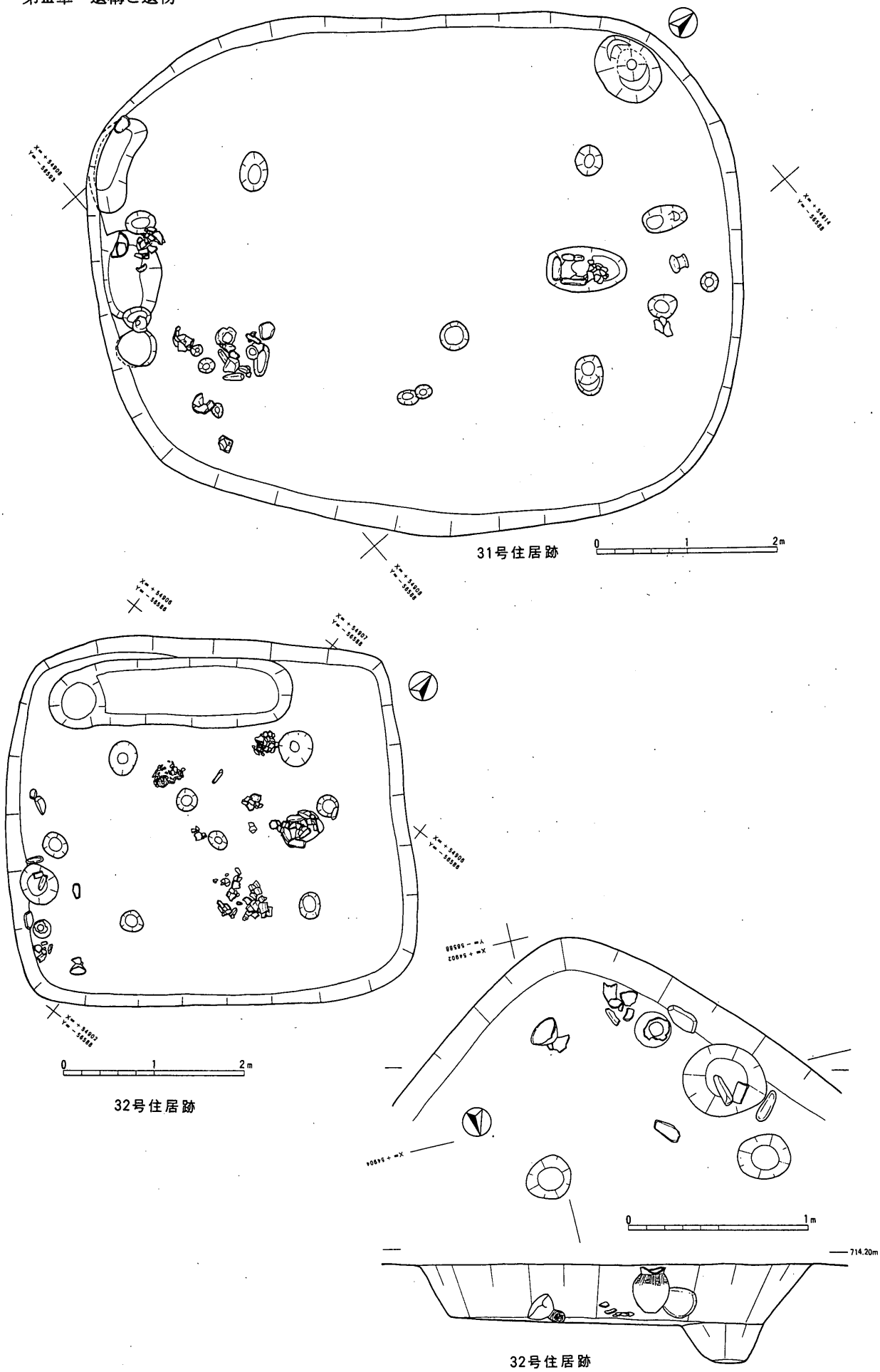


図21　31号住居跡（上、1：60）、32号住居跡（中、1：60、下、1：30）遺物出土状況<31住は炉の北側と南壁側（入口付近）に、32住は炉周辺と南壁側に遺物が集中する。32住の南壁際には高杯と壺が置かれたような状態で出土した。>

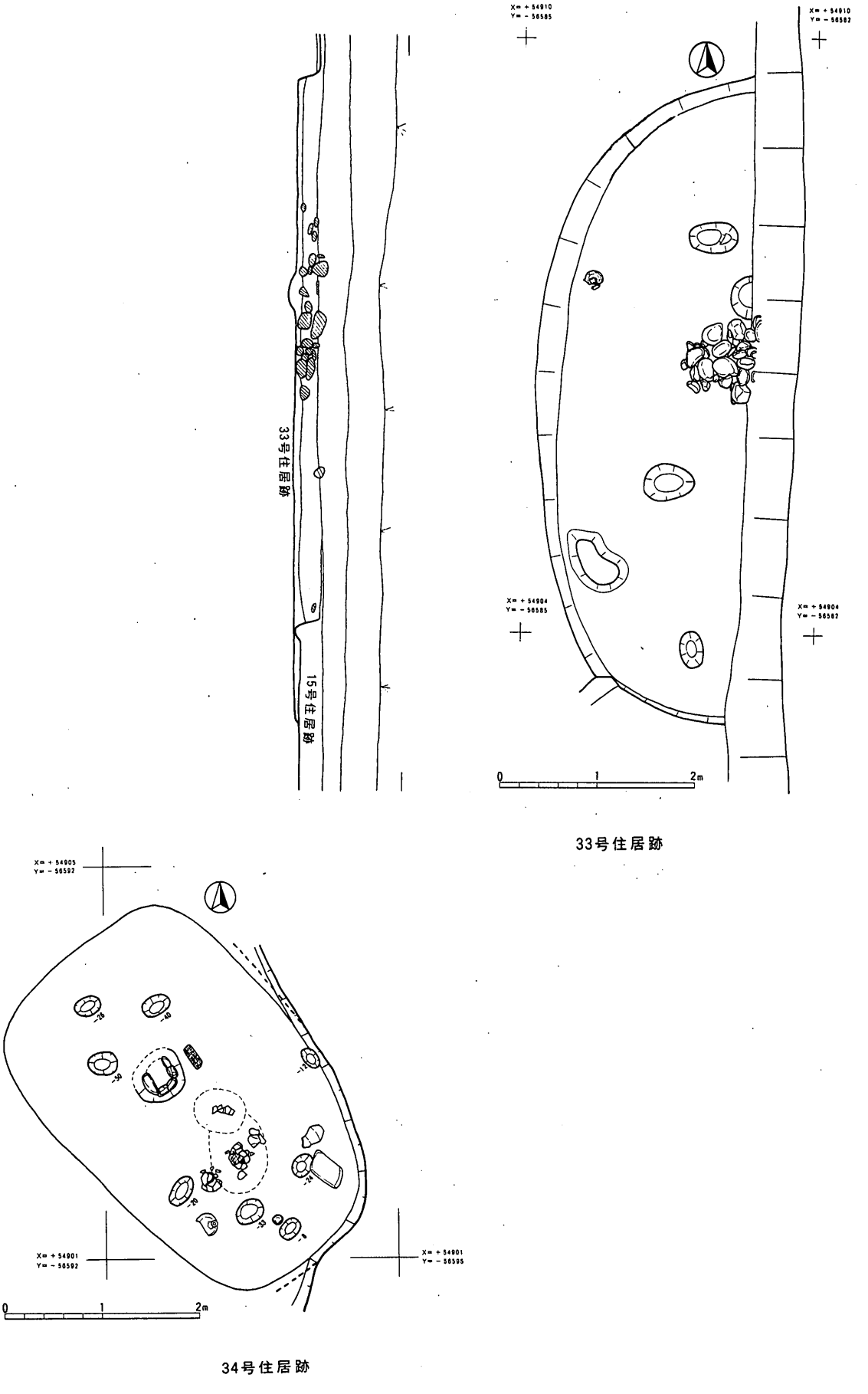


図22　33・34号住居跡（1：60）＜33住の中央やや北側には集石が見られ、その東側で、高杯が伏さった状態で出土した。34住は炭化材が出土し、炭も多く見られ、焼失家屋と思われた。34住は18・35住を切り、床下からは、18住は主柱穴の一部と35住が検出された。＞

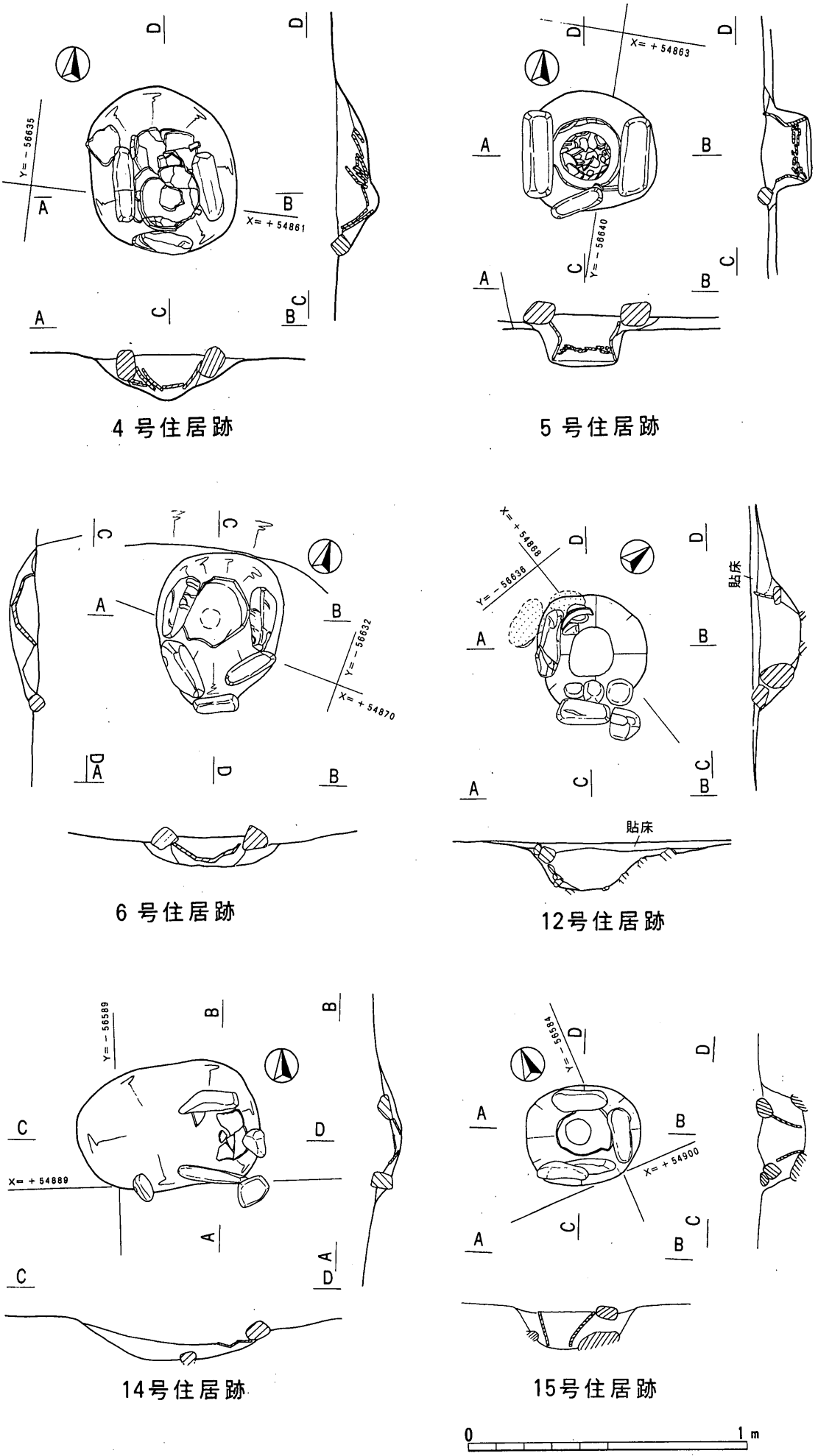
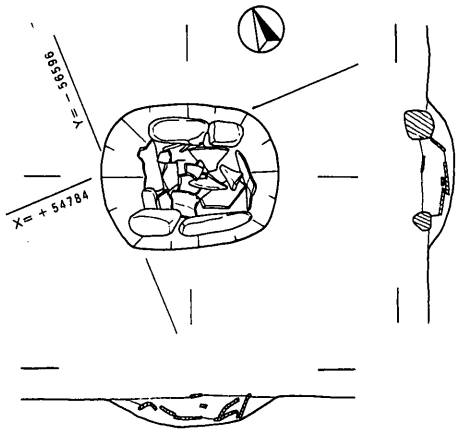
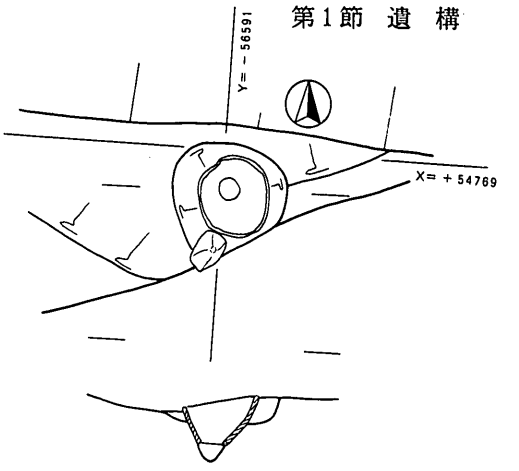


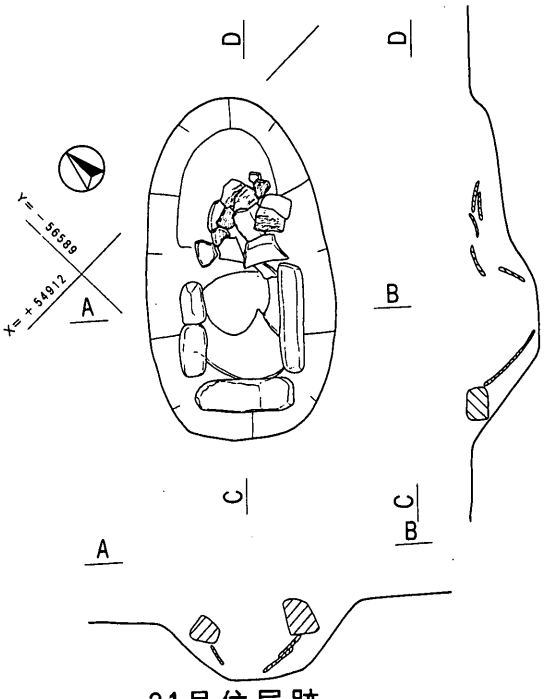
図23　弥生時代住居跡炉（1）（1：20、4～6・12・14・15号住居跡）<14住は石囲炉。12住は一部に甕の口縁を使用した石囲炉。4～6・15住は石囲埋甕炉で、4・6・15住は壺を使用。>



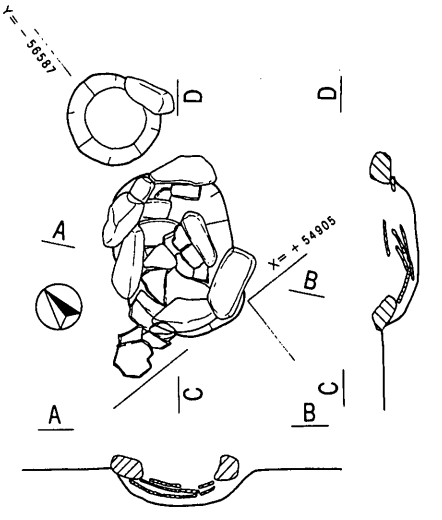
24号住居跡



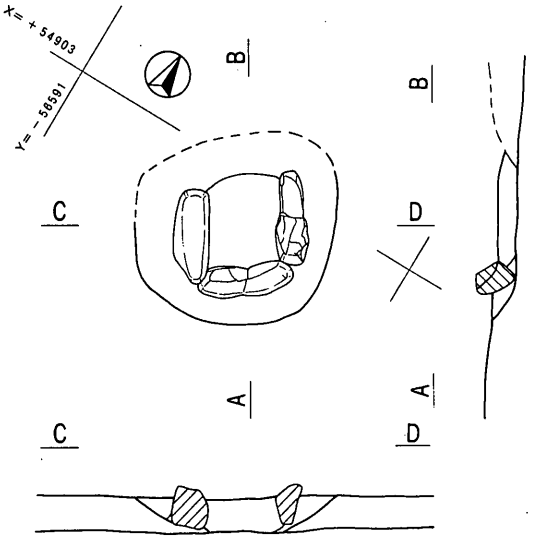
28号住居跡



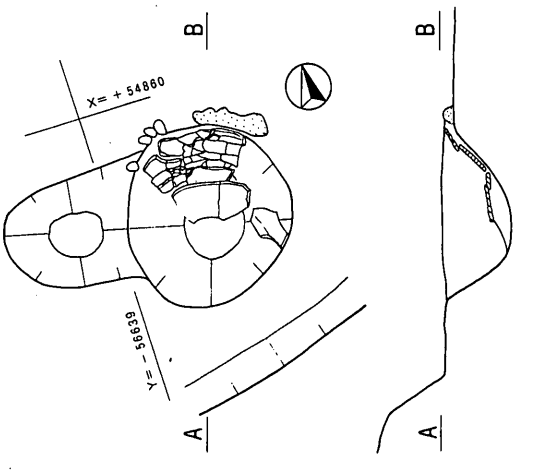
31号住居跡



32号住居跡



34号住居跡



5号住居跡 P_5

図25 弥生時代住居跡（3）、ピット（1：20、24・28・31・32・34・5号住居跡P5）＜24住は石・土器囲土器片敷き炉。32住は石囲土器片敷き炉。31住は石囲埋甕炉（壺使用）。28住は埋甕炉。34住は石囲炉である。5住P5貯蔵穴的なもので、壺片が貼り付けたように出土し、縁には粘土が見られた。＞

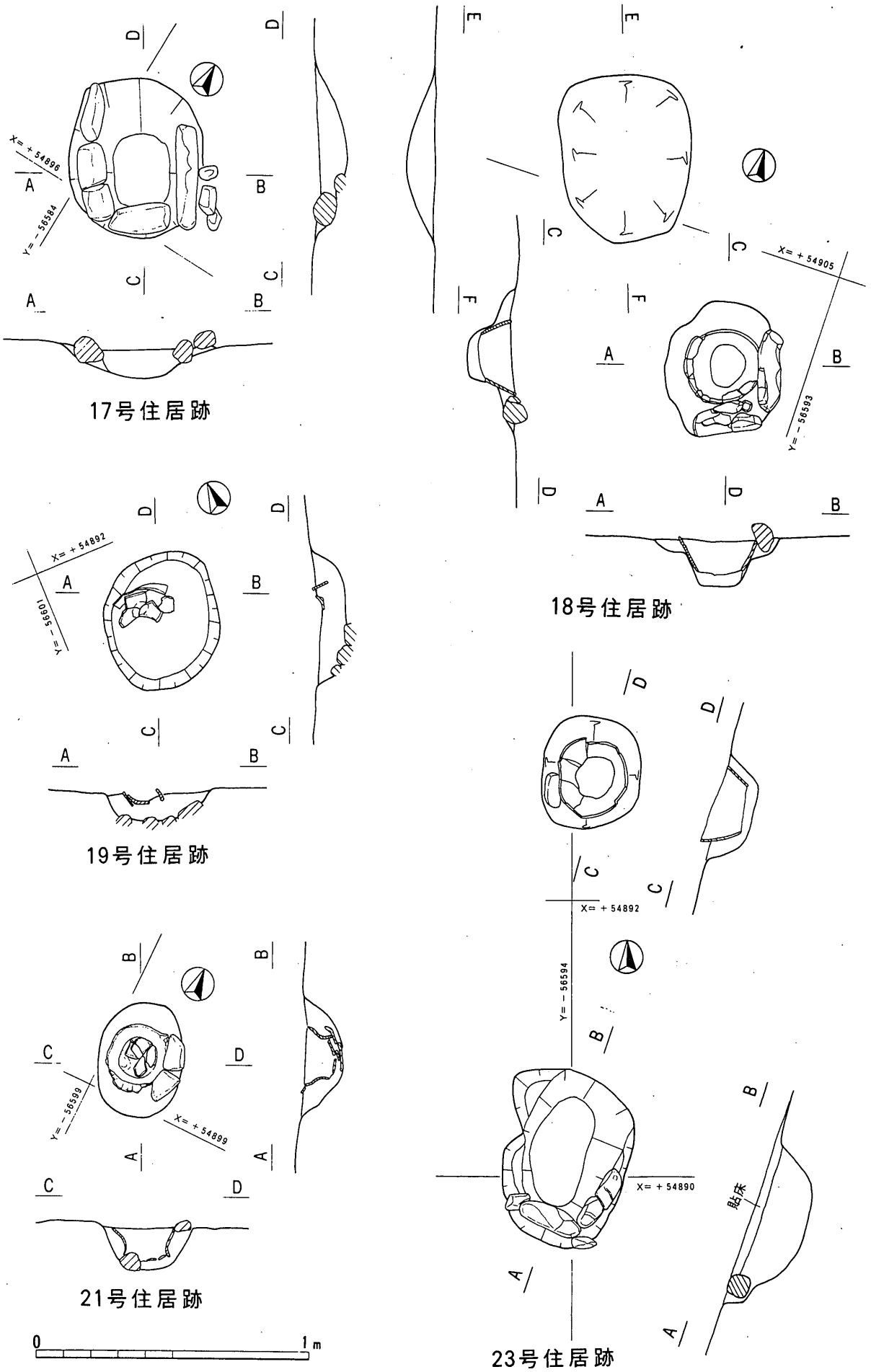
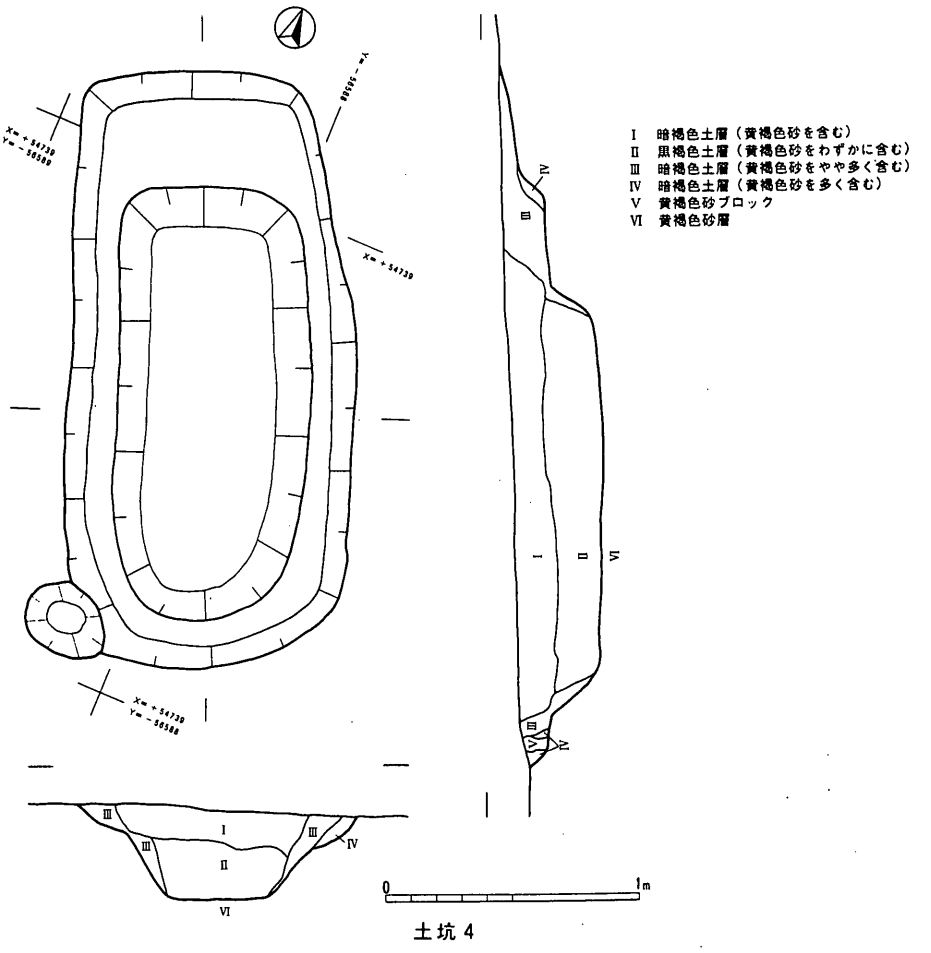
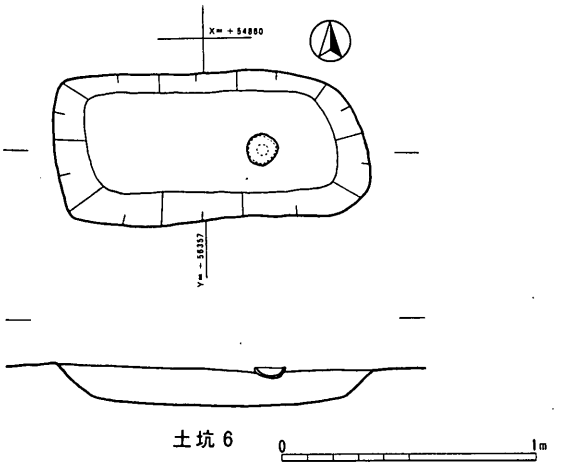


図24　弥生時代住居跡炉（２）（１：20、17〜19・21・23号住居跡）＜17・23住旧炉は石囲炉。23住新炉は埋甕炉。18住新炉・21住は石囲埋甕炉。18住旧炉・19住は掘り方のみ。18・23住埋甕は壺＞



土坑4



土坑6

図26　土坑4（上）、土坑6（下）（1：30）＜土坑4はⅠ区から検出され、古墳の主体部と思われる。おそらくは、木棺直葬か、そのまま埋葬した直葬と思われる。出土遺物（副葬品）はなかった。土坑6は平安時代の土拡墓と思われ、検出面から黒色土器の完形の杯が1ケ出土した。おそらく供えた土器と思われる。＞

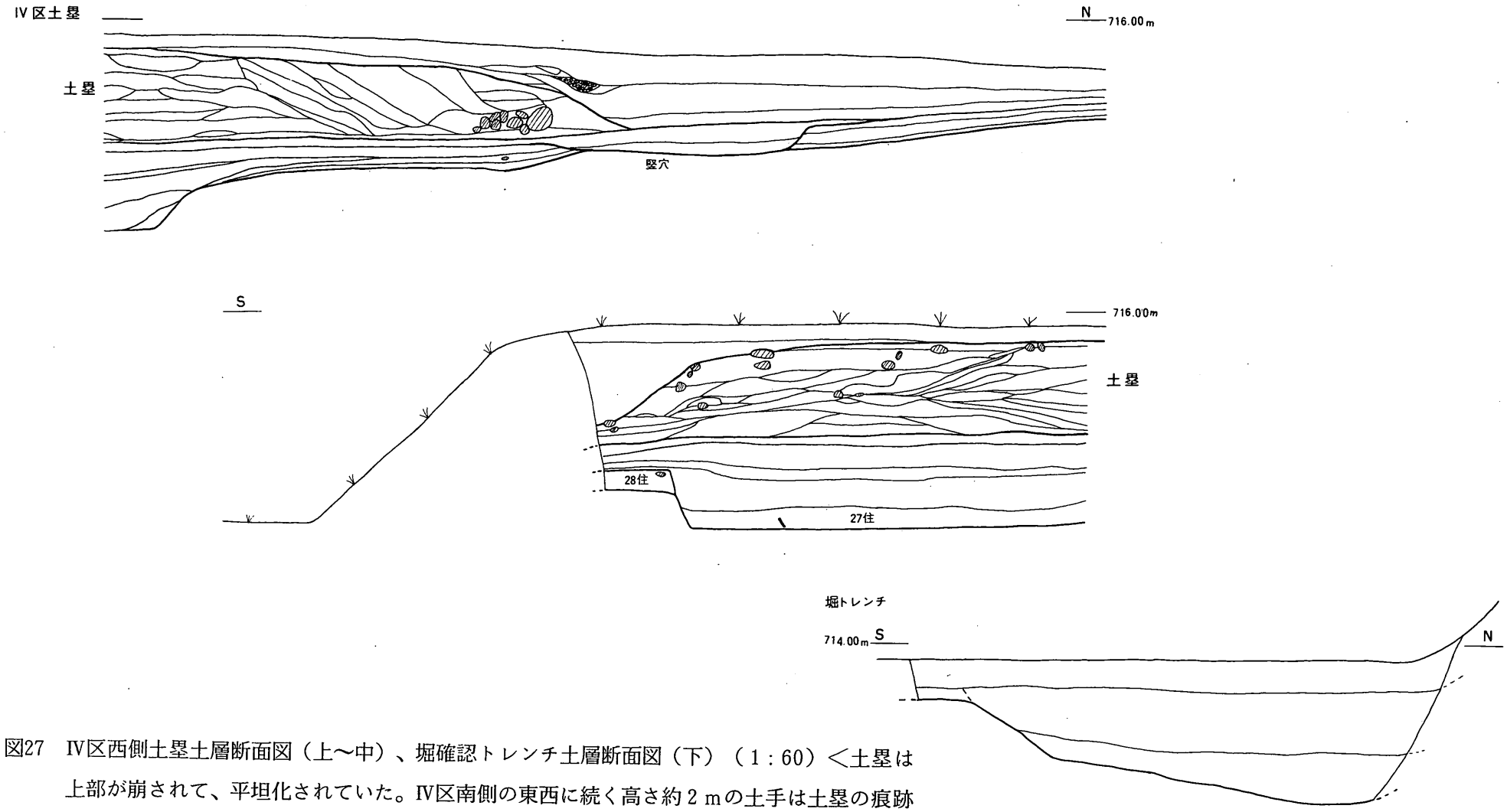


図27　Ⅳ区西側土塁土層断面図（上～中）、堀確認トレンチ土層断面図（下）（1：60）＜土塁は上部が崩されて、平坦化されていた。Ⅳ区南側の東西に続く高さ約2ｍの土手は土塁の痕跡であることが確認された。土塁土層の下層からは中世前半（13Ｃ後半～14Ｃ前半頃）の竪穴や遺物などが検出され、土塁の構築はこれ以後であると思われる。土手の南側に接して堀が確認された。＞

第 2 節　　遺　　物 <弥生時代後期出土土器について>

本遺跡からは、前述のごとく小範囲の発掘面積にも拘らず、多数の遺構、それに伴なう良好な遺物資料が検出されている。遺物により時期が明確に把握され得たものでは、弥生時代中期栗林期のものが当段丘上に嚆矢として刻まれるものであり、続いて弥生時代後期～終末、古墳時代初頭へと展開する。加えて、若干の墳丘裾より出土した古墳時代中期及び平安時代土師器などが出土し、また中世に至り、居館として利用されていた時期の陶磁器が注視されるところである。ここではその主体となる、住居が重畳した形で検出された、弥生時代後期出土土器に視点を絞って、その特徴の梗概を述べることとする。

信濃における後期弥生土器を代表とする型式として、中部高地型櫛描文と、特に供膳形態土器に赤色塗彩を施すという特徴を持つ「箱清水式土器」は、近年の発掘成果により、増々千曲川水系を主体として、発生・展開を遂げ、その影響が信濃北半から甲府盆地に至るまで広大な範囲に、波及していることが確認されているところである。しかし、犀川水系以西については、これまで発掘調査の事例に乏しく、模糊として、箱清水式土器文化圏の範疇に、その位置付けがなされることは、指摘されていたが、土器組成・内容については、地域色を明確に提示するまでには至っていなかった。今回発掘された、古城遺跡の31軒を数える弥生時代後期～古墳時代初頭の住居址出土資料は、これまでの北安曇地域の当該時期資料の欠落を埋め、近年盛んに箱清水式土器分布圏内に於ける、各地の地域色の研究が蓄積されているところであり、本地域色を思考する上で、看過出きない成果を収めることが出来たと思う。

しかし、今回報告書に掲載出きた資料は、出土資料の総べてに及んだものではなく、その検証も不充分なものであり、以下に記載する型式的特徴は、現時点での所見を述べた暫定的なものとし御理解頂きたい。また、概念的にその型式的変遷観を別表にして表しておいたが、「段階」については、無意味な混乱を避けるため、千野分類（千野　浩　1989「信濃」41－4）に準拠している。

すなわち、1段階が長野市吉田高校グランド遺跡出土資料を指標する、吉田式段階平行。2、3段階には当遺跡では明瞭な遺物が発見されていないが、4段階に至って切り合い関係も多く盛行した時期としてとらえられる。5段階には、外来系土器群の共判が見られる後期最終末あるいは古墳時代初頭として位置付けられる資料である。

それでは以下、第4段階を中心にして器形別に地域色の発現形態の特徴を要説していきたい。

器種は、壺、甕、台付甕、鉢、深鉢、甑、高杯があり、壺に比べ甕が際立って多く存在するということはない。

①壺　口縁部は弓状に強く外反するものと、口径が狭く若干外湾するものの二種類が、4～5段階に渡って存在する。胴部は長胴形で、胴下半が括れるものであるが、北信に通有な極端に胴下半が削げ、稜線が明瞭なものはない。施文は、頸部に櫛描T字文を描くが、希に簾状文との組合せ、あるいは櫛描J字文をもつ壺がある。粘土円板を貼付加飾する例は、現在のところ見られない。終末期になるにしたがい、頸部から胴部の屈曲が顕著になり、球胴化する傾向は他地域と同容であり、別に「いちじく形」胴部の壺も伴残する。頸部文様帯と胴下半を除く、器外面・口縁部内面は、篦磨きの後、赤色塗彩されるが、当地域色として口縁外面が磨きを施されず、かつ赤彩も施されないものも多く存在することが指摘できる。

②甕　1段階吉田式伴行のものは、胴上半に最大径を有し、倒卵形を呈すものである。比較的頸部の外反は緩く、口縁部が無文のものが主体を占める。口縁無文のものは、刷毛整形後に強い横位ナデが行われる。頸部には、右回りの簾状文を施文するものを基本とし、等間隔止め簾状文をなす。次いで胴下半に波状文が描かれる。これら在地性の強い土器の中にあって、胴上半部に斜行短線文が施される、座光寺原式の影響を受けた甕（12）が共伴している。

壺　甕

1段階

4段階

5段階

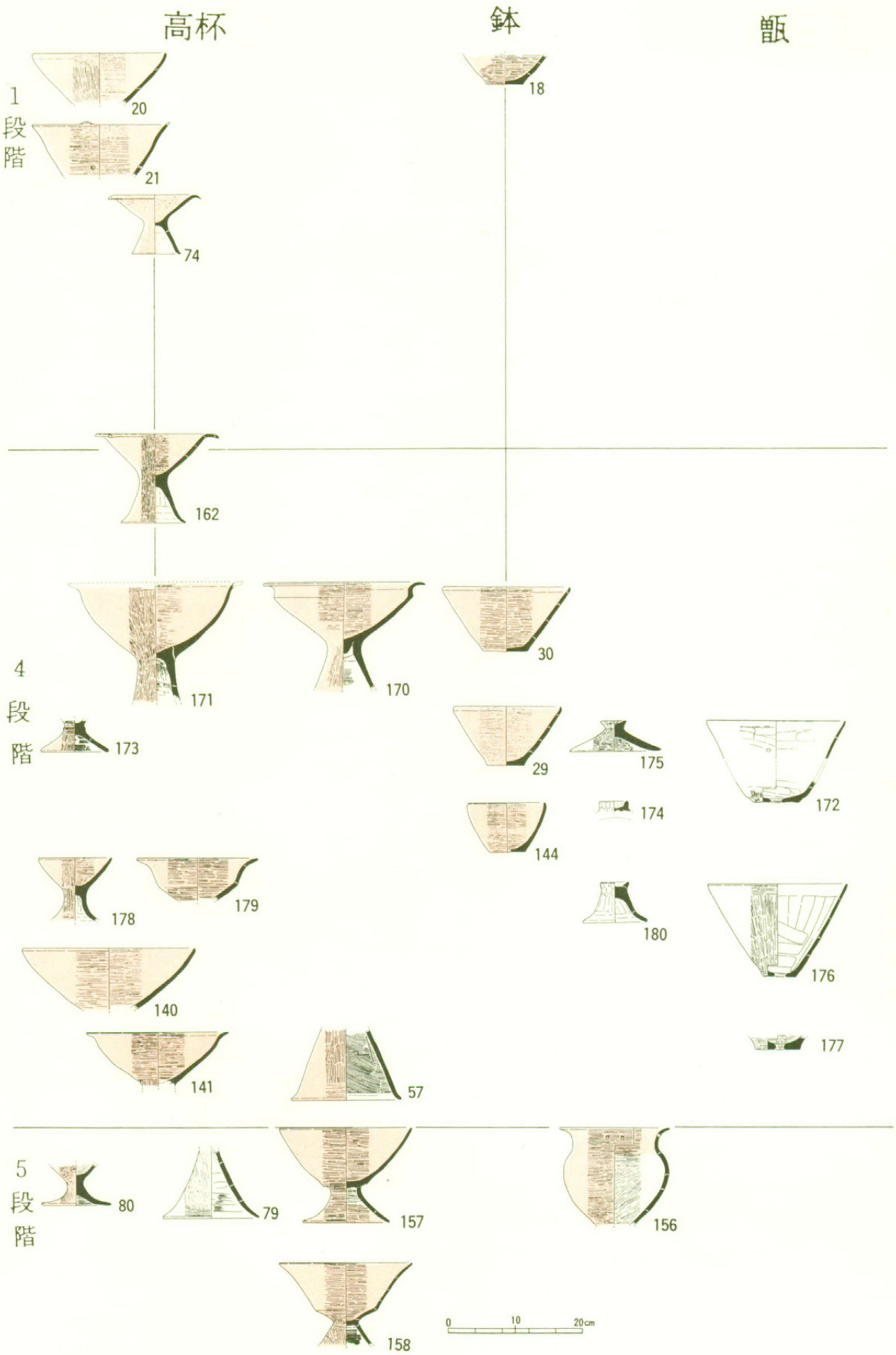


図28　古城遺跡出土弥生時代後期土器模式図（1：8）

4段階に至り、口径と胴径がほぼ一致する、胴長の器形が一般的であり、頸部に簾状文・口縁と胴上半に波状文を描く。調整は、胴下半を縦位に、口縁内面は横方向に磨くものが主体であるが、内面胴部分を刷毛あるいは箆状工具によるナデのみで、磨きを施さない甕の比率が他地域に比べ多いと思われる。また、内面胴下半に削りの施される、北信の影響を受けた甕（126）も見られる。この段階から、高台付甕が組成に加わる。5段階になると在地性の甕に、球胴化が見られ、外来系土器（146・151）も定着している。

③高杯　1段階以降、杯部椀状のものと、口縁部が屈曲して鍔状に開くものの2種類が存在する。4段階前半になり、杯部中位に屈曲をもち、背に高い末広がりの脚部のものが新たに加わり、口縁部が水平に屈曲し、鍔状に開くものが衰退してくる。杯部椀状のものは安定して残る。

5段階になると、北陸の影響を受けた高杯（157・158）が存在するようになる。赤彩は、杯部内面及び外面全体にわたって施されるが、赤彩がなされないものは（79）と、現在のところ1個体のみであり、赤彩傾向は極めて顕著である。

④鉢・深鉢　4段階において、体部が直線状に伸び比較的大形のものから、椀状を呈する小形のものへと移行するようであるが、既に、1段階より赤彩を施し、形態において後期を通じ、それほど器形に変化がなかったものと考えられる。深鉢（156）は、5段階の資料のみである。口縁部が強く外湾し、全外面及び口縁部内面を赤彩し、二孔一対の緊縛孔を有する。高台の有無は不明であるが、同住居出土高杯（157・158）と伴に外来系土器と考えられる。

⑤蓋　頂部が凹み、先端はハの字に開くものである。器形により、同期に一般的に見られる（174・175）のものと、つまみ部が肥大して先端の広がりが短径のもの（180）の、二形態に分類される。つまみ部（蒸気孔）あるいは先端部に緊縛用に穿孔されるものはなく、また赤彩されたものも見られない。

⑥甑　全形が明瞭なものは2点（172・176）のみである。いずれも体部が直線的に外開して、逆台形状を呈するものであり、底部に一孔を穿つ。文様の加飾及び赤彩の施されるものはない。器面調整は、箆状工具によるナデ調整の他、外面のみ、あるいは内外面ともに磨きが施されるものも存在する。

第2次調査（昭和48年）の折、3号住居址より甑が出土したとされるが、詳細は不明であるが、どうも焼成前に甕に穿孔を施したもののようである。

各器種については以上であるが、次に胎土に関して付言しておきたい。各地域の箱清水式土器を実見すると、胎土中に含有する砂粒の量の差が著しいことに気付く。すなわち千曲川水系に含有の比率は少なく、当遺跡を含んだ北安曇一帯には多量に混入させる傾向がある。諏訪地方などは、器種によって相違があるようである。同期の北陸地方の土器には、胎土に多量の砂粒を混入する傾向が見られるが、素地を作る成作段階に、そこからの影響があったのか、今後の課題である。

箱清水式土器文化圏内の一小地域の指標遺跡と考えることの出きる古城遺跡の様相は、1・4・5段階といずれも、在地で生産されたものの他に、他地域からの客体土器あるいは、影響を受けたものが少なからず見受けられ、一定の地域的個性を持ちつつも、他の地域に排他的ではない交流の仕方、また時代背景が土器を通じて想起されるところである。

古城遺跡出土弥生土器の特徴について縷々述べてきたが、現段階ではまだ当遺跡の出土土器総てに渡たり、図化し資料化されたものではなく、早急に図面化し、出土土器群の形態分類及び構成、また他地域との対応あるいは交流関係等を明らかにしていかなければならないと考えている。

35号住居跡

17号住居跡

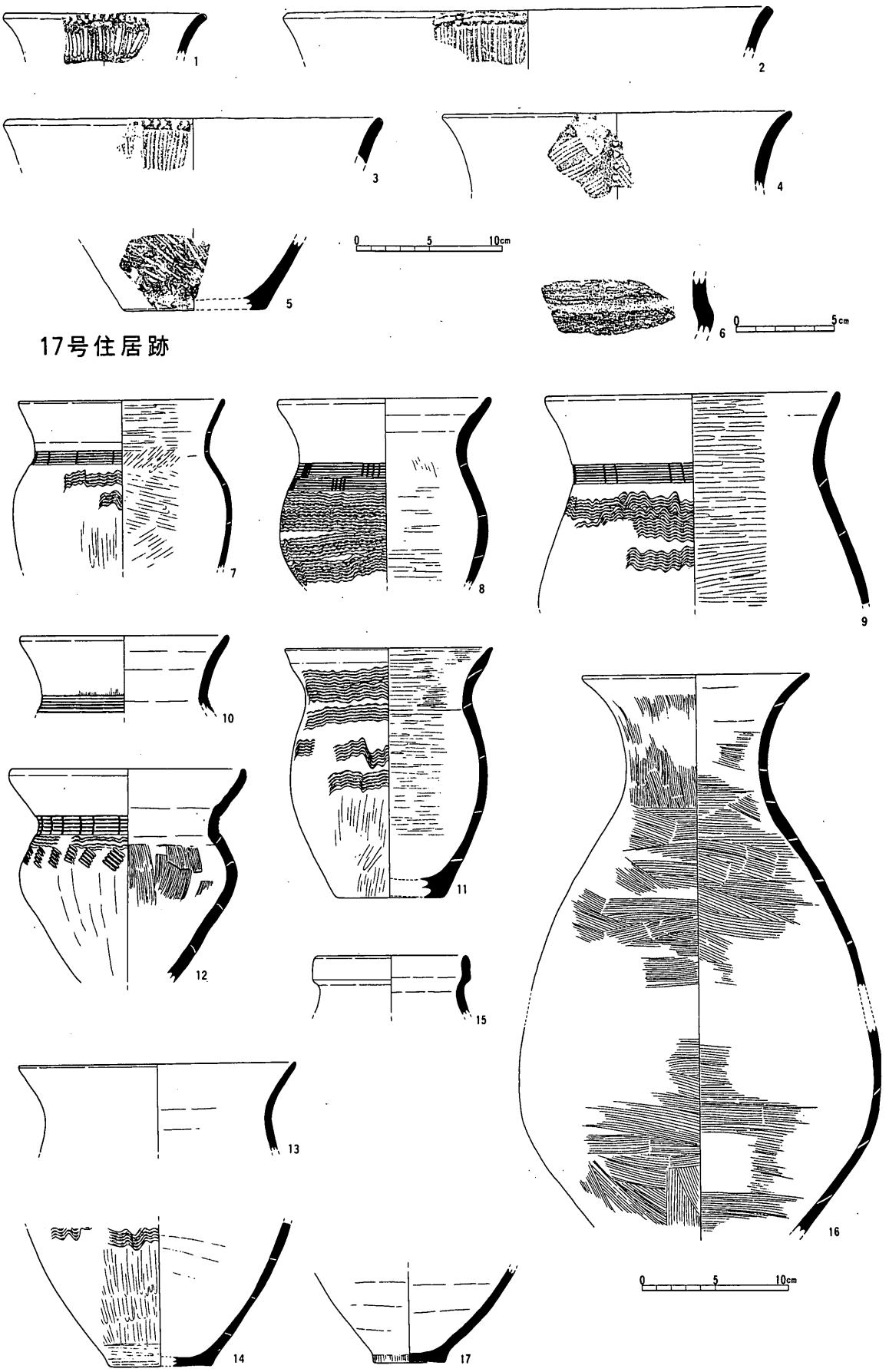


図29　弥生時代中期前半・後期土器（1）（6は1：3、それ以外は1：4）

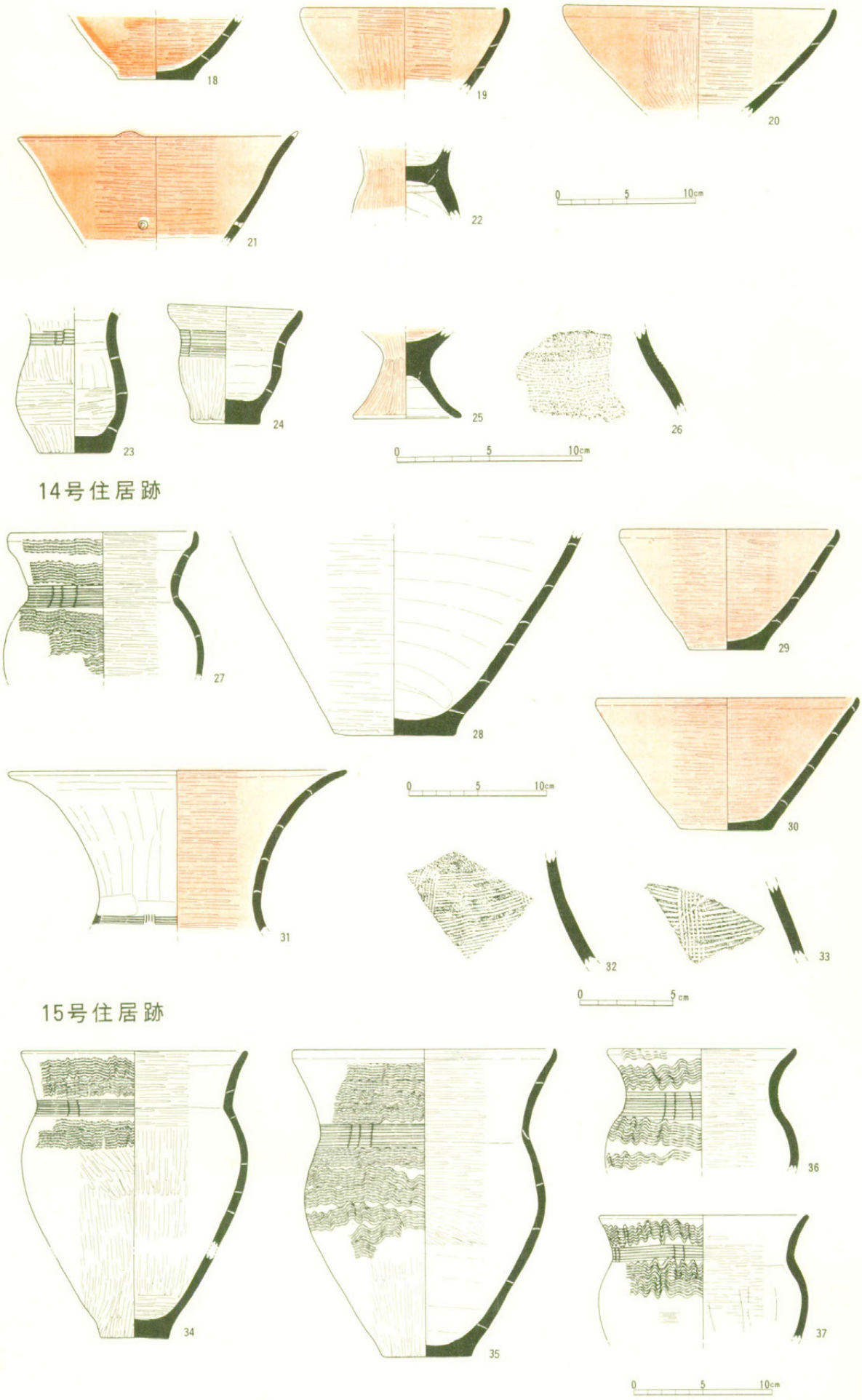


図30　弥生時代後期土器（２）（23〜26・32〜33は１：３、それ以外は１：４）

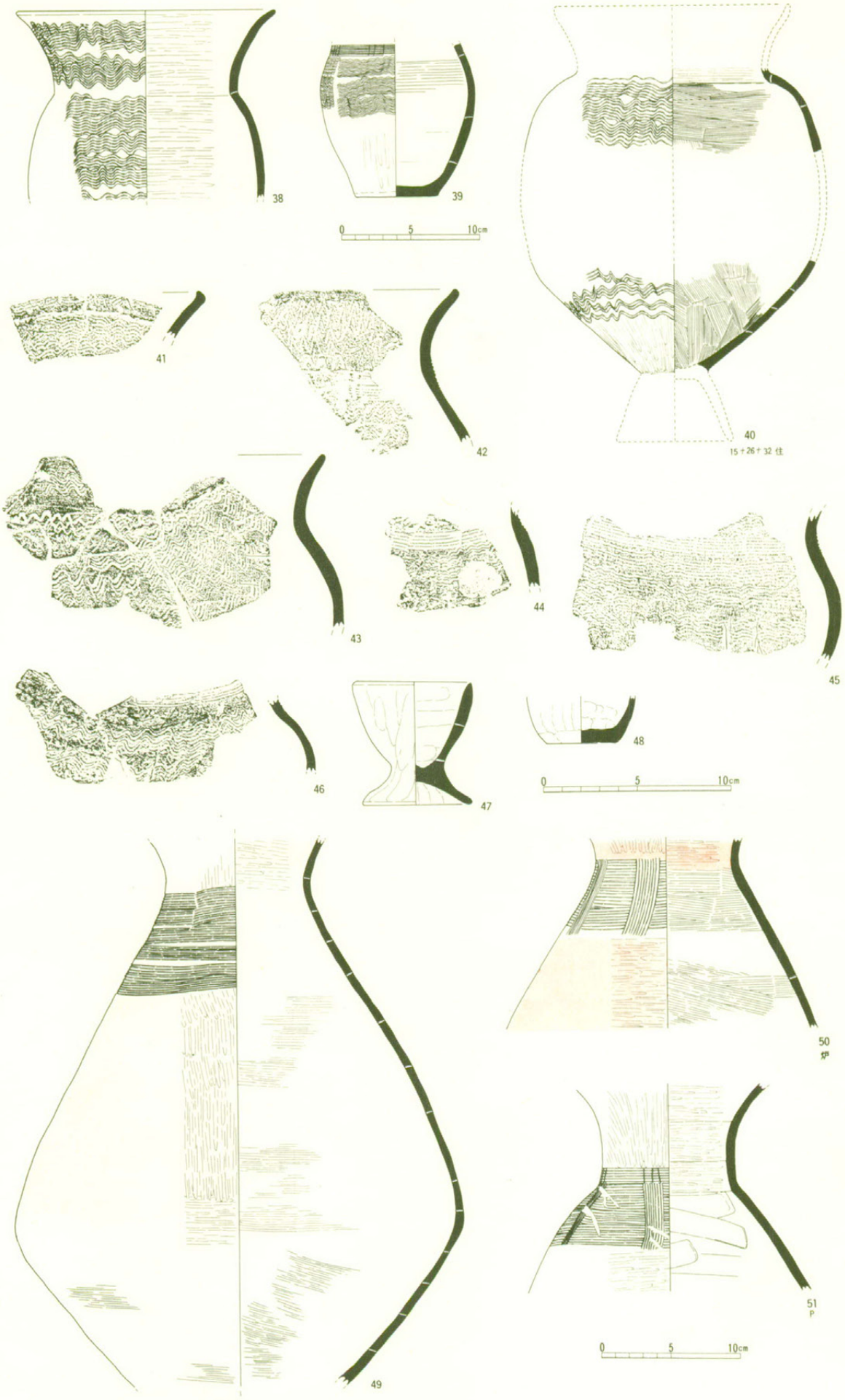


図31　弥生時代後期土器（3）（41～48は1：3、それ以外は1：4）

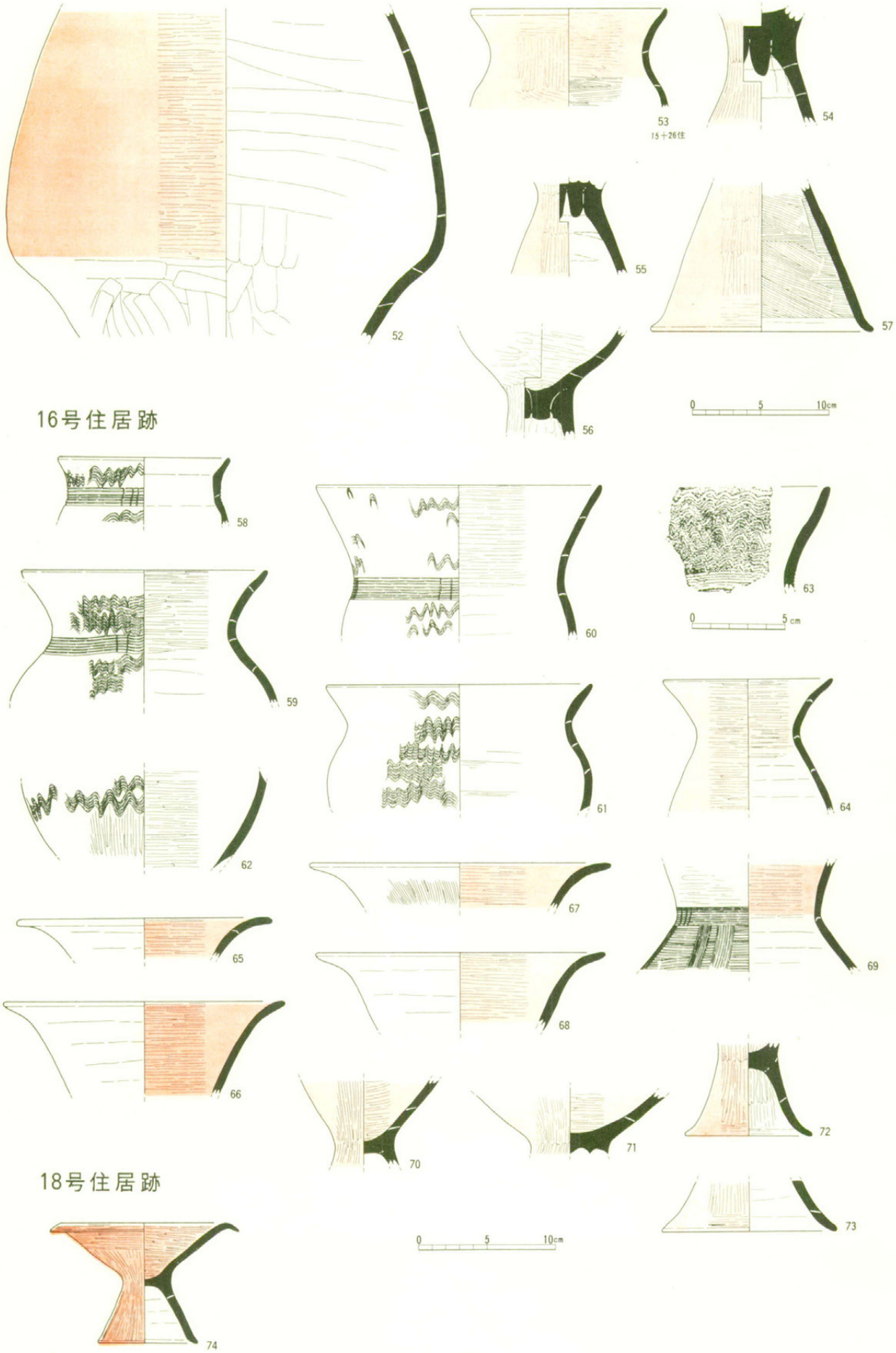


図32　弥生時代後期土器（４）（63は１：３、それ以外は１：４）

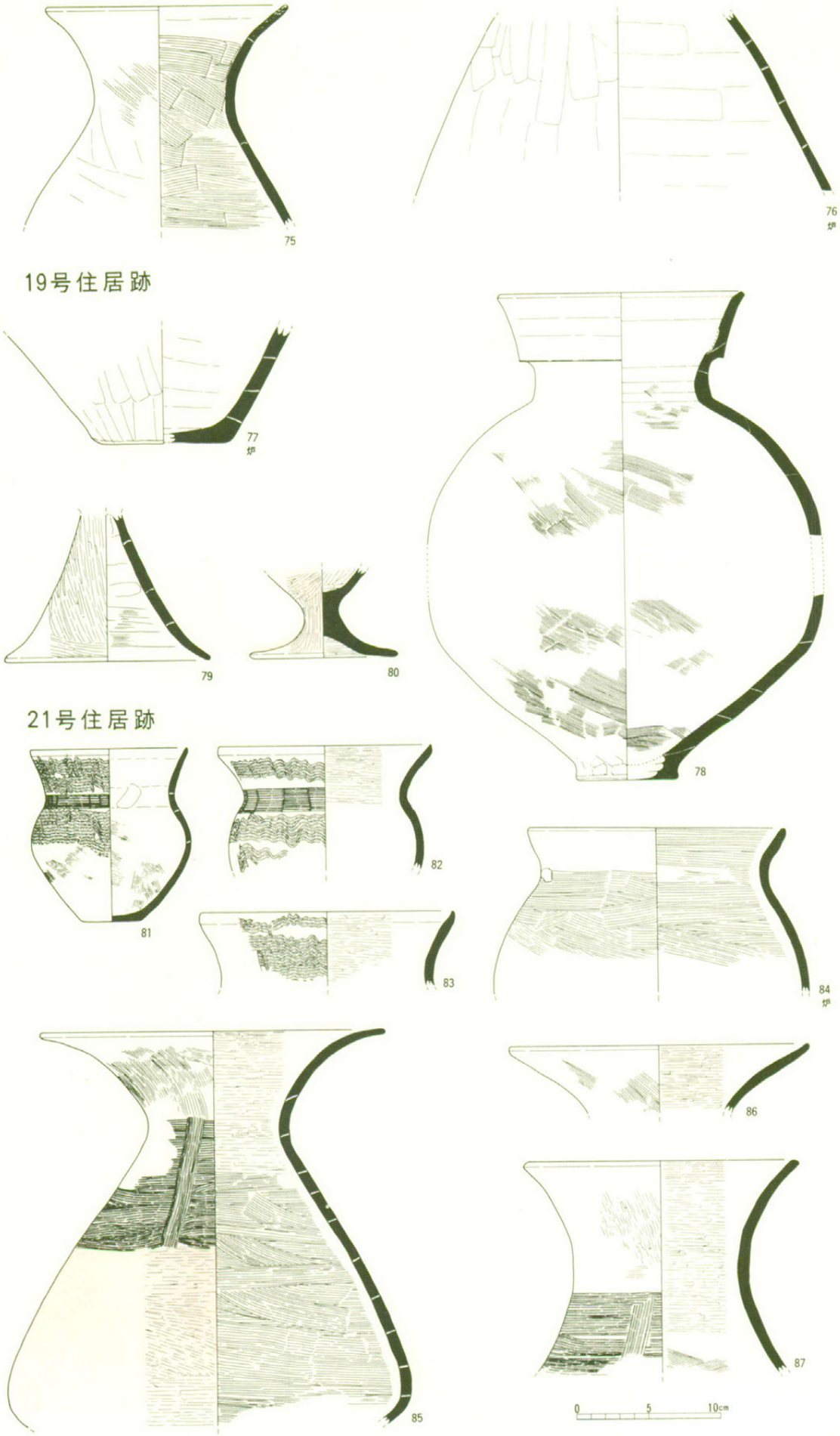


図33 弥生時代後期土器（5）（1：4）

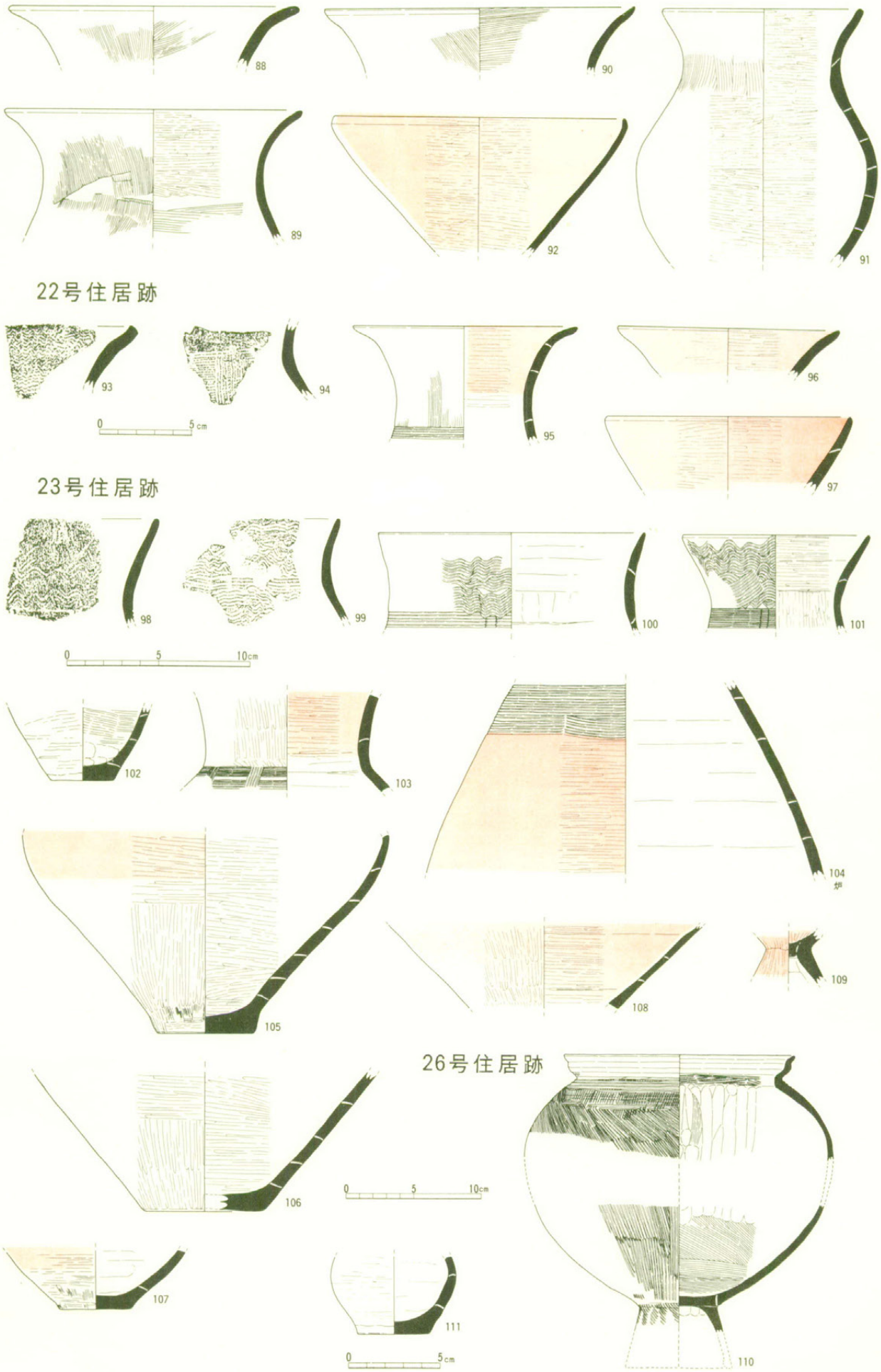


図34　弥生時代後期土器（6）（93・94・98・99・111は1：3、それ以外は1：4）

30号住居跡

31号住居跡

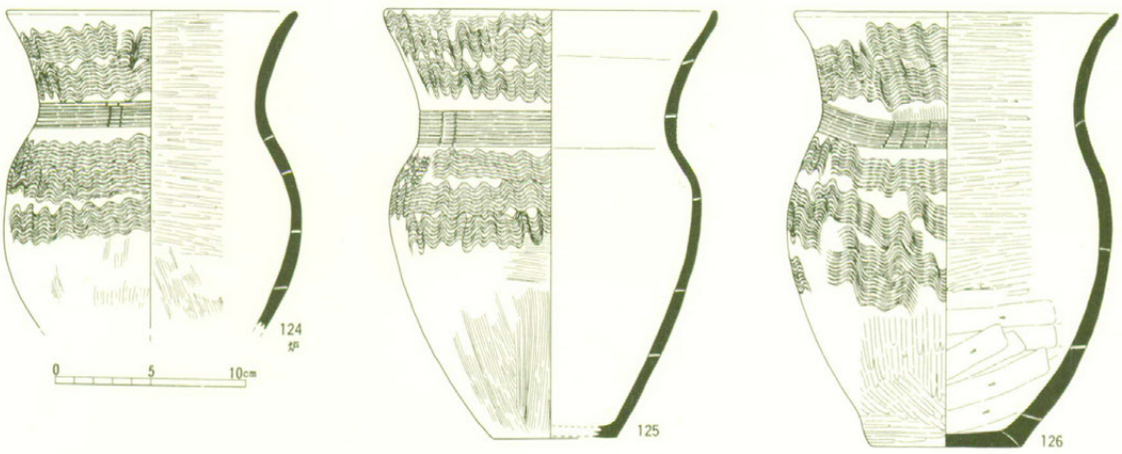


図35　弥生時代後期土器（7）（112～115は1：3、それ以外は1：4）

図36　弥生時代後期土器（8）（1：4）

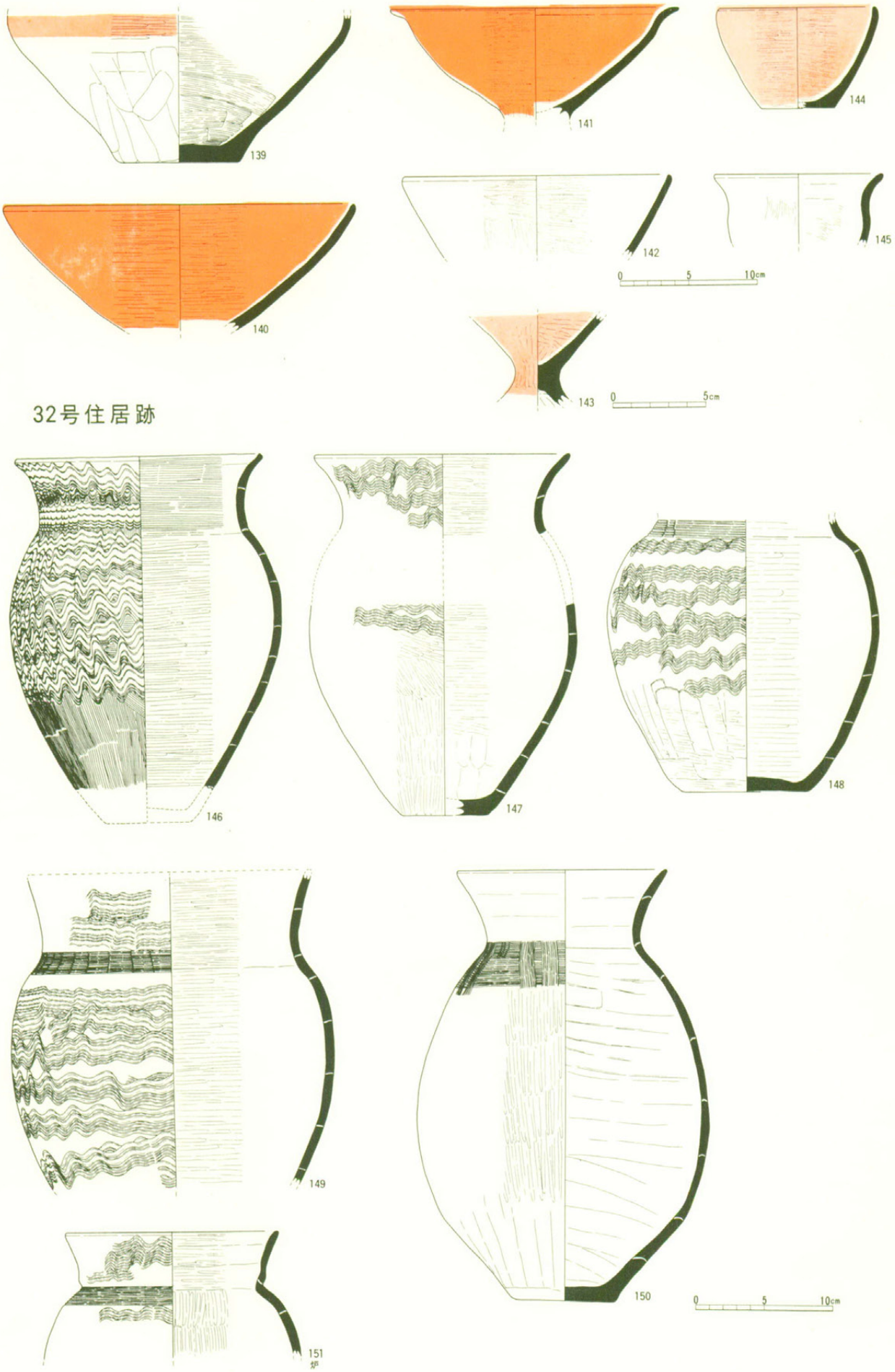


図37　弥生時代後期土器（９）（143は１：３、それ以外は１：４）

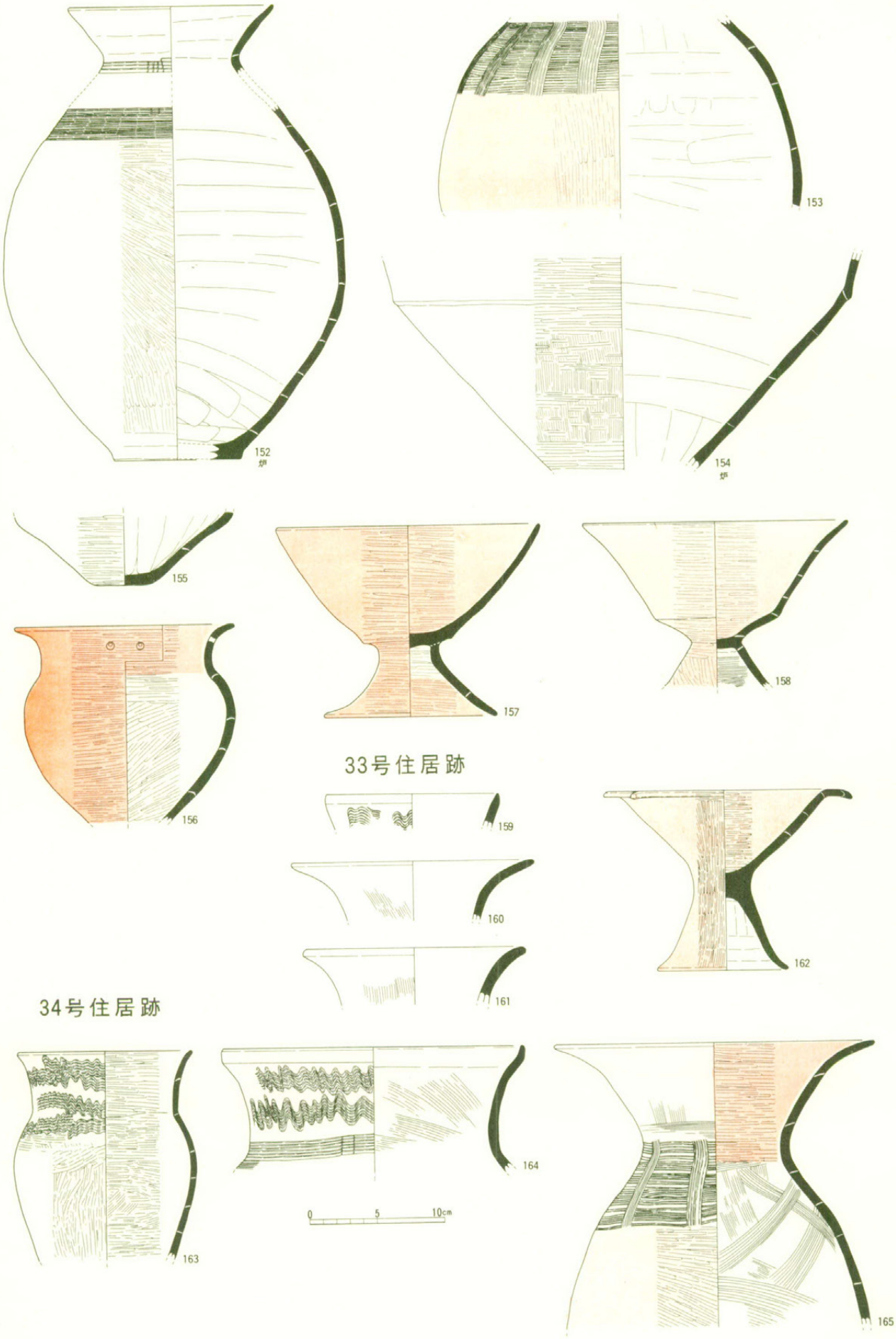


図38　弥生時代後期土器（10）（1：4）

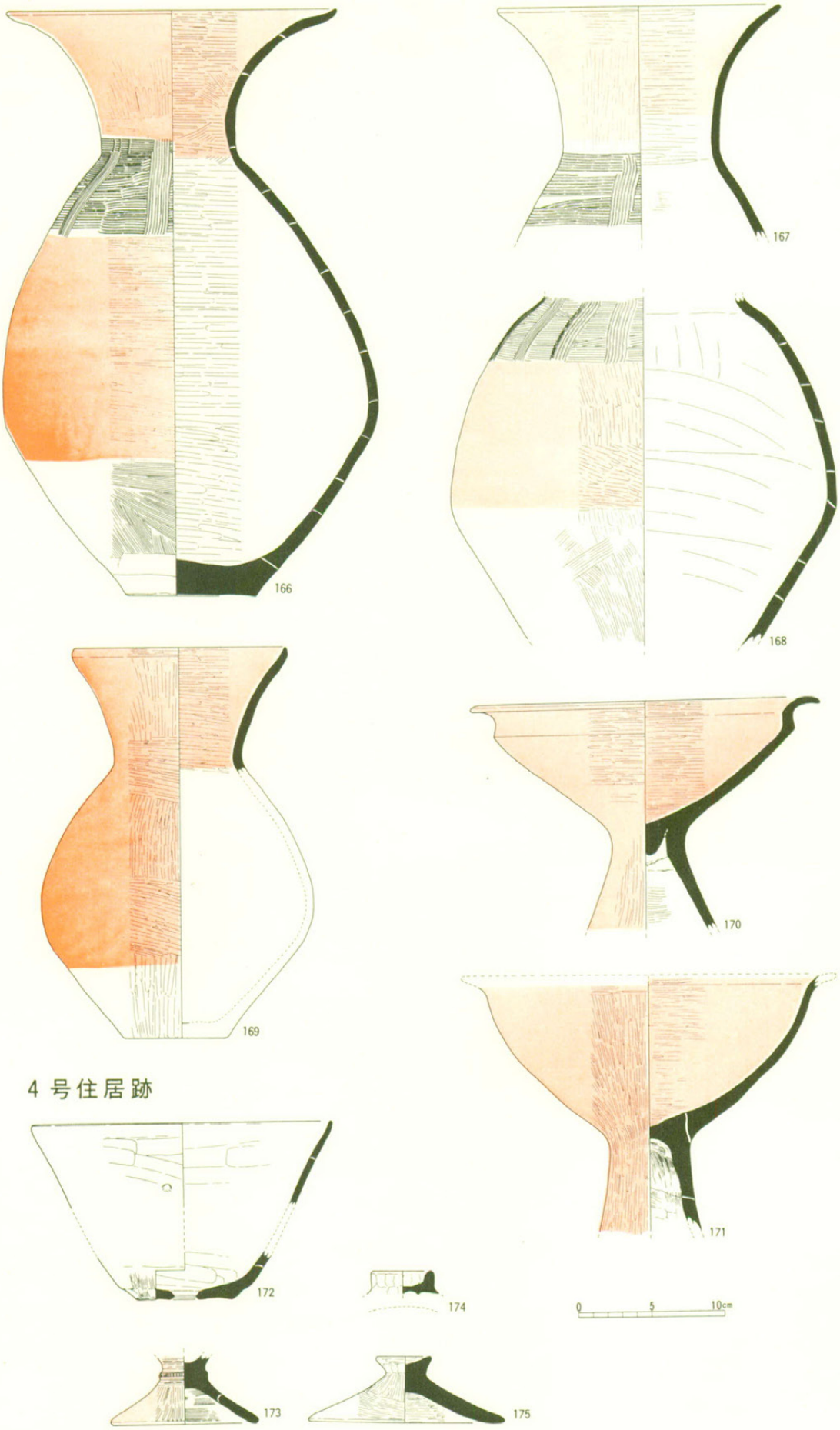
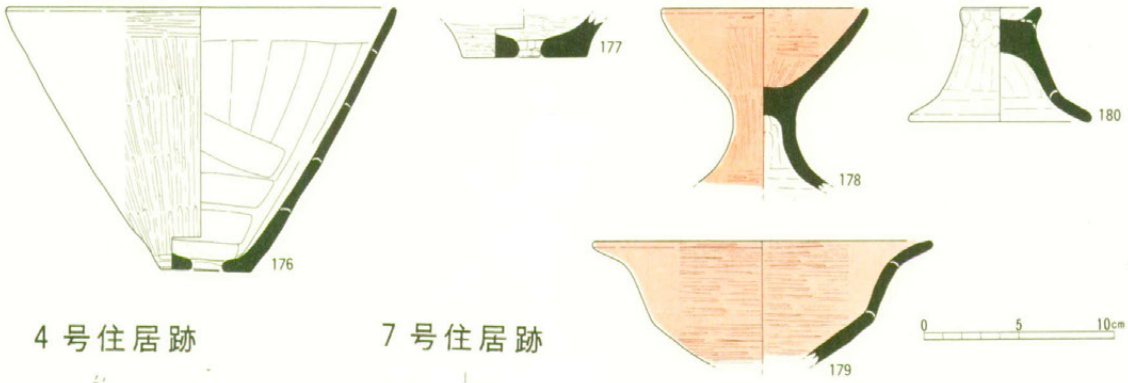
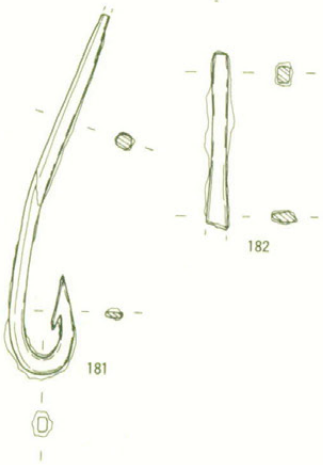


図39 弥生時代後期土器（11）（1：4）

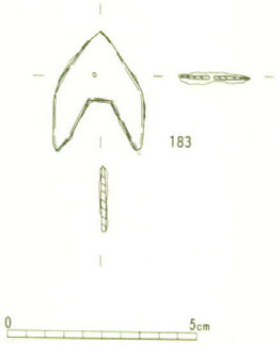
27号住居跡



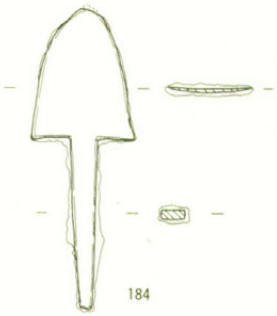
4号住居跡



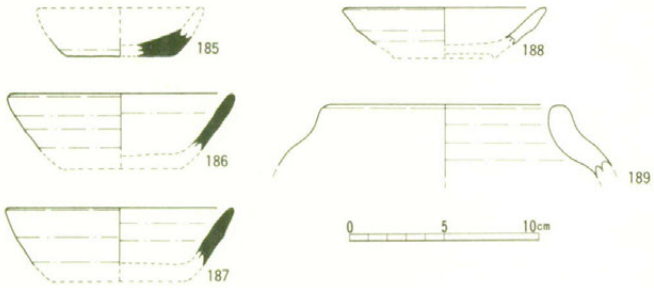
7号住居跡



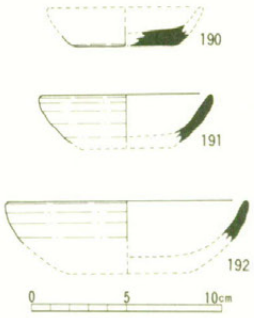
古墳周溝



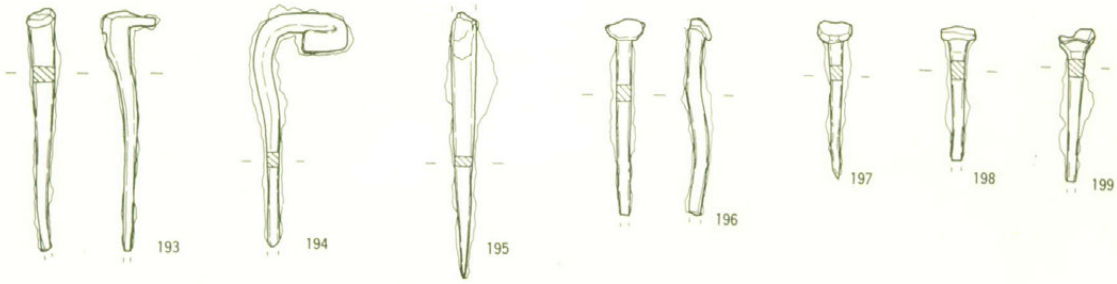
中世　Ⅲ区



Ⅳ区



Ⅳ区 竪穴



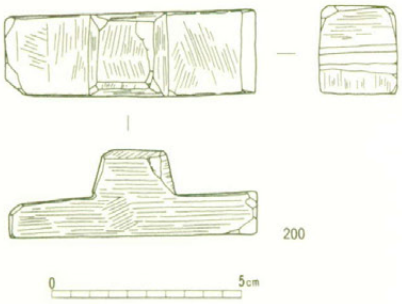


図40　弥生時代後期土器（12）（176～180、1：4）、弥生時代後期鉄製品（181～183、1：2）、古墳時代鉄製品（184、1：2）、中世土器・陶磁器（185～192、1：4）＜185～187・190～192は土師器、188は16Ｃ東海系陶器、189は瓦質陶器。＞、中世鉄製品、石製品（193～200、1：2）＜鉄製品はすべて和釘、200は凸状滑石製品。＞

第Ⅳ章　結　　語

大町市の市街地東方から、明科町の押野まで続く段丘の北の端に古城遺跡は立地している。この段丘上は遺跡の分布が濃密なところであるが、とりわけこの遺跡のある松崎集落と南の館の内、その東の常光寺木舟、さらに南の丹生子(にうのみ)集落にかけては、弥生時代から中世にいたる大遺跡地帯であることが早くから知られている。先年の館の内県営住宅敷地内の調査と古町遺跡、今回の古城遺跡の調査で、この地域が大町市の歴史にとってたいへん重要な所であると、認識を新たにした次第である。

古城遺跡の調査区域は、送電鉄塔の敷地その他の狭い範囲で、しかも区域はバラバラに散在しているのだが、検出された弥生時代中、後期の竪穴住居跡は切り合って計29軒、それに方形周溝墓の一部らしい溝や古墳、土拡、中世の居館の施設まで及んでいる。弥生時代の竪穴住居跡は、そのほとんどがこの地方の特色といってもよい埋甕炉や、石囲いの埋甕炉をそなえているのが印象的であったし、たくさん出土した土器はこの地方の弥生式土器の標準となりうるものであろう。もしこの遺跡を全面調査したならば、どのようなものが現れるか、ちょっと想像のつきかねるところがある。

古城遺跡のあるところは、段丘上でも少し高いところで、遺跡の東から南にかけてはやや低湿なところであるし、段丘の下には農具川が流れていて、その流域も低湿地であり、花見(けみ)の地名がある。弥生時代人が住み暮らすにはもってこいの環境であり、当時の稲作に向いた低湿地も広いのである。周辺の同時代遺跡いくつかを含めて、ちょっとした勢力圏、原初的な小さいクニらしいものの存在を考えてもいいような気がする。

古城の名のとおり、ここはまた中世の土豪の居館跡である。南方の館の内集落のあるところが仁科氏の居館のあったところであるが、東北方の丑館とともにここは北方に備えての構えであったのかも知れない。そんなことでこの館は仁科氏自身の別館として使われていたのか、親戚や被官の居館としても重い立場にあった人物の居館であったろう。いま地表に見られるのは東北隅の土居ばかりであるが、もとは四方に土居と堀をめぐらし、門や櫓などもある威儀ある構えであったことは想像に難くない。

発掘調査は上記のように狭い範囲のものだったので、居館の全貌を把握するというわけにはいかなかったが、それでも南と北の端の土居の痕跡や、南の土居外にあった堀のあと、使用目的はわからぬながら、居館付属の建物跡とみられる柱穴群や竪穴、遺物が検出されている。

遺物の年代によれば13世紀から16世紀にわたっているから、鎌倉時代の初めから戦国時代末まで使用されていたことが知られる。特に古城と呼ばれるのもそこに理由があるのであろう。仁科氏の館の内居館の初まりを10世紀頃と考えたいが、古城居館はそれから後に構えられ、仁科氏がいまの大町の地に移ってしまってから後にも、おそらく仁科氏滅亡に近い頃まで使用され続けていたと考えてよい。

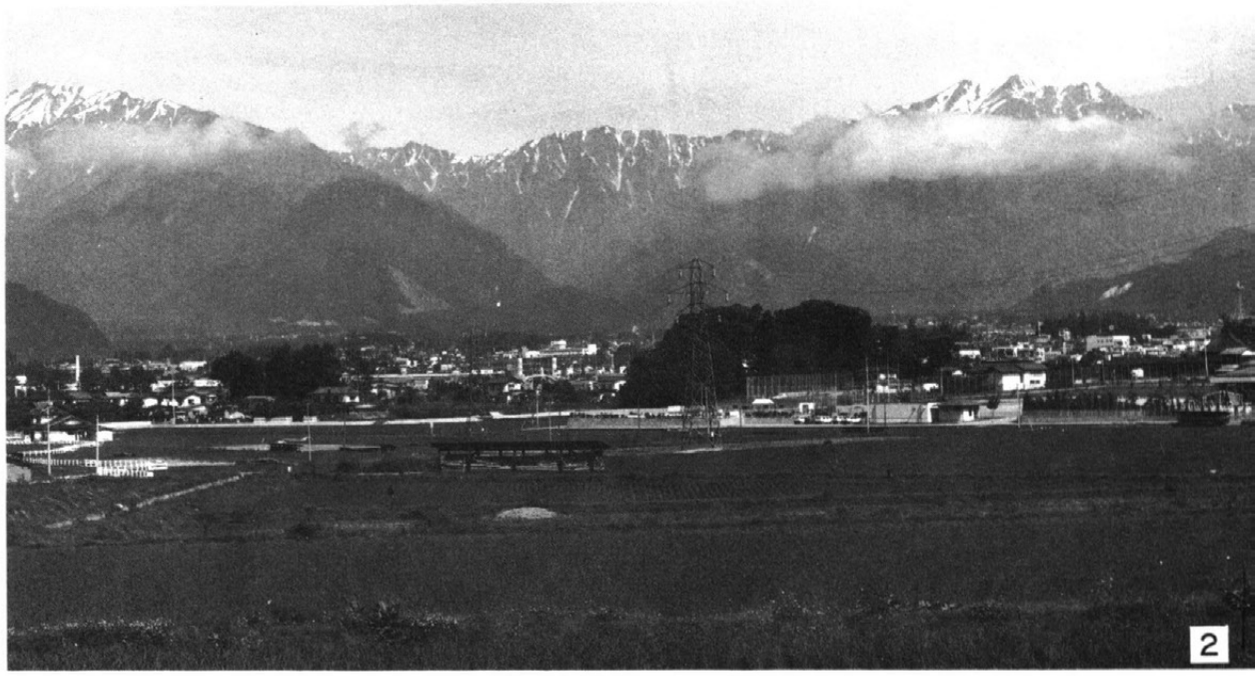
それにしても居館構築の折、おそらく地下から出土したであろう弥生式土器を見て、当時の人たちはどのように思ったことであろう。

末尾ながら発掘調査に当った方々の御苦労に対して、厚い敬意と感謝を捧げるものである。

（団長・篠崎健一郎）

1．遠景（南東より。中央の木・鉄塔のある周辺。）

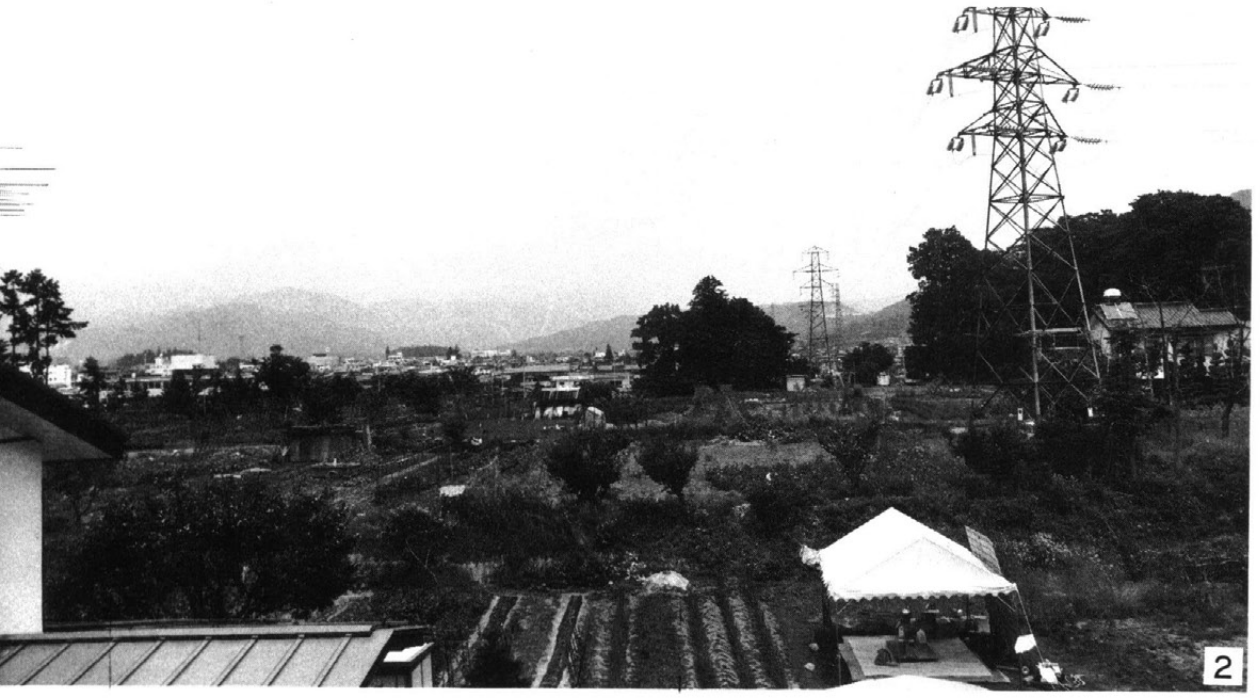
2．遠景（東より）



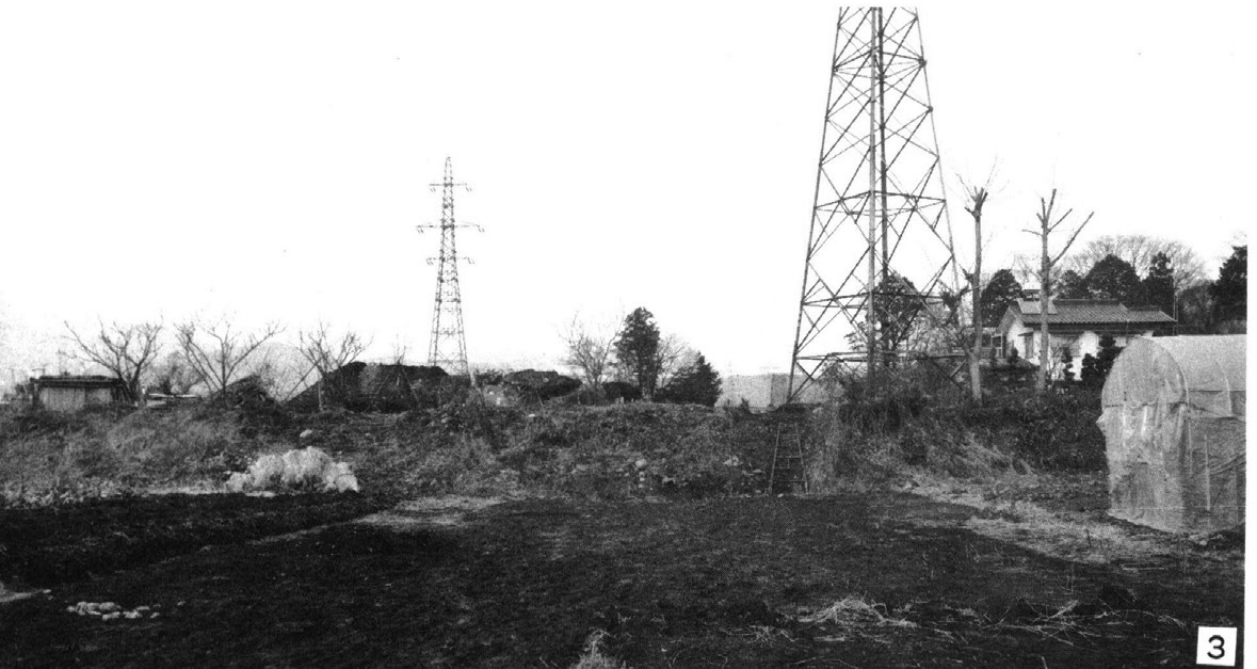
3．全景（南東上空より。大町東小学校10周年記念写真より複写。）

写真 2

1．近景（北より。木のある場所が北西側に残る土塁。）

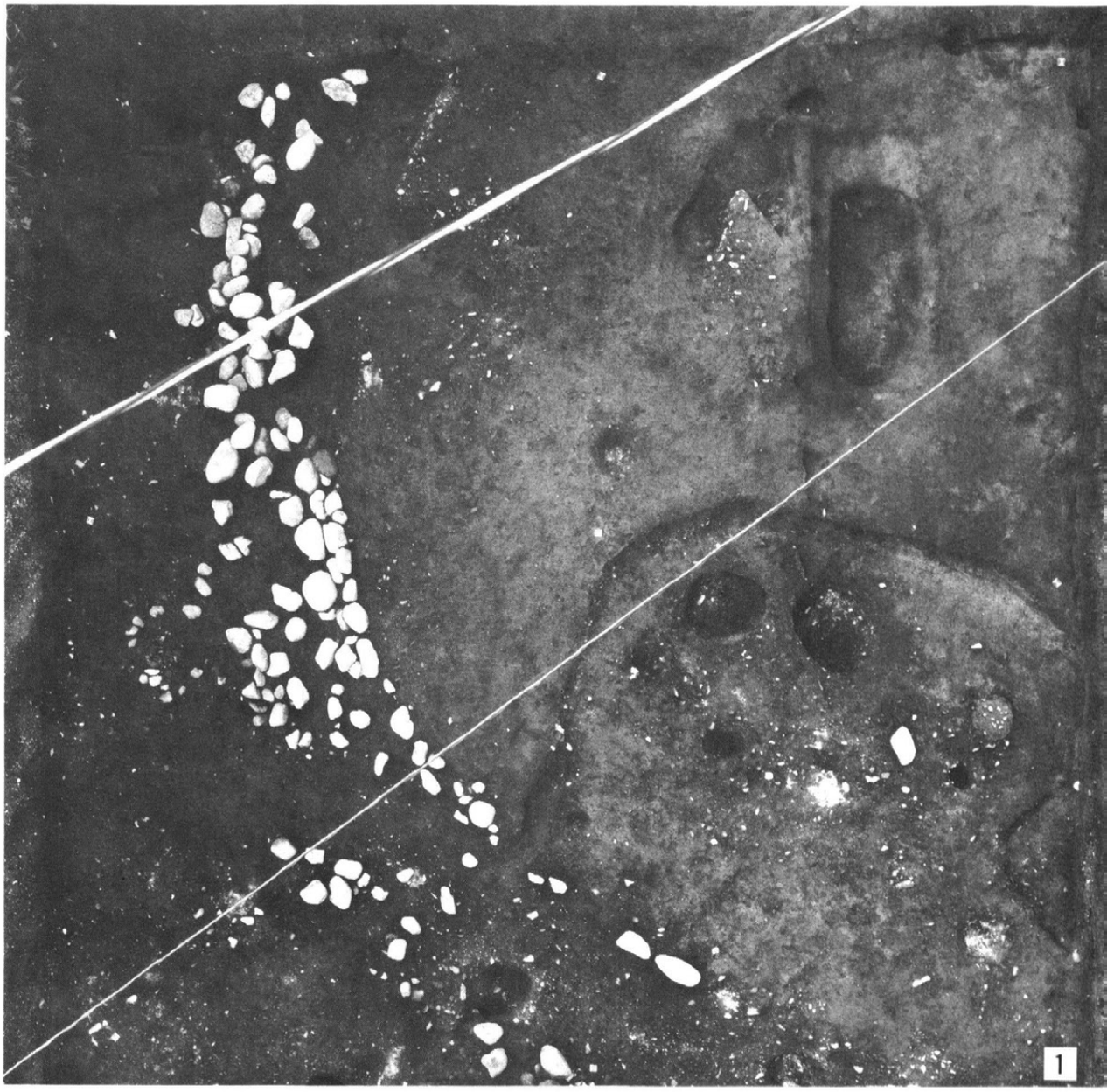


2．近景（Ⅰ区よりⅡ～Ⅳ区を望む。後方の鉄塔手前がⅢ区、前方の鉄塔がⅣ区、中央やや左がⅡ区。）



3．Ⅳ区近景（Ⅰ区より望む。脚立の置いてある土手の段が、土塁で、その手前には堀があることが確認される。）

1．Ⅰ区全景
（上空より。古墳・8・9・10号住居跡等。）



2．Ⅱ区全景
（南西より、4～7・11～13号住居跡、中世柱穴群など。）

写真４

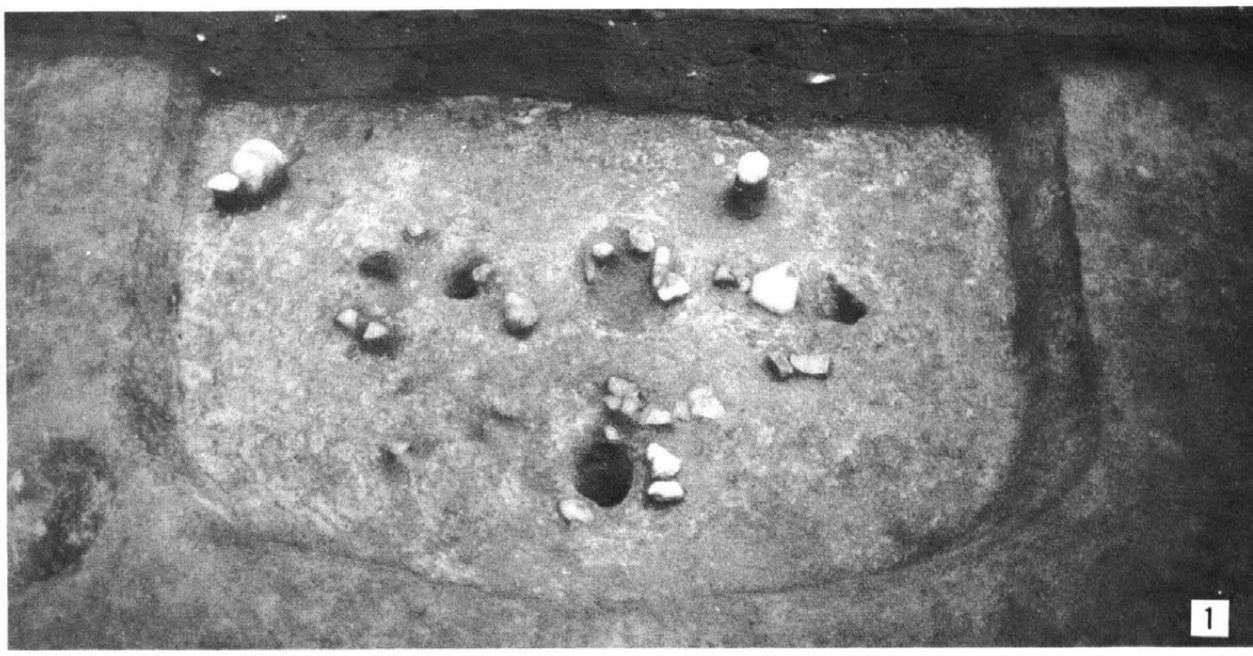
１．Ⅱ区全景（北より）

２．Ⅲ区北側全景
（南より。15・18・30～
35号住居跡など。）

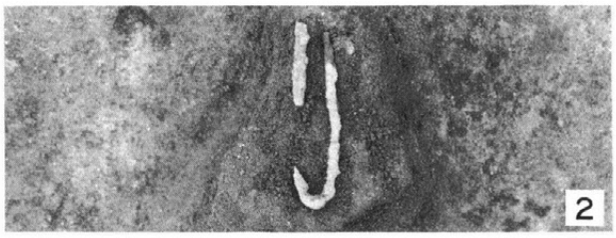
３．Ⅲ区北側全景
（南東より）

Ⅱ区

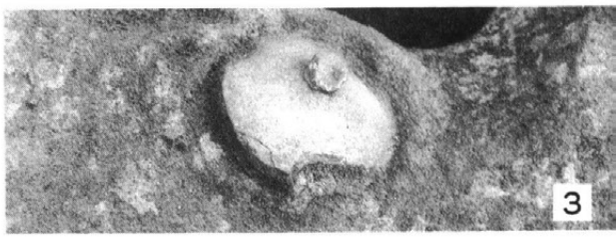
1．4号住居跡
遺物出土状況
（北より。中央が炉である。）



2．4号住居跡鉄製釣針等出土状況



3．4号住居跡土器（蓋）出土状況



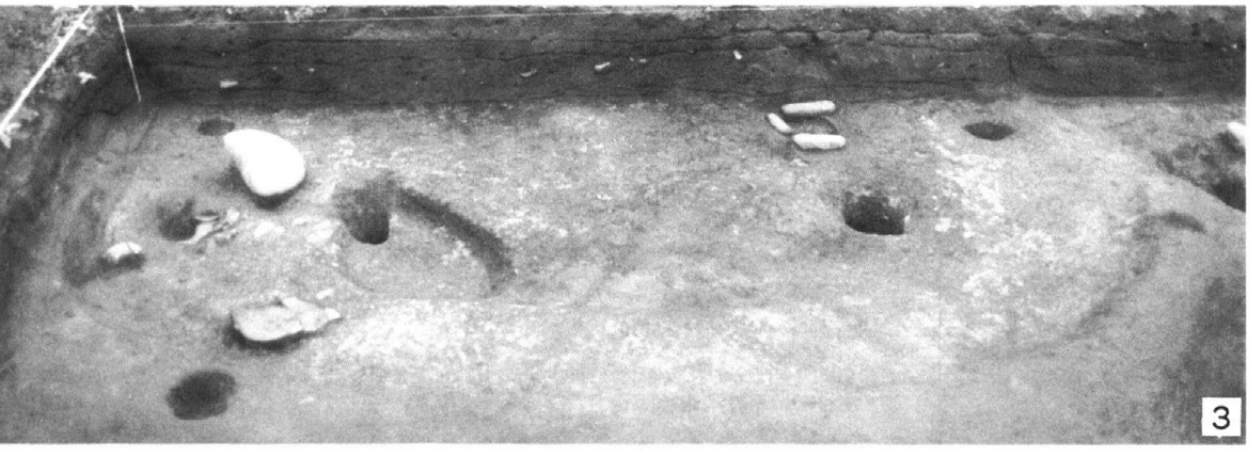
4．4号住居跡全景
（北より、炉除去後。炉の左右に主柱穴がある。）

5．5号住居跡遺物出土状況（東より。多くの土器が床面より約5～10cm浮いた状態で出土）

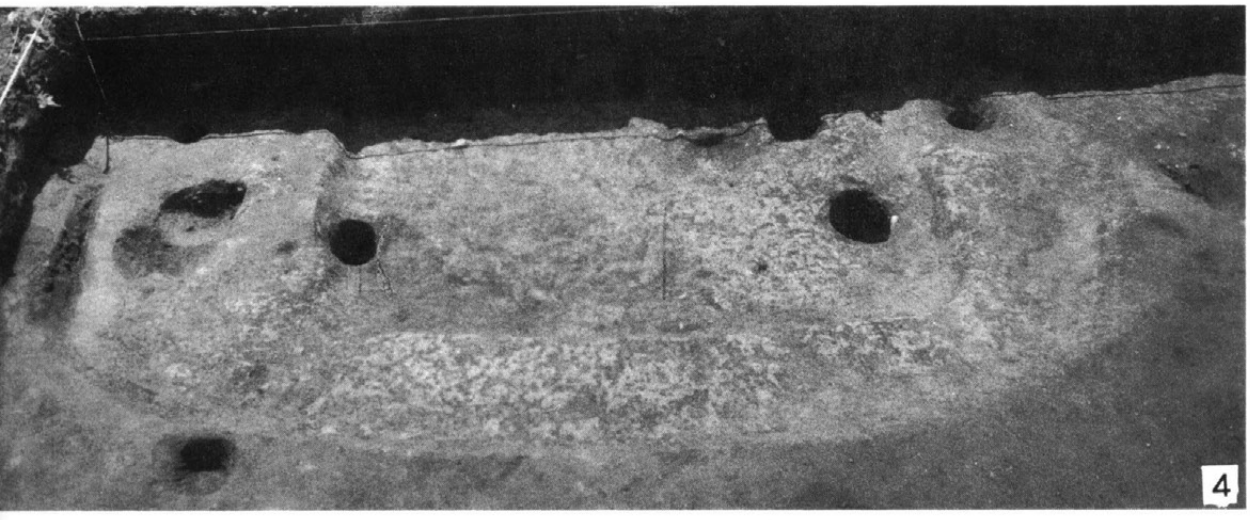
Ⅱ区

1．5号住居跡土器出土状況

2．5号住居跡P．5（ピット内に土器（壺）が貼りついたような状態で出土。周囲には粘土塊が検出される。おそらくは、貯蔵穴的な用途と思われる。）



3．5号住居跡（新）全景（東より。中央が一段下がりベッド状遺構的になる。また、中央は貼床されており、その下層から旧5号住居跡が検出される。炉は石囲い埋甕炉。）



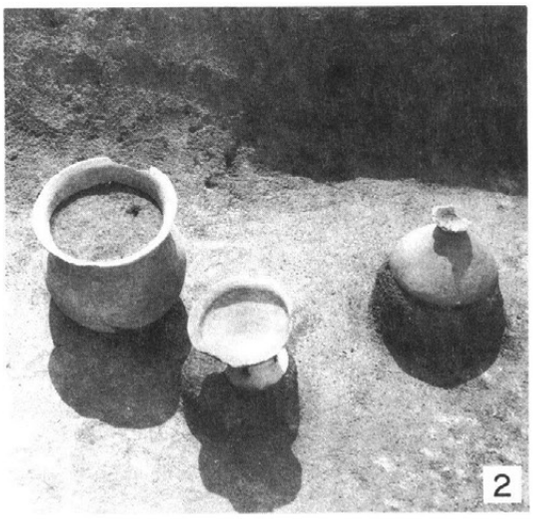
4．5号住居跡（旧）全景（東より。周囲が一段高くなるベッド状遺構となりそこに貼床して、新しい住居としている。）

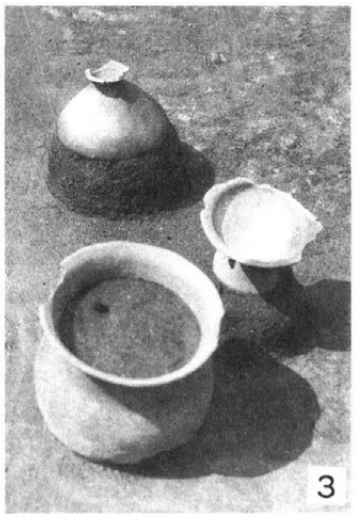
5．7号住居跡全景（5柱北壁を切る。東より。）

Ⅱ区

１．６号住居跡全景
（南より。11、12住を切る。南東部に土器の完形品が３個体（高杯２・甕１）が並んで出土した。その周辺には甕が２個体あった。主柱穴は、６本と思われ、片側の３本が検出された。炉は、石囲い埋甕炉である。）

２～４．土器出土状況





５．12号住居跡全景
（南より。６住を切る。主柱穴は４本で、炉は石囲い炉で１部に土器片を使用していた。）

Ⅰ区

1．8号住居跡
（南より。古墳、10号住居跡に切られる弥生時代中期の住居跡である。床面北東部に、剥片集中が見られた。主柱穴は4ケと思われるが、2本しか検出できなかった。炉は地床炉であり、北壁近くに貯蔵穴と思われるピットが2ケある。）

2．8号住居跡の剥片集中

3．9号住居跡土器出土状況

Ⅲ区

4．14号住居跡土器出土状況

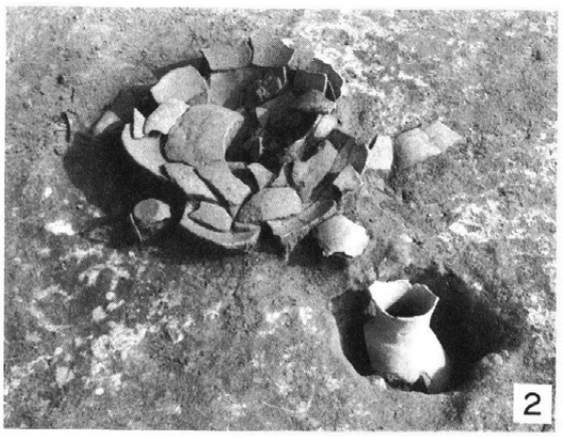
5．14号住居跡全景
（南より。主柱穴は4ケ。炉は石囲い炉で、崩れていた。入口は東側と思われ、その北側には貯蔵穴と思われるピットがある。）

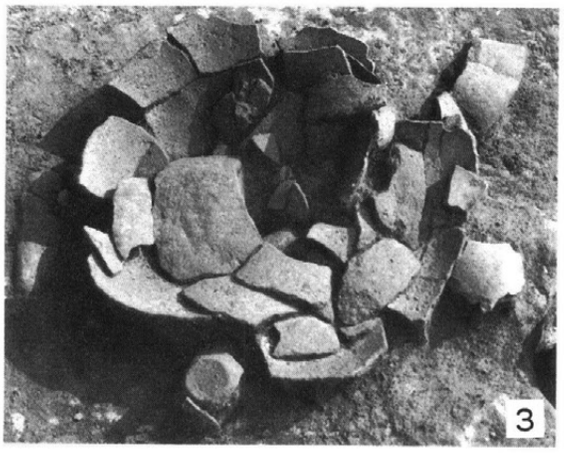
Ⅲ区

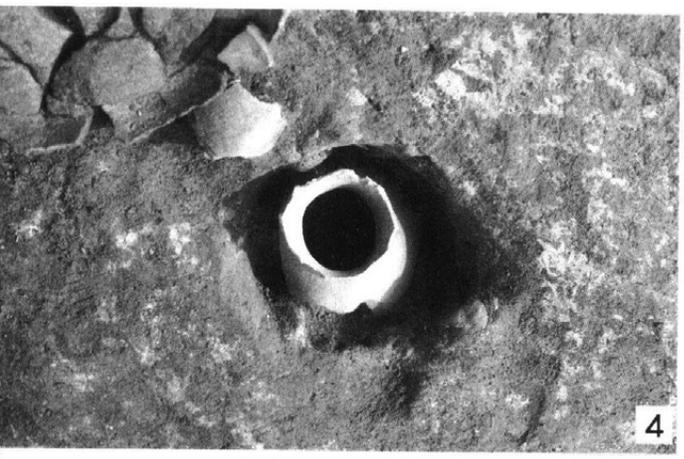
1．14号住居跡全景
（東より）

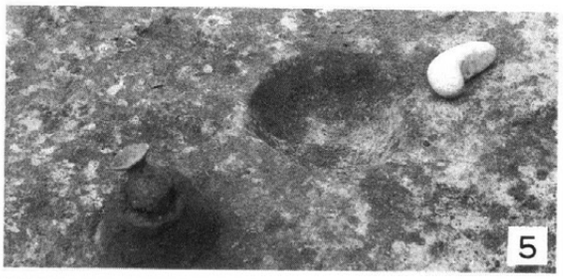
2．15号住居跡
南半分検出状況（東より）

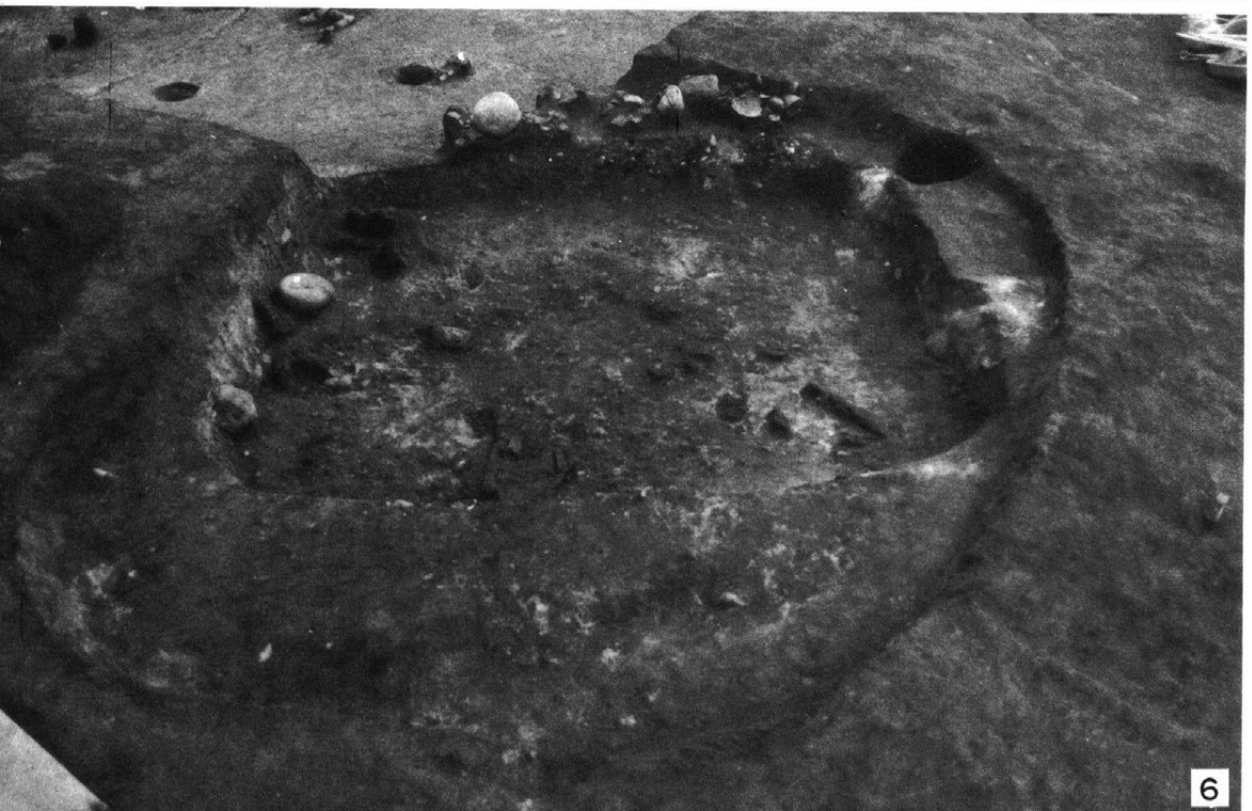
3．15号住居跡全景
（西より。大型な住居跡で、炉は石囲い埋甕炉。炉の南西にはピット内に壺が入れられた状態で出土。）











Ⅲ区

1．15•33号住居跡
（南より。15住は17•33住を切っている。）

2．炉周辺遺物出土状況

3．炉上の壺出土状況

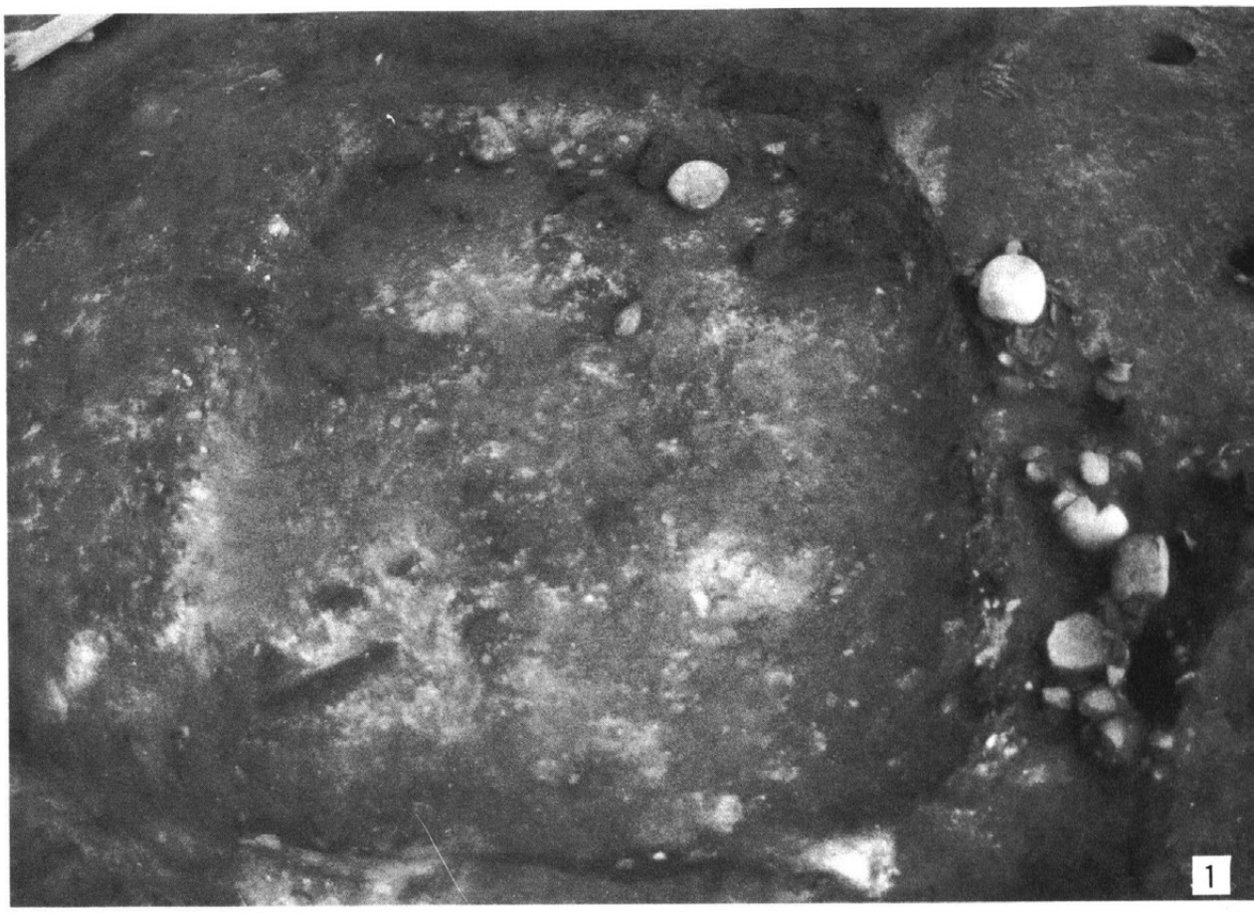
4．炉南西ピット内壺出土状況

5．小型台付鉢、勾玉状石器出土状況

6．16•26号住居跡全景
（西より。26住は16住を掘り込んでいる。26住は焼失家屋で炭化材が多く出土。16住は17住を切っている。16住の東壁沿いには土器が集中して出土。）

Ⅲ区

1．16・26号住居跡全景（南より。26住の主柱は4本で、炉は掘り方のみ検出された。炉の北西には焼土が見られた。）



2．16号住居跡土器出土状況

3．26号住居跡土器出土状況（東海系S字口縁台付甕）

4．17号住居跡（北西より。15・16住に切られる。炉は2ケ所にあり、石囲炉と焼土のみのものがあった。主柱穴は4本柱であったと思われる。）

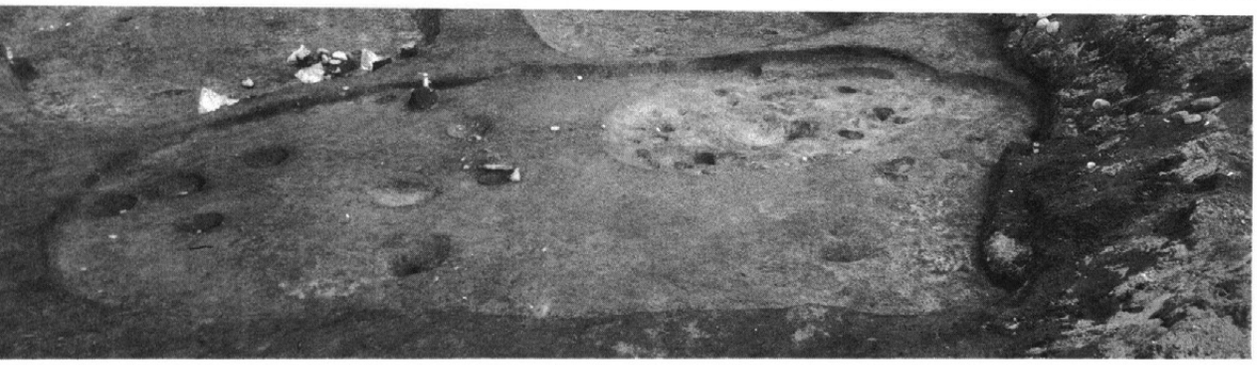
Ⅲ区

1．17号住居跡
（南西より）

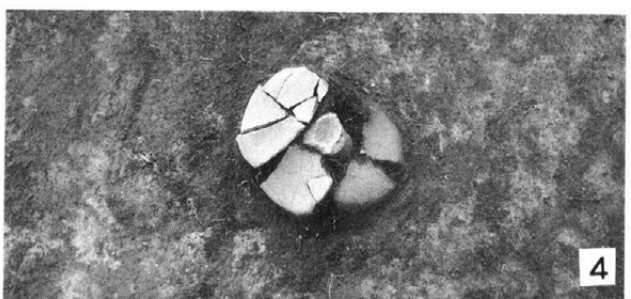
2・3．18•35号住居跡
（18住は35住を切り、34号住居跡に切られる。炉は2ケ所にあり、石囲い埋甕炉と掘り方のみ残ったもの。主柱穴は4本柱穴である。）

2．（南より）

3．（西より）



4・5．18号住居跡土器出土状況



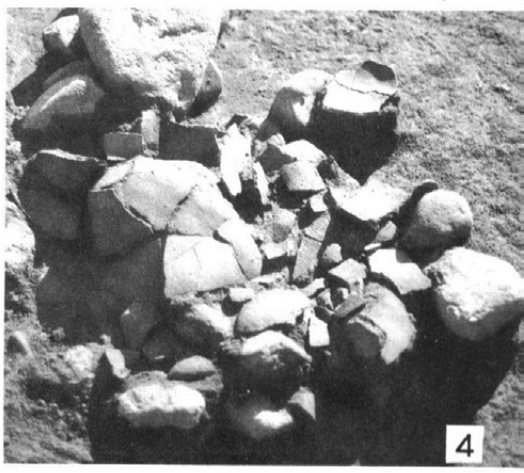
Ⅲ区

1．18号住居跡
南壁側（南より）

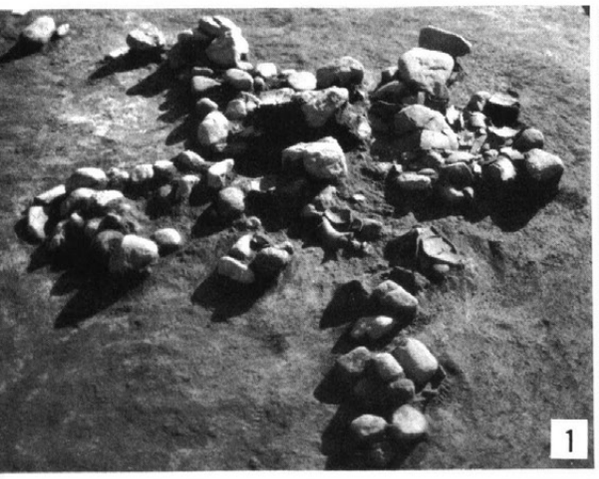
2．21号住居跡
礫、遺物出土状況
（東より。４ケの主柱穴で、炉は１ケの石が附属する埋甕炉であった。炉上～西側と炉の北西には、礫の集石が見られた。）

3．21号住居跡
（北より）

4．21号住居跡
集石内土器出土状況



5．21号住居跡
集石



Ⅲ区

1・2．21号住居跡
炉上～西側にかけての集石

1．（北より）

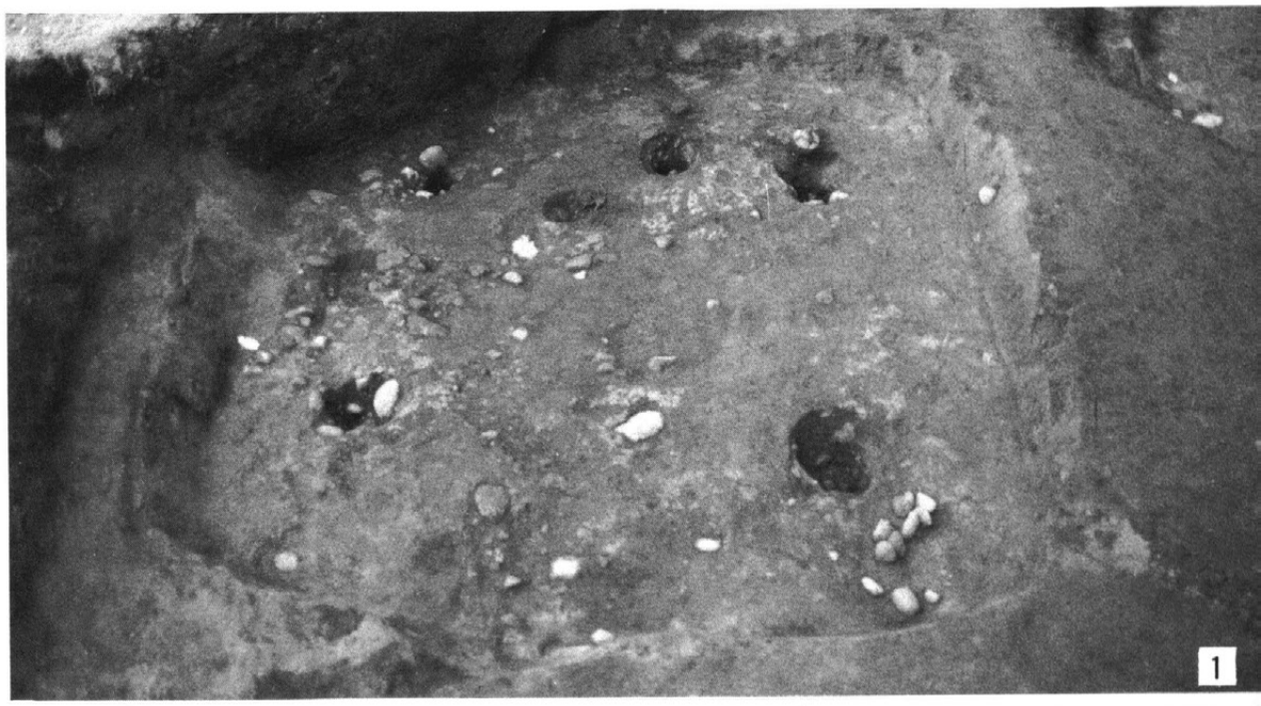
2．（東より。最も手前の2つに折れた石は、炉石である。）

3．19号住居跡
（北より。4本主柱で、炉は掘り方と土器が残っているだけであるが石囲いのあった可能性もある。北東隅には、編み物用石錘と思われる礫が見られた。）

4．19・20・23号住居跡
（東より。19住と23住は20住を切る。23住は新旧2回の建て直しを行っている。）

Ⅲ区

1．19号住居跡
（東より）



2．23号住居跡
（埋甕炉と貼床された石囲炉の２ケの炉があり、住居の形も北東壁にやや張り出す部分が見られ、２回の建て直しが考えられる。）

3．22号住居跡・土坑１
（北より。22住は土坑１に切られる。土坑１は中世の土坑。）

Ⅲ区

1．30号住居跡・土坑２
（南より。30住は土坑２に切られる。土坑２は古墳時代の土坑である。土坑２の北側にあるピットは、30住の主柱穴の残ったピットである。手前の南壁際のピットは貯蔵穴であろう。床面の東側部分に２ケ所、赤色塗料が集中する部分が見られた。）

2．30号住居跡・土坑２
（東より）

3．30号住居跡・貯蔵と思われるピット

4・5．30号住居跡
遺物出土状況

Ⅲ区
31号住居跡

1．（南より）

2．（西より）
（4本主柱穴の住居で、炉は石囲い埋甕炉である。西側が入口と思われ、入口に2ケ所、奥に1ケ所の貯蔵穴と思われるピットがある。）

3．入口と思われる附近の遺物出土状況

Ⅲ区

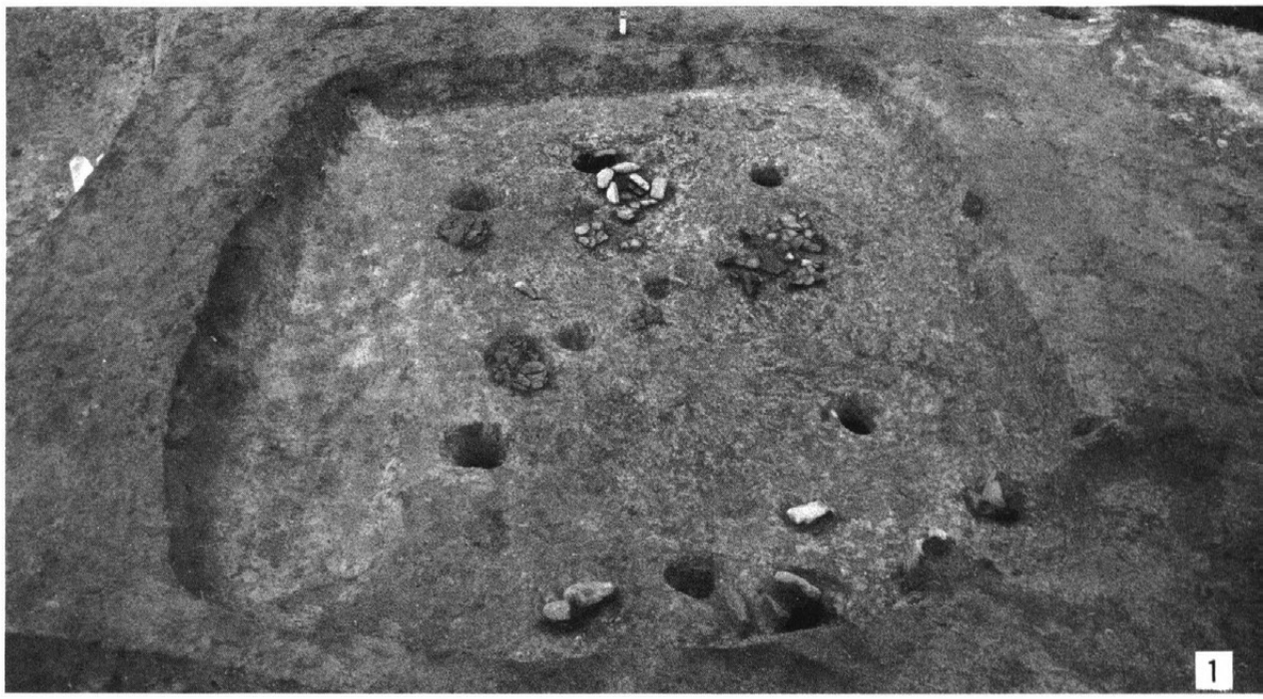
1．31号住居跡
炉附近状況

2～4．31号住居跡
遺物出土状況

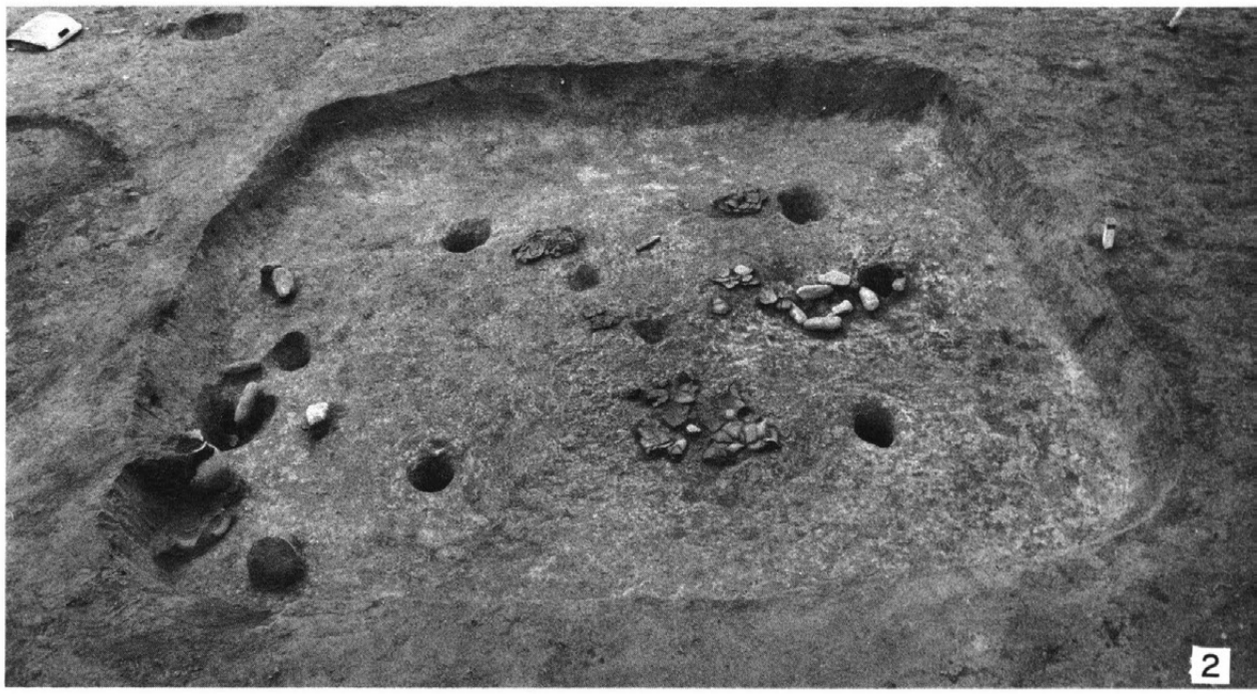
5．32号住居跡
遺物出土状況（北東より）

Ⅲ区
32号住居跡

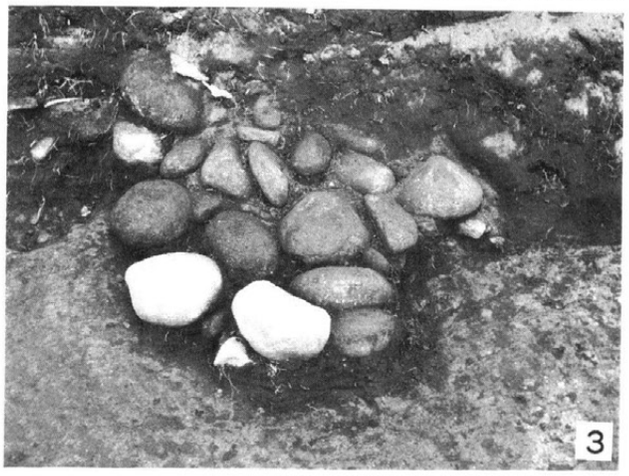
1．（西より）



2．（南より）
（4本の主柱穴で土器片敷きの石囲い炉である。西壁側が入口と思われ、その南側には、貯蔵穴と思われるピットがある。また、その南側からは、完形の壺・高杯が出土した。）



3．貯蔵穴南側
遺物出土状況



Ⅲ区

1～4．33号住居跡

1．（西より）

2．（北より）
（4本主柱穴の片側2本の主柱穴が検出された。また、北西壁際部分にはロームを固めた、1段高くなった部分が見られた。）

3．集石

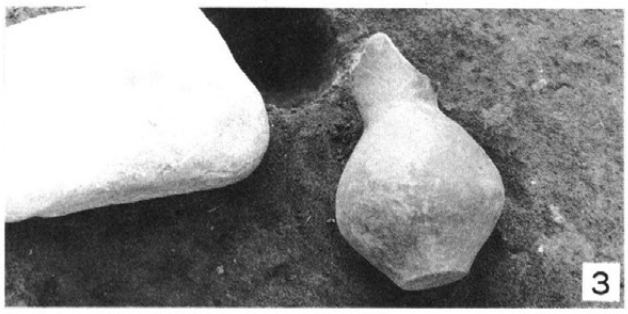
4．高杯出土状況

5．34号住居跡
（西より。4本主柱で、炉は石囲い炉である。炉の南側に遺物が集中して出土した。炭が多く、焼失家屋の可能性もある。18・35住を切る。）

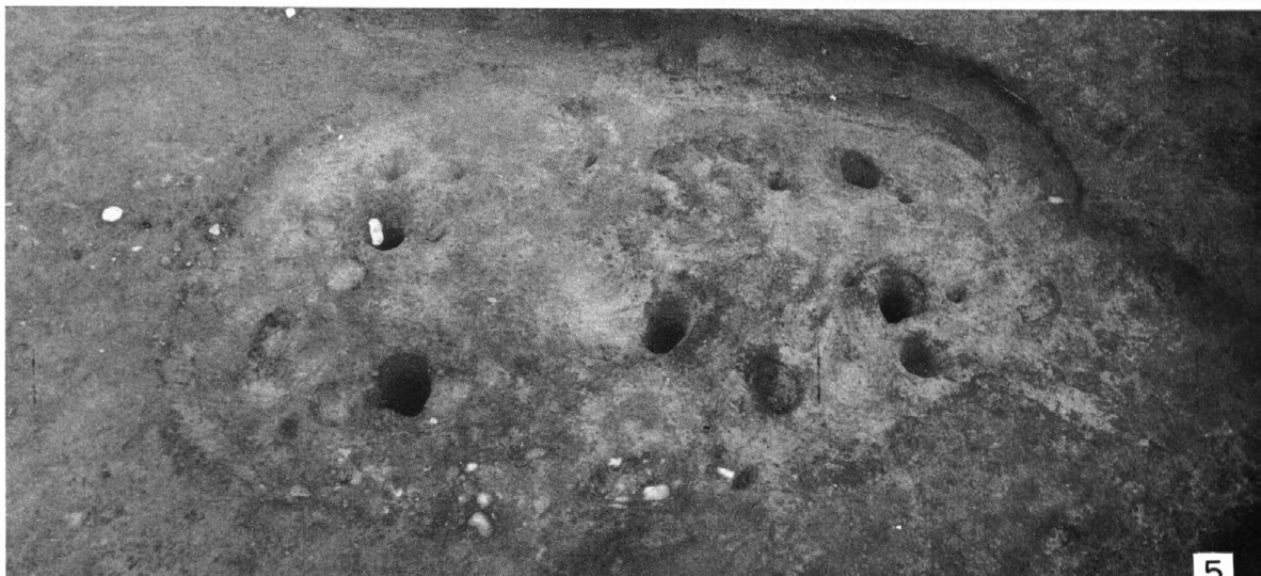
Ⅲ区
1～4．34号住居跡

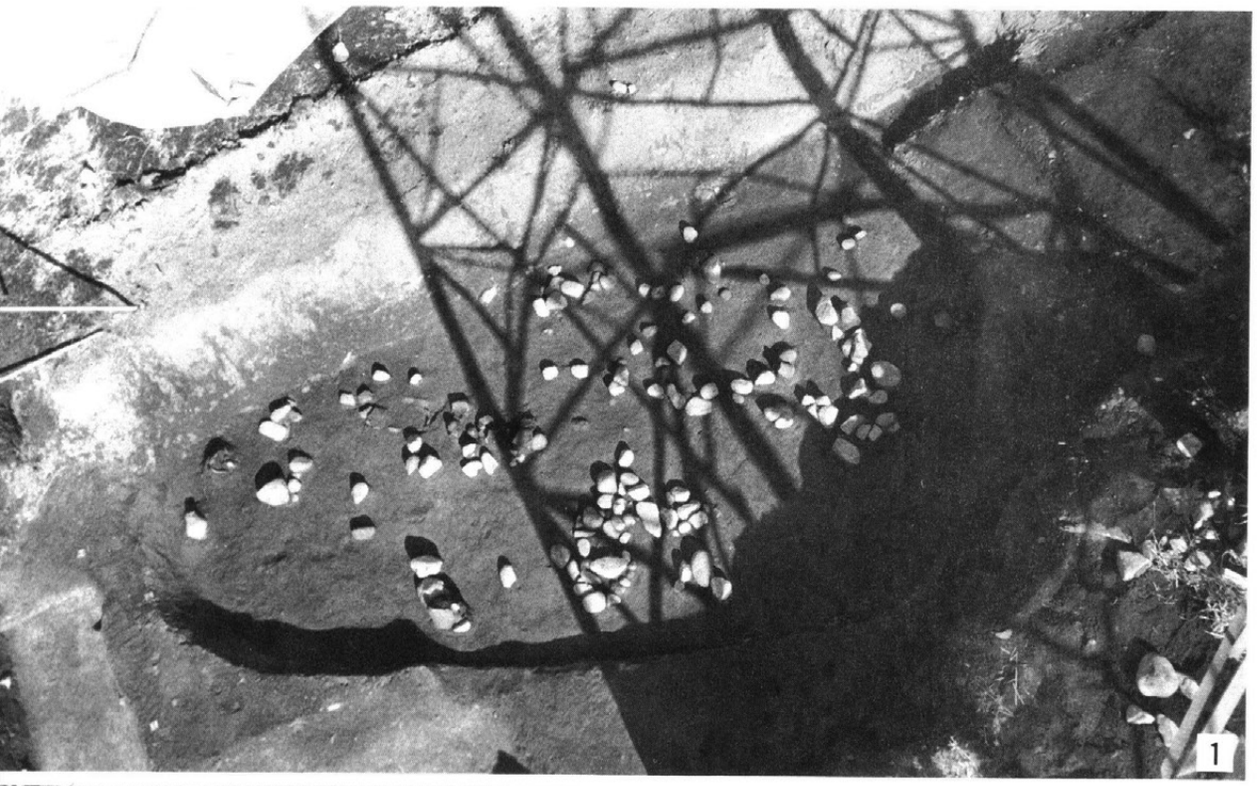
1．（南より）

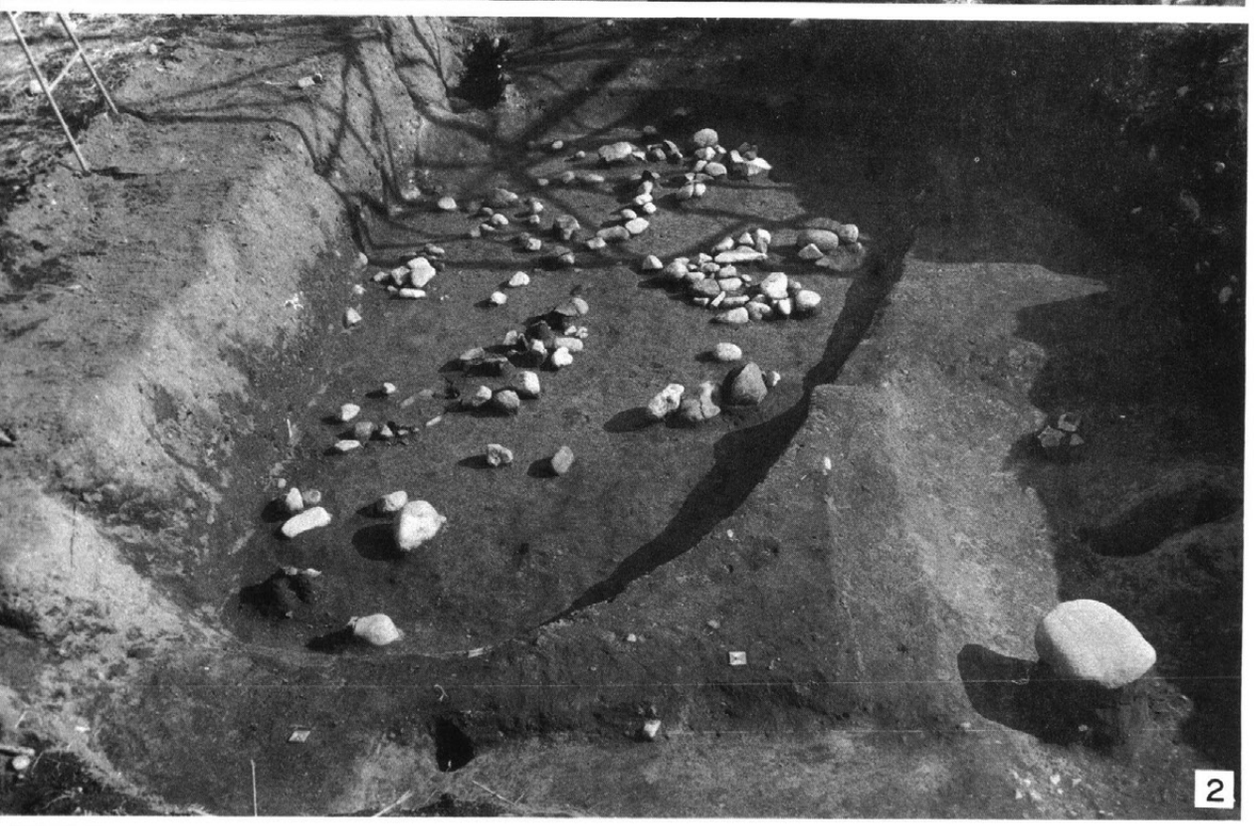
2～4．遺物出土状況

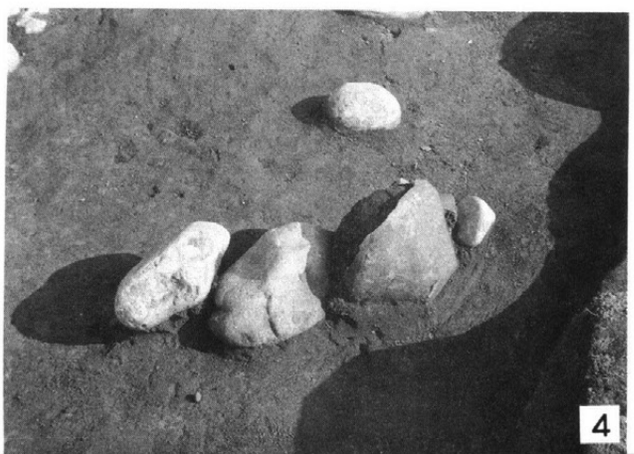


5．35号住居跡
（西より。主柱穴ははっきりとせず、炉は地床炉と思われ、焼土のみ残る。床面には多くの小ピットが見られる。）









Ⅳ区

24・25号住居跡
遺物・礫出土状況

1．（南より）

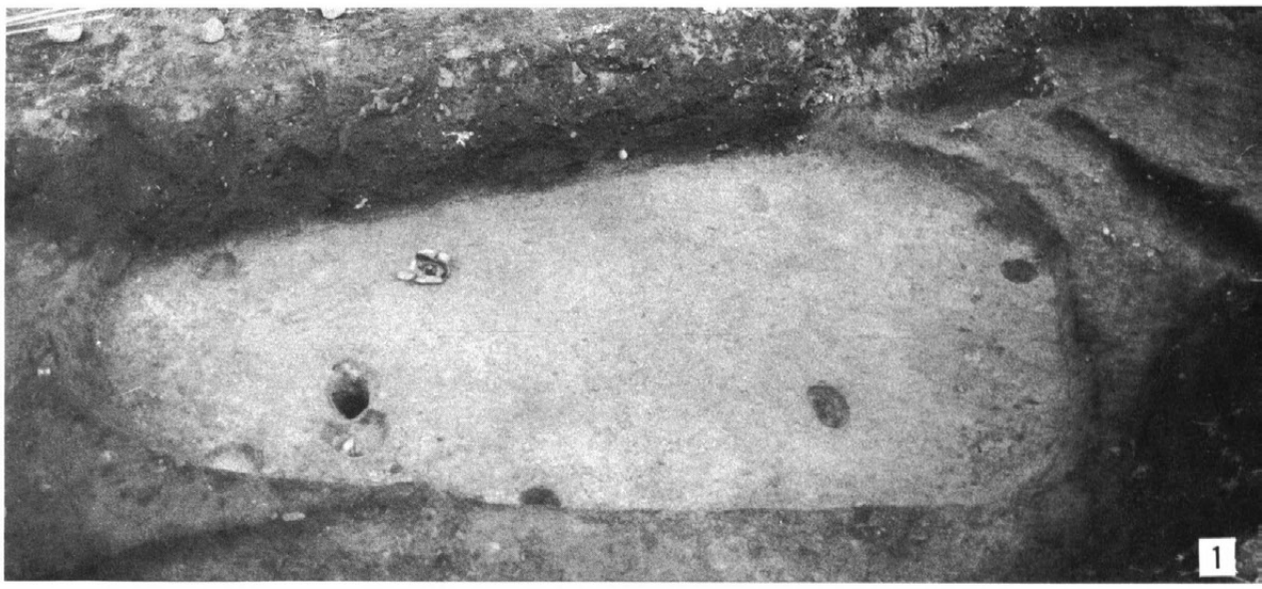
2．（西より）

3・4．土器出土状況
（24住は25住を切る。24住内には礫の散布が多く、その中に遺物も多く出土した。）

Ⅳ区

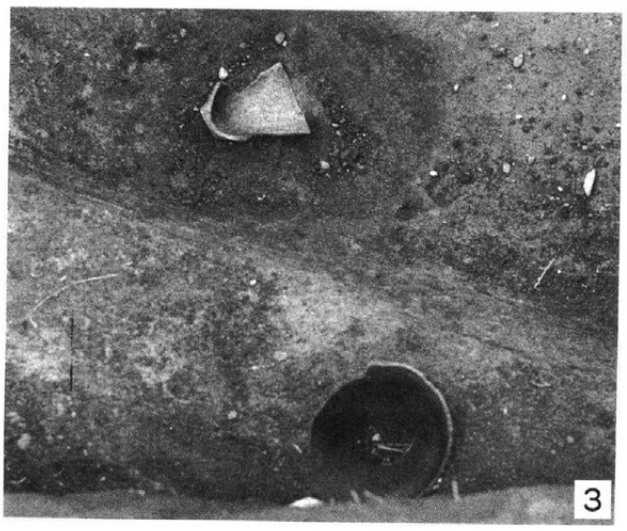
1・2．24・25号住居跡

1．（南より）



2．（西より）
（4本主柱のうち3本の柱穴が検出された。炉は石・土器囲い、土器片敷き石囲い炉であった。）

3．27・28号住居跡
（西より。土壁土層下より検出された住居跡で、27住は28住を切る。28住は埋甕炉だけが検出された。）



1～3．Ⅳ区27・28号住居跡

1．（北より）

2．遺物出土状況

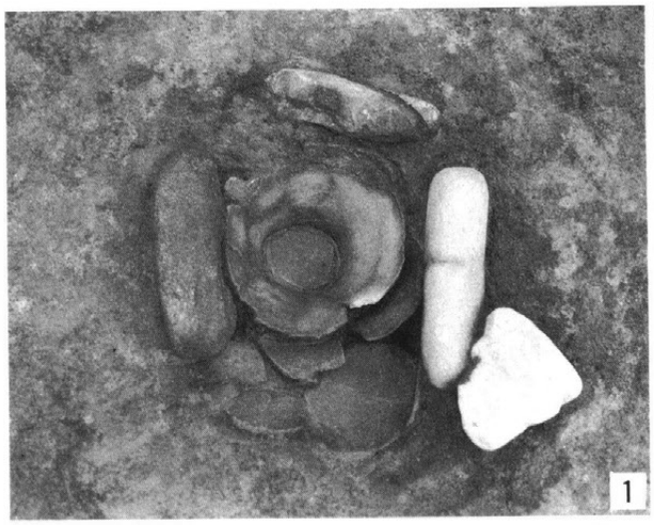
3．28号住居跡埋甕炉と27号住居跡遺物出土状況（上の27住遺物下からは貯蔵穴と思われるピットが検出された。）

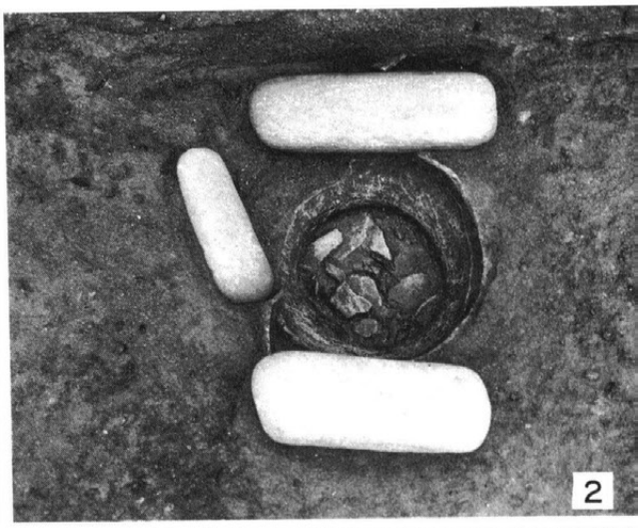
4．Ⅰ区溝1（方形周溝墓の北西隅部分とも思われる。）

住居跡・炉

1．4号住居跡

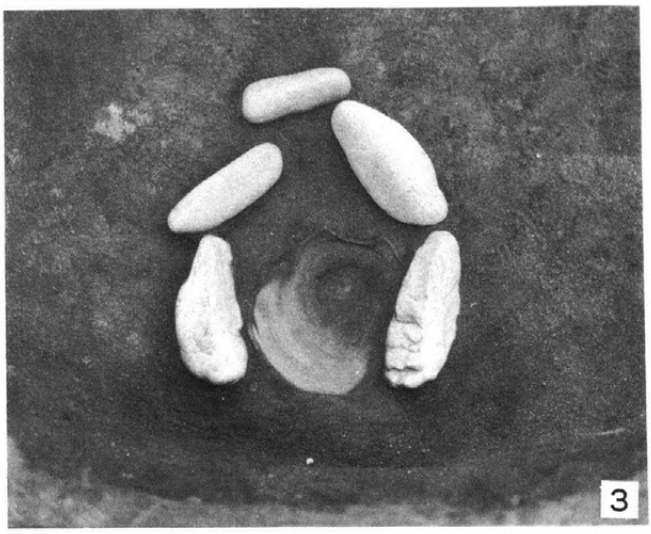
2．5号住居跡

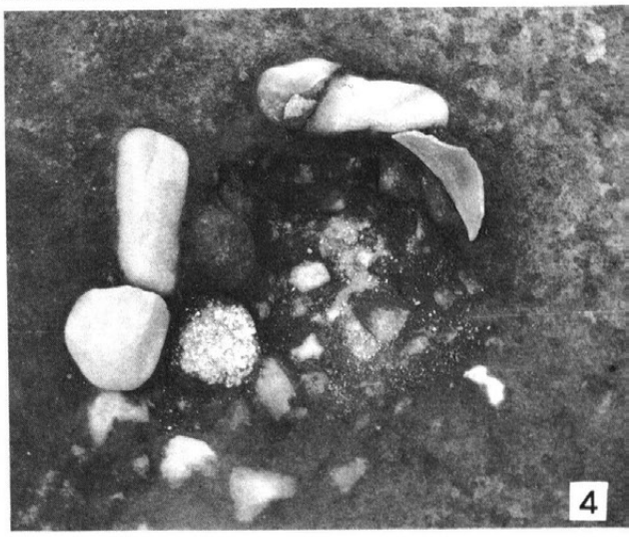




3．6号住居跡

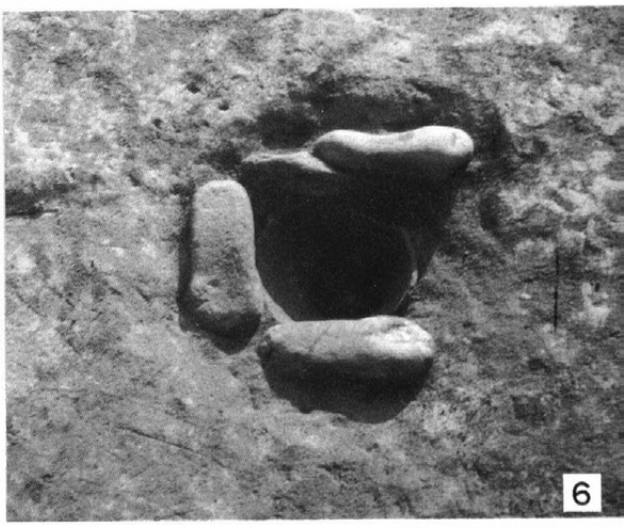
4．12号住居跡





5．14号住居跡

6．15号住居跡



7．17号住居跡

8．18号住居跡